

上滝五反畑遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1999

日 本 道 路 公 団
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第258集

上滝五反畑遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1999

日 本 道 路 公 団
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



南上空より 遺跡北側を東西に開越自動車道。南北に北関東自動車道の建設工事と発掘調査。
遺跡の南は水田地帯



1面7号水田全景（上空より）扇形に農具の跡がみられる



1・2面出土の青磁



1面出土の土製大黒像と罐小杯

序

北関東自動車道は、本県高崎市の関越自動車道から分岐し、茨城県那珂湊にいたる延長約150kmの高速自動車国道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市及び東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されております。

この北関東自動車道の高崎～伊勢崎間約15kmの建設に先立って、平成7年6月から36の遺跡で発掘調査が行われておりますが、当事業団ではその内、31の遺跡の発掘調査を担当しております。本書『上滝五反畑遺跡発掘調査報告書』は、その発掘調査報告書第1号として刊行するものです。

本遺跡は、江戸時代・平安時代・古墳時代の火山灰に覆われたそれぞれの水田跡等が確認され、当時の農業経営や火山の噴火という自然災害と人間との関わりを知る上で、また、古代の群馬県平野部の土地利用を知る上で貴重な遺跡であると確信しております。さらに、東に延びる北関東自動車道地域の各遺跡で発見されている水田跡研究の出発点となる遺跡でもあります。

この報告書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様の研究にも大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成11年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は、北関東自動車道建設に伴い事前調査された上滝五反畑遺跡（遺跡略号KT-001）の発掘調査報告書である。本書における報告は、上滝五反畑遺跡から検出された遺構・遺物を対象とする。
2. 上滝五反畑遺跡は、群馬県高崎市上滝町字五反畑493-1・494-1・495-1・830-1・830-4・829-1・854・831-1・832-1・832-5・832-6・833・834・836-1・838-4番地、字福嶋通692-1番地に所在する。
3. 上滝五反畑遺跡の遺跡名は小字名の五反畑の前に大字名の上滝を付し、大字名小字名で遺跡名としている。
4. 発掘調査と平成10年度の整理事業は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。平成11年度の整理事業は、日本道路公団から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受け実施したものである。
5. 発掘調査期間、整理期間は次のとおりである。

発掘調査	平成8年度調査	平成9年1月7日～平成9年3月31日
	平成9年度調査	平成9年4月1日～平成9年9月30日
整理事業		平成10年4月1日～平成11年12月31日
6. 発掘調査及び整理事業の体制は次のとおりである。

事務担当	菅野 清、小野宇三郎、原田恒弘、赤山容造、蜂巣 実、渡辺 健、住谷 進、神保信史、水田 稔、小淵 淳、坂本敏夫、中東耕志、西田健彦、国定 均、井上 剛、小山建夫、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、岡島伸昌、片岡徳雄、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子、山口陽子、本地友美、北原かおり、狩野真子、若田 誠、松下次男、浅見宣記、山本正司、吉田 茂	
調査担当	平成8年度調査	榎澤健二、金井 武
	平成9年度調査	蜂巣賀里佳、斉藤英敏、佐藤理重、金井 武
整理担当	平成10・11年度	金井 武
7. 本書作成の担当はつぎのとおりである。

編 集	金井 武
本 文 執 筆	第1章第1節中東耕志、前記以外は金井 武
遺 構 写 真 撮 影	各発掘調査担当
遺 物 写 真 撮 影	佐藤元彦
金属器保存処理	関 邦一、小村浩一、土橋まり子、高橋初美
整 理 作 業	高梨房江、武永いち、高田栄子、飯田和子、永井里佳、都丸美奈子、中野和子
8. 石材鑑定は、群馬県地質研究会の飯島静男氏にお願いした。
9. 発掘調査資料、出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
10. 発掘調査及び報告書作成では以下の方々にご協力・ご指導いただいた。記して感謝の意を表す。
高崎市教育委員会、高崎土木事務所、岸田治男、南雲芳昭、地元関係者各位

凡 例

1. 挿入中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、国家座標第IX系である。
2. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は、mを用いた。
3. 遺構名称は各調査面毎に遺構の種類毎に通し番号をつけ、調査面・番号・種類で呼称した。また本文中（第3章）では節毎に調査面単位で報告している。その報告している調査面の名称は省略している。
4. 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として下記のとおりとし、各図にスケールを入れた。
 遺構 土坑（平面図・断面図）1：60
 掘立柱建物（平面図・断面図）1：60
 溝（平面図）1：100、1：150、1：200、（断面図）1：40
 水田（平面図）1：100、（断面図）1：40
 その他の遺構については逐一縮尺率を示した。
 遺物 土器1：3、石器1：3、（火打ち石1：1、2：3）、古銭1：1、土製品1：2
 同一実測図中に縮尺率の異なる図を併載した場合は、図右下にそれぞれ縮尺率を記載した。
5. 遺構の方位は、北を基準に傾きを計測した。東に傾いた場合N-○°-Eというように表記した。
6. 本書では、テフラの呼称として下記の略語を用いる。

テフラ等の名称	略 語	年 代
浅間A軽石	As-A	1783（天明3）年
浅間Bテフラ	As-B	1108（天仁元）年
榛名二ツ岳伊香保テフラ	Hr-F P	6世紀中葉
榛名二ツ岳渋川テフラ	Hr-F A	6世紀初頭
榛名二ツ岳渋川テフラに伴う泥流	Hr-F A泥流	6世紀初頭
浅間C軽石	As-C	4世紀初頭

7. 本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示す。下記以外は図版ごとに凡例を示す。
 (1) 遺構図スクリーントーン



地山



拡大図の位置

- (2) 遺物図スクリーントーン



陶器の施軸範囲



埴輪の剥落面

8. 水田面積の計測は、畦畔の下端で求め、プランリメーターで3回計測し、その平均値を採用した。
9. 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。
 国土地理院 地形図 1：25,000「高崎」「前橋」
 国土地理院 地形図 1：50,000「高崎」「前橋」

国土地理院 地勢図 1 : 200,000 「長野」「宇都宮」

高崎市都市計画図 1 : 2,500 「No.33」「No.40」

目 次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

写真図版目次

第1章 発掘調査の経過

- 第1節 発掘調査に至る経緯 1
- 第2節 発掘調査の方法 5
- 第3節 発掘調査の経過 6
- 第4節 基本土層 7

第2章 立地と周辺の遺跡

- 第1節 遺跡の立地 9
- 第2節 周辺の遺跡 9

第3章 遺構と遺物

- 第1節 近世の調査15
- 第2節 中世の調査44
- 第3節 平安時代の調査88
- 第4節 古墳時代の調査100
- 第5節 古墳時代初頭以前の調査124

第4章 自然科学分析

- 第1節 自然科学分析にあたって135
- 第2節 上滝五反畑遺跡の土層とテフラ135
- 第3節 上滝五反畑遺跡におけるプラント・オパール分析140

第5章 まとめ

- 第1節 天明3年の浅間山噴火の降灰146
- 第2節 近世の水田について146

抄録150

写真図版151

挿図目次

- 第 1 図 北関東自動車道（高崎～伊勢崎）開通連絡位置図
第 2 図 上滝五反畑連絡の位置図（20万分の1図使用）
第 3 図 上滝五反畑連絡の調査区（高崎市都市計画区 1：2500）
第 4 図 上滝五反畑連絡のグリッド設定図
第 5 図 土層柱状図・土層柱状図作成位置図
第 6 図 基本土層模式図
第 7 図 上滝五反畑連絡周辺地形分類図（1：25000）
第 8 図 上滝五反畑連絡周辺連絡図（1：25000）
第 9 図 1 面 1 号溝実測図・出土遺物
第 10 図 1 面 2・3 号溝実測図・2 号溝出土遺物
第 11 図 1 面 4 号溝出土遺物
第 12 図 1 面 5 号溝出土遺物（1）
第 13 図 1 面 5 号溝出土遺物（2）
第 14 図 1 面 5 号溝出土遺物（3）
第 15 図 1 面 4・5・7・8・9・11 号溝実測図
第 16 図 1 面 11 号溝出土遺物
第 17 図 1 面 6 号溝実測図
第 18 図 1 面 13 号溝出土遺物
第 19 図 1 面 13 号溝実測図
第 20 図 1 面 14 号溝出土遺物（1）
第 21 図 1 面 14 号溝出土遺物（2）
第 22 図 1 面 14・15・16 号溝実測図
第 23 図 1 面 17 号溝実測図
第 24 図 1 面 18 号溝実測図
第 25 図 1 面 19・20 号溝実測図
第 26 図 1 面 21 号溝実測図
第 27 図 1 面 22 号溝実測図
第 28 図 1 面 5 号水田実測図
第 29 図 1 面 16 号水田出土遺物
第 30 図 1 面 15・16・17・18・19 号水田実測図
第 31 図 1 面 7 号水田実測図
第 32 図 1 面遺構外出土遺物（1）
第 33 図 1 面遺構外出土遺物（2）
第 34 図 1 面遺構外出土遺物（3）
第 35 図 1 面遺構外出土遺物（4）
第 36 図 2 面 2 号土坑出土遺物
第 37 図 2 面 5 号土坑出土遺物
第 38 図 2 面 10 号土坑出土遺物
第 39 図 2 面 39 号土坑出土遺物
第 40 図 2 面 48 号土坑出土遺物
第 41 図 2 面 52 号土坑出土遺物
第 42 図 2 面 1 号土坑実測図
第 43 図 2 面 2～8 号土坑実測図
第 44 図 2 面 9～14 号土坑実測図
第 45 図 2 面 15～20 号土坑実測図
第 46 図 2 面 21～26 号土坑実測図
第 47 図 2 面 27～33 号土坑実測図
第 48 図 2 面 34～42 号土坑実測図
第 49 図 2 面 43～49・77 号土坑実測図
第 50 図 2 面 50～55 号土坑実測図
第 51 図 2 面 56～62 号土坑実測図
第 52 図 2 面 63～70 号土坑実測図
第 53 図 2 面 71～76・78 号土坑実測図
第 54 図 2 面 13 号溝実測図
第 55 図 2 面 14 号溝出土遺物
第 56 図 2 面 14・16 号溝実測図
第 57 図 2 面 20 号溝出土遺物
第 58 図 2 面 17 号溝実測図
第 59 図 2 面 21 号溝出土遺物
第 60 図 2 面 22 号溝出土遺物
第 61 図 2 面 26 号溝出土遺物
第 62 図 2 面 15 号溝実測図
第 63 図 2 面 19・21・22・26・27・28 号溝実測図
第 64 図 2 面 20 号溝実測図
第 65 図 2 面 29・35・36 号溝実測図
第 66 図 2 面 39 号溝実測図
第 67 図 2 面 23 号溝出土遺物
第 68 図 2 面 24 号溝出土遺物
第 69 図 2 面 25 号溝出土遺物
第 70 図 2 面 31・32・33 号溝実測図
第 71 図 2 面 23・24 号溝実測図
第 72 図 2 面 37・38 号溝実測図
第 73 図 2 面 40 号溝実測図
第 74 図 2 面 25 号溝実測図
第 75 図 2 面 1 号掘立柱建物実測図・出土遺物
第 76 図 2 面 1・6 号溝実測図
第 77 図 2 面 18 号溝実測図
第 78 図 2 面 7・42 号溝実測図
第 79 図 2 面 41 号溝実測図
第 80 図 2 面 43 号溝実測図
第 81 図 2 面 2 号溝出土遺物
第 82 図 2 面 2 号溝実測図
第 83 図 2 面（A・B）F 水田実測図
第 84 図 2 面遺構外出土遺物（1）
第 85 図 2 面遺構外出土遺物（2）
第 86 図 2 面遺構外出土遺物（3）
第 87 図 3 面 1 号土坑実測図
第 88 図 3 面 1・3 号溝、1 号掘立柱遺構実測図
第 89 図 3 面 2 号溝実測図
第 90 図 3 面 8 号溝実測図
第 91 図 3 面 9 号溝実測図
第 92 図 3 面 4・5・6・7 号溝、2 号掘立柱遺構実測図
第 93 図 3 面 2 区北東地区水田実測図
第 94 図 3 面 1 区北東地区水田実測図
第 95 図 3 面 3 区北側地区水田実測図
第 96 図 3 面 2 区南西地区水田実測図
第 97 図 3 面遺構外出土遺物（1）
第 98 図 3 面遺構外出土遺物（2）
第 99 図 5 面 2 号溝出土遺物
第 100 図 5 面 1・2・3・5・7・8 号溝実測図
第 101 図 5 面 4 号溝実測図
第 102 図 5 面 9・11 号溝実測図
第 103 図 5 面 6 号溝遺物出土状況図・出土遺物
第 104 図 5 面 6・14 号溝実測図
第 105 図 5 面 13 号溝実測図
第 106 図 5 面 10・12 号溝実測図
第 107 図 1 面水田全体図
付図 1 上滝五反畑連絡 1 面（A・A'）全体図
付図 2 上滝五反畑連絡 2 面（中世）全体図
付図 3 上滝五反畑連絡 2 面（A・B'）全体図
付図 4 上滝五反畑連絡 3 面（H・F・A 形流下）全体図
付図 5 上滝五反畑連絡 5 面全体図

写真図版目次

P L 1	調査区遠景 (南上空より)		2面19号土坑セクション (東より)
	調査区遠景 (北上空より)	P L 12	2面20号土坑全景 (北より)
P L 2	1面表土掘削 (西より)		2面22号土坑全景 (南より)
	1面表土掘削 (東より)		2面21号土坑全景 (南より)
	1面表土掘削 (西より)		2面21号土坑セクション (南より)
	1面表土掘削 (東より)		2面23号土坑全景 (南より)
	試掘2号トレンチAセクション (南より)		2面24号土坑全景 (西より)
	試掘1号トレンチBセクション (南より)		2面25号土坑全景 (南より)
P L 3	1面2・3区全景 (上空より)		2面25号土坑セクション (南より)
	1面1区全景 (上空より)	P L 13	2面26号土坑全景 (東より)
P L 4	1面7号水田全景 (上空より)		2面26号土坑セクション (東より)
	1面11号水田全景 (南より)		2面28号土坑全景 (南より)
P L 5	1面5区全景 (北より)		2面28号土坑セクション (南より)
	1面5区農具痕 (東より)		2面27号土坑全景 (南より)
	1面18～21号水田全景 (南より)		2面27号土坑セクション (南より)
	1面2号畦畔 (西より)		2面30号土坑全景 (東より)
	1面2号畦畔 (東より)		2面33号土坑全景 (南より)
	1面3号畦畔 (東より)	P L 14	2面32号土坑全景 (南より)
	1面4号畦畔 (西より)		2面32号土坑セクション (南より)
	1面5号畦畔 (西より)		2面34号土坑全景 (南より)
P L 6	1面4・5号畦畔水口 (西より)		2面34号土坑セクション (西より)
	1面6号畦畔 (西より)		2面35号土坑全景 (東より)
	1面1号溝全景 (南より)		2面37号土坑全景 (北より)
	1面1号溝A-A'セクション (南より)		2面41号土坑全景 (南より)
	1面2・3号溝全景 (南より)		2面42号土坑全景 (南より)
	1面2・3号溝A-A'セクション (北より)	P L 15	2面43号土坑全景 (東より)
	1面2・3号溝全景 (北より)		2面43号土坑全景 (北より)
	1面2・3号溝調査風景 (南より)		2面44号土坑全景 (東より)
P L 7	1面4号溝全景 (南より)		2面44号土坑セクション (東より)
	1面4号溝全景 (北より)		2面47号土坑全景 (南より)
	1面5号溝B-B'セクション (南より)		2面47号土坑セクション (南より)
	1面5号溝全景 (南より)		2面48号土坑全景 (東より)
	1面18号溝全景 (東より)		2面48号土坑セクション (西より)
	1面13号溝全景 (南より)	P L 16	2面50号土坑全景 (南より)
	1面13号溝全景 (北より)		2面50号土坑セクション (北より)
P L 8	2面2・3区全景 (上空より)		2面51号土坑全景 (西より)
	2面1区全景 (上空より)		2面53号土坑全景 (東より)
P L 9	2面1号土坑全景 (南西より)		2面55号土坑全景 (南より)
	2面3号土坑全景 (北より)		2面56号土坑全景 (南より)
	2面4号土坑全景 (北より)		2面57号土坑全景 (西より)
	2面4号土坑セクション (東より)		2面58号土坑全景 (南より)
	2面5号土坑全景 (北より)	P L 17	2面59号土坑全景 (南より)
	2面6号土坑全景 (北より)		2面59号土坑セクション (北より)
	2面7号土坑全景 (西より)		2面60号土坑全景 (北より)
	2面7号土坑セクション (西より)		2面60号土坑セクション (南より)
P L 10	2面8号土坑全景 (南より)		2面61号土坑全景 (北より)
	2面8号土坑セクション (南より)		2面63号土坑全景 (西より)
	2面9号土坑全景 (西より)		2面64号土坑全景 (南より)
	2面10号土坑全景 (東より)		2面64号土坑セクション (東より)
	2面11号土坑全景 (西より)	P L 18	2面66号土坑全景 (西より)
	2面11号土坑セクション (東より)		2面68号土坑全景 (北より)
	2面12号土坑全景 (東より)		2面69号土坑全景 (北より)
	2面13号土坑全景 (北より)		2面78号土坑全景 (北より)
P L 11	2面14号土坑全景 (北より)		2面13号溝全景 (南より)
	2面15号土坑全景 (北より)		2面14号溝全景 (南より)
	2面16号土坑全景 (東より)		2面15号溝全景 (西より)
	2面16号土坑セクション (東より)		2面15号溝全景 (東より)
	2面17号土坑全景 (西より)	P L 19	2面17号溝全景 (西より)
	2面18号土坑全景 (東より)		2面17号溝全景 (西より)
	2面19号土坑全景 (東より)		2面16号溝全景 (西より)

P.L.20	2面19号溝全景 (東より)	P.L.28	3面8号溝全景 (西より)
	2面20号溝全景 (東より)		3面9号溝全景 (東より)
	2面20号溝全景 (西より)		3面調査風景 (東より)
	2面20号溝全景 (南より)		3面1号土坑全景 (南より)
	2面27・28号溝全景 (西より)		3面1号土坑セクション (西より)
P.L.21	2面29・35号溝全景 (南東より)	P.L.29	5面2・3区全景 (上空より)
	2面35・36号溝全景 (南より)		5面1区全景 (上空より)
	2面23号溝全景 (東より)		5面2・3区全景 (東より)
	2面33号溝全景 (東より)		5面5区全景 (東より)
	2面24号溝全景 (北より)		5面1・2・3号溝全景 (西より)
P.L.22	2面31号溝全景 (東より)	P.L.30	5面1・2・3号溝全景 (東より)
	2面32号溝全景 (東より)		5面1・2・3号溝全景 (東より)
	2面31号溝全景 (北より)		5面2号溝遺物出土状況 (北より)
	2面37号溝全景 (西より)		5面1・2・3・5号溝全景 (南東より)
	2面37号溝全景 (北より)		5面1号溝A-A'セクション (東より)
P.L.23	2面1号掘立柱建物全景 (南より)	P.L.31	5面1・2・4号溝A-A'セクション (東より)
	2面1号掘立柱建物全景 (南西より)		5面2号溝A-A'セクション (東より)
	2面30・31号水田全景 (南より)		5面1・2・5号溝合流部全景 (西より)
	2面5区全景 (北より)		5面4号溝A-A'セクション (東より)
	2面1・2号畦畔 (南より)		5面6号溝全景 (西より)
P.L.24	2面9号畦畔 (南より)	P.L.32	5面6号溝A-A'セクション (南より)
	2面23号水田水口 (南より)		5面6号溝C-C'セクション (南より)
	2面古銭 (2面遺構外№.24) 出土状況		5面6号溝全景 (南より)
	2面1号溝全景 (南より)		5面6号溝遺物出土状況 (北より)
	2面7号溝全景 (南より)		5面14号溝全景 (南より)
P.L.25	2面6号溝全景 (北より)	P.L.33	5面4号溝全景 (南より)
	2面18号溝全景 (西より)		5面4号溝A-A'セクション (北より)
	2面調査風景 (東より)		5面4・5号溝A-A'セクション (西より)
	2面調査風景 (東より)		5面7・8号溝全景 (東より)
	3面2・3区全景 (上空より)		5面7号溝全景 (東より)
P.L.26	3面1区全景 (上空より)	P.L.34	5面12号溝全景 (東より)
	3面1区水田 (上空より)		5面9号溝全景 (東より)
	3面1区水田 (南より)		5面11号溝全景 (東より)
	3面2区水田 (東より)		5面13号溝全景 (西より)
	3面2区水田 (西より)		5面10号溝全景 (東より)
P.L.27	3面3区水田 (西より)	P.L.35	土層サンプル採取状況
	3面5区水田 (南より)		1面1・2・4・5号溝出土遺物
	3面1号畦畔水口 (北より)		1面5号溝出土遺物
	3面1・2号畦畔・1号溝全景 (東より)		1面5号溝出土遺物
	3面1号溝井状遺構・3号溝全景 (東より)		1面5・11・13・14号溝出土遺物
P.L.27	3面1・2号畦畔・1号溝全景 (東より)	P.L.36	1面14号溝・16号水田出土遺物
	3面1号溝井状遺構と1号溝接続部分 (東より)	P.L.37	1面16号水田・遺構外出土遺物
	3面2号溝全景 (西より)	P.L.38	1面遺構外出土遺物
	3面3号溝全景 (南より)	P.L.39	1面遺構外出土遺物
	3面4号溝全景 (西より)	P.L.40	1面遺構外出土遺物
	3面4号溝全景 (西より)	P.L.41	1面遺構外出土遺物
	3面4号溝全景 (東より)	P.L.42	1面遺構外・2面2・5・10・39・48・52号土坑出土遺物
	3面5号溝全景 (東より)	P.L.43	2面14・20・21・22・23・24・25・26号溝出土遺物
	3面5号溝全景 (西より)	P.L.44	2面1号掘立柱建物・遺構外出土遺物
	3面8号溝全景 (東より)	P.L.45	2面遺構外出土遺物
		P.L.46	2面遺構外・2号溝・3面遺構外出土遺物
		P.L.47	3面遺構外出土遺物
	P.L.48	3面遺構外・5面6号溝出土遺物	

北國東自動車道（高松～伊勢崎）開通路線

No.	道路番号	道路名称
1	KT-001	上境五反田道路
2	KT-010	上境原町北道路
3	KT-020	新橋手三原川道路
4	KT-030	西橋手湯掛郡
5	KT-040	橋手井戸川道路
6	KT-050	橋手湯田道路
7	KT-060	村中道路
8	KT-070	西田道路
9	KT-080	鶴光池原道路
10	KT-090	鶴丸高塚道路
11	KT-100	鶴丸仲田道路
12	KT-110	西藤久司道路
13	KT-120	中内村台道路
14	KT-130	前田道路
15	KT-140	駒形原田道路
16	KT-150	上増田高塚道路
17	KT-151	下増田常木道路
18	KT-160	下増田池原道路

No.	道路番号	道路名称
19	KT-170	松原道路
20	KT-180	新井大田間道路
21	KT-190	荒北江中野原道路
22	KT-200	荒北江西原道路
23	KT-210	高塚道路
24	KT-220	荒北江中野原西道路
25	KT-230	荒北江中野原東道路
26	KT-240	荒北江西原東道路
27	KT-250	伊勢山道路
28	KT-260	荒北江西原東道路
29	KT-270	荒北江中野原東道路
30	KT-280	五日市新田道路
31	KT-290	五日市牛原道路
32	KT-291	都築山古墳
33	KT-300	五日市清水田道路
34	KT-310	北仙原道路
35	KT-320	舞台道路
36	KT-330	大井田道路

北國東自動車道（高松～伊勢崎）開通路線位置図

国土院地理院地図部 1:50,000「高松」新橋、使用

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）の建設に伴い、平成6年度から該当地域に所在する埋蔵文化財発掘調査について、群馬県教育委員会スポーツ文化部文化財保護課では、県土木部道路建設課高速道路対策室、及び原因者である日本道路公団東京第二建設局と、調査の実施について協議をおこなった。協議の結果、本線部分の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託実施する事に決定した。そして、平成7年6月1日付けで、県教育委員会と本事業団の間で、「北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査」についての契約を締結した。本時点での全体計画は、35遺跡の調査対象面積は687,429㎡で、平成11年度末の調査終了予定であった。

本遺跡は事前協議段階では、調査対象地には含まれていなかった。よって、予定路線内の埋蔵文化財の所在について、県教育委員会（文化財保護課）と日本道路公団との再協議がなされた折り、周知の遺跡である「上滝五反畑遺跡」を予定路線が通過することが判明したため、工事に先だって試掘調査を実施した上で、遺跡が確認された場合には、記録保存を行うことで合意に至った。

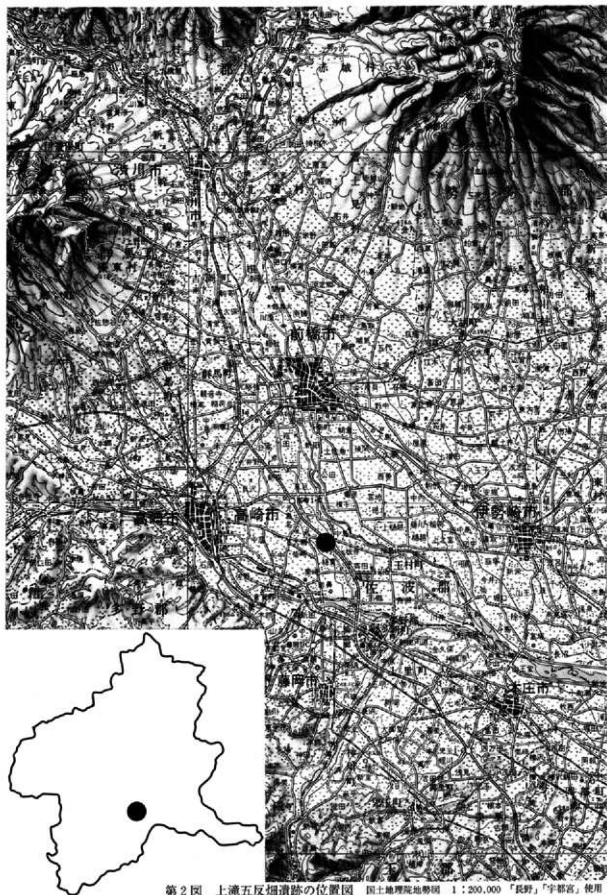
この協議を受け、平成8年2月19日から20日の2日間、県文化財保護課と本事業団で範囲確認調査を実施した。その結果、古墳時代から中・近世にわたる4面の水田、及び畠の存在が確認された。その後、同年12月12日に県文化財保護課、県高崎土木事務所、日本道路公団高崎工事事務所、及び本事業団で現地立合調査をおこない、県道長寿線に関連して一部県道側の調査区と、北関東自動車道本線の調査対象区域の調整を行った上で、本遺跡の調査対象地を決定した。

そして、平成9年1月7日から広域下水道の付け替え工事に関連する区域の、上滝五反畑遺跡1区の表土を除去し、本調査に着手した。なお、同年8月には関越自動車道の南側道と、県道高崎～伊勢崎線の間の確認調査を実施したが、遺構等は検出できなかった（上滝五反畑遺跡4区）。

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査仕様書

本事業の実施にあたり、関連職員で協議し仕様書を作成した。事業全体にわたり内部的に統一できなかったが、検討した内容は下記のとおりである。

1. 趣旨 北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査の実施にあたり、同事業区域内に所在する埋蔵文化財について発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずると共に、文化財保護と開発事業との調整をはかる。
2. 方針 調査対象となる遺跡の発掘調査は、全面調査を原則とする。但し、調査上安全が確保できない遺跡については、関係機関にて安全対策の工法等を十分協議のうえ実施する。なお、調査が不可能な遺跡については、必要最大限の記録が残せるよう努力する。
3. 遺跡の所在地・種類・時代・面積等（別紙調書のとおり）
4. 調査期間
 - (1) 発掘調査 平成7年6月1日～平成12年3月31日
 - (2) 整理期間 平成10年4月1日～平成11年12月31日
5. 調査関連機関



第2図 上澗五反畑遺跡の位置図 国土地理院地勢図 1:200,000 「長野」「宇都宮」使用

- (1)事業実施機関 日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所
 (2)調査委託機関 群馬県教育委員会（スポーツ文化部文化財保護課）
 (3)調査実施機関 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 (4)調査協力機関 関連市町村教育委員会（高崎市・前橋市・伊勢崎市・赤堀町）

6. 調査方法

(1)確認調査

ア. 確認調査は、群馬県埋蔵文化財発掘調査事業・整理事業基準「試掘調査について」に基づき実施する。

イ. 水田地帯の範囲確認調査

◇湧水状況を把握したうえで実施する。◇遺構を確認した場合には、本調査に向け協力体制を十分に検討する。確認できなかった場合には、下層の遺構の有無も確認する。

◇確認調査は、調査期間算定に必要な資料が得られるまでの範囲とする。

◇確認調査は、遺物包含層も対象とする。

(2)発掘調査

ア. 遺跡名 ◇周知の遺跡については、従来の呼称を使用する。

◇新規の遺跡については、小字名を基本とし大字名を冠すること。

イ. 遺跡略号と番号

◇略号はKT-○○○を使用する（Kは北関東の頭文字でTは高崎の頭文字）。なお、3桁の番号のうち、2桁目は当初から調査の予定されていた遺跡である。1桁目は計画後に追加された遺跡である。

◇遺跡番号は起点側の高崎から終点側につけていく。

ウ. 遺物の処理 ◇化学処理の必要な遺物は、保存状態をよく観察のうえ、適切な処理を施す。

◇遺物の洗浄・注記は、原則として調査現場で終了させる。

◇整理作業に必要な基礎データは、調査中に把握すること。

エ. 土層の記録 ◇土層の色調は『標準土色帳』を使用する。

◇調査中にできるだけ早く基本層序を把握する。

オ. 実測 ◇平面実測は国土座標に基づいておこなう。

◇遺構の平面図・断面図は1/20スケールを原則とする。水田跡の平面図は1/40とする。

カ. 写真撮影

◇調査前・調査後（埋め戻し終了後等）の写真撮影は、必ず行うこと。

◇撮影に関しては、黒板等に撮影対象データ（遺跡名・地区名・遺構名・撮影方向・撮影等）を記入しておくこと。

◇撮影フィルムは速やかに現像を行い、その整理方法は本事業団の「写真整理取り扱い基準」に準拠すること。

◇空中写真撮影は必要に応じて実施する。

キ. 旧石器時代の遺物・遺構の調査期間

◇確認調査のデータにより、本調査の調査期間を算定しておくこと。

◇上層の調査時に旧石器の確認調査期間も算定しておくこと。

第1章 発掘調査の経過

◇なお、本調査が必要と判断された場合には、関連機関と協議のうえ調査期間を定める。

ク. 水田地帯の調査

◇防護壁等安全対策が可能な遺跡は、極力路線幅全てを調査する。

◇不可能な場合には、法面掘削に必要な土地を借地のうえ実施する。

ケ. その他 ◇発掘調査中での各種分析・鑑定等は、必要に応じて行う。

7. 安全対策

(1) 「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査に関する安全基準」を踏まえ実施する。安全基準にない事項が生じた時には、関係者で協議し、速やかに対策を講ずること。

(2) 水田地帯の調査については、6月から9月までの間は、十分に準備をしてから実施する。

(3) 安全対策関連の施設等の管理は、必要に応じて専門業者へ委託する。

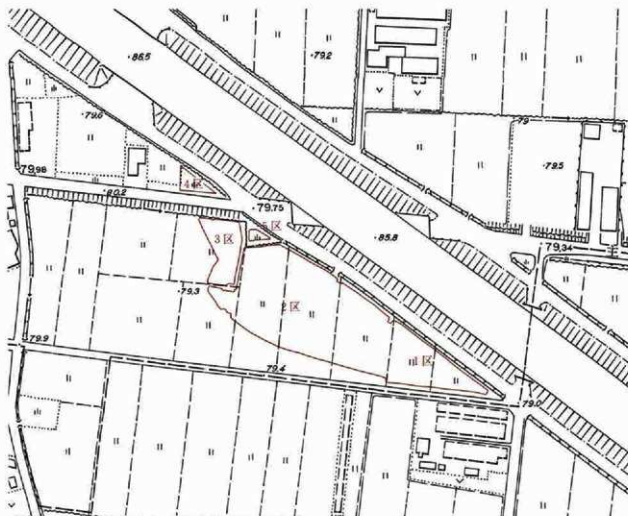
(4) 調査実施について安全対策を速やかに進めるため、必要に応じてコンサルタントと協議する。

8. その他

(1) 排土置き場の確保 ◇路線内に排土置き場を確保できない場合には、借地対応とする。

(2) 工事中道路等の関連開発地については、別途協議する。

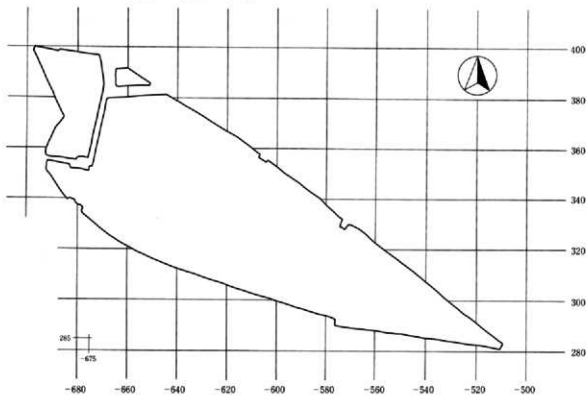
(3) 埋め戻しについても、別途協議とする。



第3図 上滝五反畑遺跡の調査区 高崎市都市計画図 1:2,500 No.33、No.40 使用

第2節 発掘調査の方法

- (1) 表土掘削には、調査の効率を図るため、掘削機械を利用した。
- (2) グリッドの設定は、日本平面直角座標(国家座標)を基準に5m方眼を設定した。
基準点のX軸 $X=35300$ 、Y軸 $Y=-74600$ を基準にし、100mピッチ杭をX及びY軸の座標値を全桁で表示し、他の並杭を下3桁のX及びY軸の座標値で表示した。グリッドの名称は、南東隅を起点にし、下3桁のX及びY軸の座標値で表現した。また、調査区は便宜的に1区から5区の名称をつけた。
- (3) 遺構名称は各調査面ごとに、種別ごとに通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位、グリッド単位を基本とした。
- (4) 遺物の注記は遺跡略号(KT-001)・調査面・遺構名またはグリッド名を書き込んだ。
- (5) 遺構等の測量は、空中写真測量と地上測量を併用し、1/20・1/40・1/100・1/200縮尺図を作成した。
- (6) 作成された遺構実測図には、遺跡名・遺跡略号・実測図名・縮尺・実測者名・レベル高・ベンチマークの高さ・作成年月日を記入し、1枚ごとに通し番号を付し、台帳を作成した。
- (7) 写真撮影には、中型カメラと小型カメラのモノクロとリバーサルフィルムを使用した。撮影対象に応じて、高所作業車を使用し、またラジコンヘリコプターや気球による写真撮影を行った。撮影データは、カードに記入した。カードは撮影対象を撮影する前に撮影した。
- (8) 撮影したフィルムは現像処理し、モノクロはベタ焼きをおこなった。ベタ焼きはネガ検索台紙に調査面、遺構ごとに貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・フィルム番号を記録した。リバーサルフィルムはコマごとに遺跡名・遺跡略号・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、コマごとに通し番号を付し、台帳を作成した。
- (9) 本遺跡の調査では、自然科学分析を行い、分析結果を第4章に掲載した。自然科学分析は、テフラ分析とプラントオバール分析の2項目である。

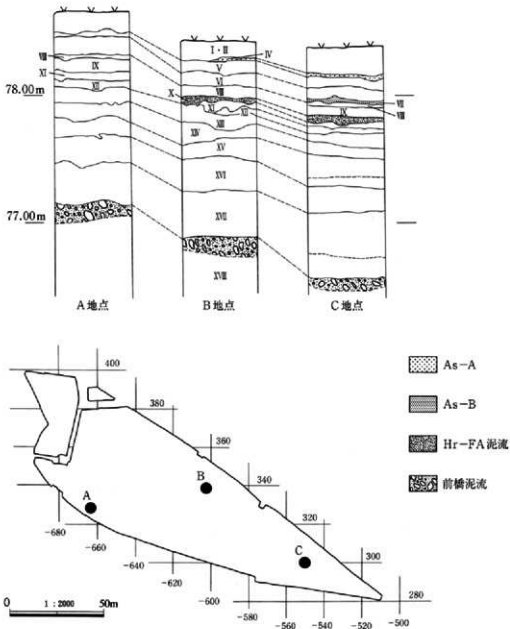


第4図 上滝五反畑遺跡のグリッド設定図

第4節 基本層序

発掘調査に入る前（1996年2月）に範囲確認調査が行われた。その際に土層観察を行った。第4図のA地点、B地点、C地点は土層観察地点である。それぞれの土層観察地点での土層柱状図を作成した。第5図は、A・B・C地点の土層柱状図及び遺構等の調査所見をもとに基本土層を模式図にしたものである。

I層・II層は、耕作土で褐灰色土あるいは黒褐色土である。現状は水田で、As-Aを混入する。II層は現在の水田の床土で鉄分の沈殿がみられる。5～10cm程である。III層は部分的ではあるがみられ、II層よりAs-Aの混入が多く、鉄分の沈殿はすくない。IV層はAs-Aで東側で比較的厚く堆積していた。層厚は3～4cm



第5図 土層柱状図・土層柱状図作成位置図

第1章 発掘調査の経過

ほどである。Ⅲ層及びⅣ層直下を第1面として発掘調査を行った。

V層は黄褐色土で、中世の洪水層である。第1面の農具の跡はこの層を削り込んであった。V層中はほとんど遺物はなく、この層より上層で近世以降の遺物が出土する。さらに下層から中世の遺物が出土することからV層を中世と位置づけた。VI層はAs-Bの混土である。2区中央部分では確認できなかった。一部、第1面の農具の跡はこの層を掘り込んであった。Ⅶ層は、As-Bで下部に灰白色の火山灰がみられる。また、大粒の白色軽石もみられたことから1次堆積である。Ⅷ層直下は1108(天仁元)年と考える。Ⅵ層及びⅦ層直下を第2面として発掘調査をした。Ⅵ層及びⅦ層の上から掘り込まれた溝や土坑とⅦ層で覆われた水田の調査を行った。

Ⅷ層は、黒褐色粘質土で、第2面(As-B下)水田の耕土である。Ⅸ層は、青灰色粘質土で、粘性が強い。本遺跡の北側(利根川よりの宿横手三波川遺跡)では、平安洪水層としてこの層の直下を発掘している。本遺跡では部分的で発掘調査は行わなかった。Ⅹ層は、明黄褐色土で、Hr-FAの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物と思われる。少量の白色軽石を含む。Ⅹ層直下を第3面として発掘調査を行った。小区画水田や溝を確認した。調査区の北側で比較的厚い堆積状態であった。

Ⅺ層は、黒褐色粘質土で、第3面(Hr-FA泥流下)水田の耕土である。As-Cを混入する。Ⅻ層直下を第4面として、トレンチ調査を行った。

Ⅼ層は、黒褐色粘質土で、As-Cは含まない。

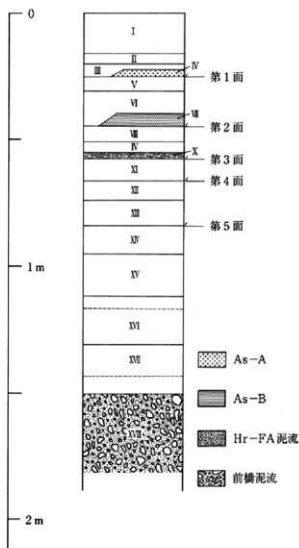
Ⅽ層は、灰色シルト質土で、やや黒味を帯びる。凝固鉄分が多い。Ⅾ層は、灰白色シルト質土。浅間板鼻黄色軽石(As-Yp)を含む可能性がある。この層の上面を第5面として発掘調査を行った。溝を確認した。

Ⅿ層は、黄灰色シルト質土。浅間大窪沢第1テフラ(As-ok1)と思われる軽石を含む。

ⅰ層は、灰色シルト質土である。

ⅱ層は、灰色シルト質土で浅間板鼻褐色軽石群(As-Bp)と思われる軽石を含む。

ⅲ層は、褐色砂礫層。この付近の基盤層である前橋泥流(約2万年前)と思われる。



第6図 基本土層模式図

第2章 立地と周辺遺跡

第1節 遺跡の立地

上滝五反畑遺跡のある群馬県高崎市は、群馬県の南部にあり、関東平野の北西部に位置する。北東に赤城、北西に榛名を望む利根川流域に広がる沖積平野から榛名山南東麓にかけて位置する。高崎市の地形は、関東平野の一角である低平な台地と沖積低地、および丘陵地からなる。市の北部から西部にかけて丘陵地で中央部から東部にかけて前橋台地とよばれる低平な台地が広がる。市の北西から南東に烏川が流れ、南部を鏡川が、東北部から南東部を井野川が流れ烏川に注ぐ。それぞれの河川の流域には沖積地が形成されている。前橋台地はおよそ2万年前の浅間山起源の泥流堆積物によって形成されている。扇状地礫層の上に前橋泥流堆積物が厚く堆積し、傾斜の緩い平坦な地形を形成している。赤城山や榛名山から流れ出す大小の河川によって、前橋台地は開析され、現在の地形がつくられた。

高崎市は、古くから陸上・水上の交通の要所として発達している。現在の市街地の中央にJR高崎駅があり、高崎線・両毛線・上越線・八高線の起点となり、上越新幹線・長野（北陸）新幹線の駅も設置されている。国道17号線（旧中山道）が北西から南東に走っている。遺跡の所在する上滝町は交通の要所とは言えないが、滝川（天狗岩用水）が開削され、開けた土地であった。

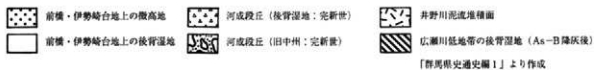
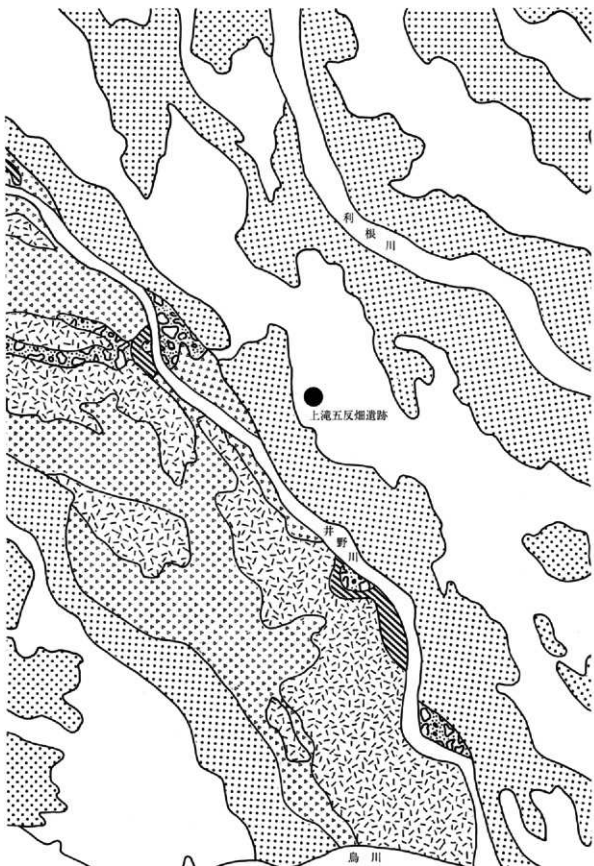
上滝五反畑遺跡は上滝町の南部、高崎市の市街地から東に約6kmほどのところに位置する。西に井野川、東に利根川に挟まれたところに位置し、前橋台地上の後背湿地である。遺跡の標高は77～78mである。遺跡の西から南は前橋台地上の微高地である。現在遺跡の周辺は水田地帯で、西側の微高地は、畑地で、住宅地である。遺跡の北側は県道高崎伊勢崎線が東西に、東から北にかけて関越道が通る。現在この地を起点とし、北関東自動車道が、関越道より分かれて建設されている。

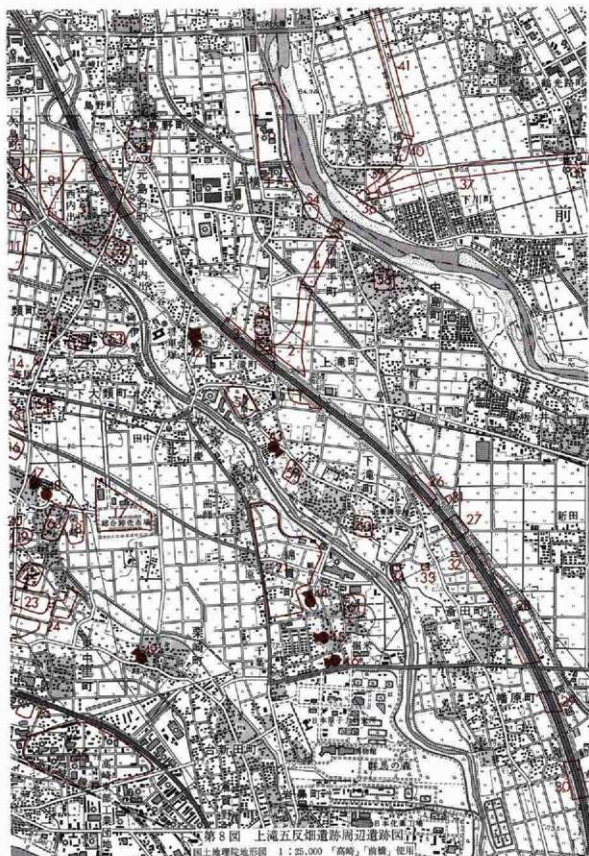
第2節 周辺の遺跡

縄文時代の遺跡は少ないが、井野川流域の段丘上で比較的多く確認されている。八幡原A遺跡（30）では前期の住居を1軒確認している。元島名遺跡（8）では後期の土坑、万相寺遺跡（10）では中期以降の遺構・遺物が確認されている。

弥生時代は井野川左岸で鈴ノ宮遺跡（9）・元島名遺跡、右岸で高崎情報団地遺跡（11）・万相寺遺跡で、中期～後期の遺構・遺物が確認されている。鈴ノ宮遺跡は、後期の住居跡26軒、方形周溝墓7基、甕棺墓1基が確認された。鈴ノ宮遺跡の南東に位置する元島名遺跡では住居跡を確認している。右岸の万相寺遺跡では、後期の住居跡12軒が確認されている。すぐ南の高崎情報団地遺跡では、方形周溝墓や住居跡が調査されている。

古墳時代の遺跡は縄文時代・弥生時代の遺跡の数に比べ、飛躍的に増大する。烏川流域・井野川流域に古墳が集中する。前期の遺跡は井野川流域に調査例が多い。井野川左岸の元島名将軍塚古墳（42）は、全長90mの前方後方墳である。元島名将軍塚古墳の東に上滝遺跡（3）があり、住居等が確認されている。元島名将軍塚古墳の北西（井野川上流左岸）に鈴ノ宮遺跡があり、住居跡や前方後方型周溝墓が確認された。対岸の高崎情報団地遺跡では、墓落が確認されている。井野川下流左岸の下斉田滝川A遺跡（28）では方形周溝墓





と集落が確認された。滝川C遺跡(26)・上滝社宮司東遺跡(31)・下滝高井前遺跡(33)では土坑や土器が確認されている。対岸の綿貫遺跡(21)では集落が調査された。さらに西の柴崎町の蟹沢古墳(47)は「正始元年」銘三角縁神獸鏡3枚の鏡が出土したと言われる。この古墳は既に削平され墳形や規模等不明な点が多い。蟹沢古墳の南の矢中村東遺跡(22)では方形周溝墓2基、矢中村東B遺跡(23)では、前方後方形の周溝墓1基と方形周溝墓2基、村東C遺跡(24)では、方形周溝墓10基と円形周溝墓1基が確認されている。上滝遺跡の北(現利根川右岸)の西横手遺跡群Ⅰ・Ⅱ(6)で、方形周溝墓が調査されている。さらに東の前橋市横手町(現利根川左岸)の横手早稲田遺跡(39)で住居跡が、横手湯田遺跡(37)では方形周溝墓が確認されている。古墳時代前期の遺跡は井野川の河岸段丘上や台地の中央部に広がっていく。

古墳時代中期の古墳としては、烏川左岸の倉賀野浅間山古墳、井野川右岸の善賢寺裏古墳(45)、不動山古墳(46)等の前方後円墳があげられる。高崎情報団地遺跡で確認された4基の軌立貝式古墳もこの時期のものである。倉賀野浅間山古墳は全長150mで群馬県内で2番目の規模である。この地域を統括した首長の権威を示しているものであろう。

古墳時代後期は井野川右岸の高崎情報団地遺跡・中大類金井遺跡(12)・中大類金井分遺跡(13)・殿谷戸・旭・富士塚C・華人・吹手・峰岸遺跡(14)・下大類遺跡(17)・綿貫遺跡で集落が調査されている。古墳では形象埴輪や三角縁神獸鏡が出土した観音山古墳(44)がある。井野川左岸では上滝遺跡で集落が調査されている。烏川左岸で中里前遺跡(25)で集落が調査されている。

古墳時代の水田や畠等の発掘調査例が近年急激に増加しているが、前期にあたるAs-C下水田の検出例は少ない。上滝町北遺跡(2)ではわずかであるが谷地部でAs-C下水田を確認している。6世紀初めと考えられるHr-F A下水田は多くの遺跡で確認されている。上滝町北遺跡・宿横手三波川遺跡(4)・西横手遺跡群(5)・西横手遺跡群Ⅰ・Ⅱ・上滝芥田北遺跡(32)・横手早稲田遺跡・横手湯田遺跡・横手宮田遺跡(40)・亀里平塚遺跡(41)で確認されている。さらには6世紀中葉のHr-F P下水田が現利根川流域で確認されている。確認された遺跡は右岸側で西横手遺跡群・宿横手三波川遺跡、左岸側で横手早稲田遺跡・横手湯田遺跡である。今後さらに広範囲になるとおもわれる。水田は4世紀ごろは少ないが6世紀になると急激に増加する傾向がみられる。

奈良・平安時代の遺跡は、本遺跡の北東約250mほどの所にある上滝遺跡で集落が調査されている。本遺跡のAs-B下水田と密接な関係にあると考えられる。この他に集落は下大類遺跡・中大類金井分遺跡・柴崎熊野前遺跡(18)・綿貫遺跡等である。立地は微高地や低丘陵地である。As-B下水田は多くの遺跡で発掘調査されている。上滝町北遺跡・宿横手三波川遺跡をはじめ低地で確認されている。6世紀代の水田に比べ、さらに増加している。

中世の遺跡は大小の城館跡や環濠屋敷跡がある。代表的な城館としては、本遺跡の北西井野川左岸の元鳥名城(51)や元鳥名内出(52)がある。元鳥名城は元鳥名遺跡の発掘調査で堀等が一部調査されている。環濠屋敷跡は本遺跡の300mほど北西で上滝中屋敷(56)の一部が調査されている。

近世の遺跡は、上滝町北遺跡・宿横手三波川遺跡・八幡原A遺跡で、As-A下で農具の痕跡のある水田あるいは畠が確認されている。本遺跡の北から東を滝川が流れている。滝川は天狗岩用水といわれ前橋市総社町の利根川から取水し高崎市上滝町あたりまでを総社城主秋元長朝により1602-04年にかけて掘削された。さらに上滝町から佐波郡玉村町の烏川までを関東軍代伊奈忠次により、1605-10年にかけて掘削された。この上滝町以南は代官堀とも呼ばれる。天狗岩用水・代官堀の掘削に地元で中心となり資材調達等をした人物が江原源左衛門重久である。本遺跡の西にある慈眼寺に江原源左衛門重久の墓がある。本遺跡周辺を切り

開いた人物である。天狗岩用水・代官堀の開削により、本遺跡周辺は水田が増加した。

[参考文献]

- 『角川日本地名大辞典 10群馬県』 角川書店 1978
 『群馬県百科事典』 上毛新聞社 1979
 『柴崎熊野前遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998

周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等
1	上滝五反畑遺跡	高崎市上滝町	本遺跡	本書
2	上滝横町北遺跡	高崎市上滝町	古墳時代A ₃ -C下・H ₁ -F A下水田。平安時代のA ₃ -B下水田。中世層数跡。近世水田。	図：調査1995-98 『年報』15-18
3	上滝遺跡	高崎市上滝町	古墳時代の前期・後期・奈良時代の竪穴住居・土壌。中世の竪穴・溝・竪立柱建物等。(上滝中層敷)	図：調査1975-78 報告1981
4	宿横手三波川遺跡	高崎市宿横手町	古墳時代のH ₁ -F A・F P下水田。平安時代のA ₃ -B下水田。中世竪立柱建物・土坑・竪。近世の竪・溝・灰積き穴。	図：調査1996-98 図：一部報告1999
5	西横手遺跡群	高崎市宿横手町	古墳時代のH ₁ -F A下・H ₁ -F P下水田。奈良・平安時代の竪穴住居・土坑・溝。中世の竪穴の堀。	図：調査1996-98 『年報』17・18
6	西横手遺跡群Ⅰ	高崎市西横手町	古墳時代の周溝墓。H ₁ -F A下水田。平安時代のA ₃ -B水田。中世の竪・備前堀。	市：調査1988報告1989
	西横手遺跡群Ⅱ	高崎市萩原町	古墳時代前期の方形周溝墓。H ₁ -F A下水田。大型水路。	市：調査1989報告1990
7	元鳥名B遺跡	高崎市元鳥名町	中世の竪立柱建物・元鳥名城関連の堀・溝等。板碑等出土。	市：調査1976 図：報告1977
8	元鳥名遺跡	高崎市元鳥名町	弥生・古墳時代前期の竪穴住居。中世の竪立柱建物・井戸等。	市：調査1978報告1979
9	鈴ノ宮遺跡	高崎市矢島町 元鳥名町	弥生時代の竪穴住居・方形周溝墓・壘積墓。古墳時代の竪穴住居・方形周溝墓・古墳・土塚。奈良・平安時代の竪穴住居。中世の堀。	市：調査1977報告1978
10	万相寺遺跡	高崎市宿大瀬町	縄文時代の竪穴住居。弥生時代の竪穴住居。古墳時代前期の竪穴住居。古墳二基。奈良・平安時代の竪穴住居・A ₃ -B下水田。	市：調査1984報告1985
11	高崎情報団地遺跡	高崎市宿大瀬町	弥生時代の竪穴住居・方形周溝墓。古墳時代の竪穴住居・竪立貝式古墳4基を含む円墳3基。奈良時代の東山遺。平安時代の竪穴住居・A ₃ -B下水田。中世の竪穴の堀。(堀ノ尾屋敷)	市：調査1992-94 報告1997
12	中大釜金井遺跡	高崎市中大瀬町	古墳時代後期の竪穴住居。平安時代の土坑。	市：調査1988報告1989
13	中大釜金井分遺跡	高崎市中大瀬町	古墳時代後期・奈良時代の竪穴住居。	市：調査1991報告1992
14	殿谷戸・旭・富士塚C・年人・吹手・鎌岸遺跡	高崎市柴崎町 宿大瀬町	古墳時代の竪穴住居。奈良・平安時代の竪穴住居。中世の竪立柱建物・溝。	市：調査1987報告1988
15	東原・富士塚・富士塚前B遺跡	高崎市柴崎町	平安時代のA ₃ -B下水田・水路・南北の基準礎石。	市：調査1984報告1985
16	村岡・富士塚前A遺跡	高崎市柴崎町 下大瀬町	平安時代のA ₃ -B下水田・水路・土坑。南北の基準礎石・東西の大型水路。	市：調査1983報告1984
17	下大瀬遺跡	高崎市大瀬町 柴崎町	古墳時代の竪穴住居。奈良・平安時代の竪穴住居20数軒・井戸。銅製八稜鏡等出土。	市：調査1978
18	柴崎熊野前遺跡	高崎市柴崎町	古墳時代の自然流路より、前期・中期の土器片・ガラス製品・石製品及び木製品。平安時代のA ₃ -B下水田・住居。	図：調査1996報告1998
19	砂内遺跡	高崎市柴崎町	古墳時代の円墳3基。土師器壺・須恵器大壺破片・磁輪破片出土。	市：調査1985報告1986
20	下村北遺跡	高崎市矢中町	平安時代のA ₃ -B下水田。中世の竪穴(堀・竪立柱建物・井戸・溝)。	
21	藤貫遺跡	高崎市藤貫町 台新田町	古墳時代前期・後期の竪穴住居・周溝墓。観音山古墳の外堀。奈良時代の竪穴住居。平安時代の竪穴住居・瓦葺建物。	市：調査1983報告1985
22	矢中村東遺跡	高崎市矢中町	古墳時代前期の前方後方形周溝墓・円形周溝墓等。平安時代のA ₃ -B下水田・水利遺構等。銅製古印「物部私印」等出土。	市：調査1983報告1984
23	矢中村東B遺跡	高崎市矢中町	古墳時代前期の方形周溝墓。平安時代のA ₃ -B下水田・水利遺構・大型水路。	市：調査1984報告1985

第2章 立地と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等			
24	村東C遺跡	高崎市水町町	古墳時代前期の方形周溝墓10基・円形周溝墓1基。中世の館の礎。(遺構僅数)	市：調査1986-87 報告1988			
25	中里前遺跡	高崎市倉賀野町	古墳時代後期・奈良・平安時代の墓穴住居。中世の火葬土壌。	市：調査1995報告1996			
26	滝川C遺跡	高崎市上滝町	古墳時代前期の土坑。	市：調査1974			
27	滝川B遺跡	高崎市上滝町	平安時代A _s -B下水田の可能性。	市：報告1987			
28	下舟田滝川A遺跡	高崎市舟田町	縄文時代の石器。方形周溝墓1基。古墳時代初期・奈良・平安時代の集落。A _s -B下水田の可能性。	市：調査1989報告1990			
29	八幡原B遺跡	高崎市八幡原町	中世前期遺構・井戸・柱穴列。	市：調査1974			
30	八幡原A遺跡	高崎市八幡原町	縄文時代前期の住居。中・近世の溝。平安時代のA _s -B下水田。近世A _s -A降下後の復旧耕地。	市：報告1981			
31	上滝社宮司東遺跡	高崎市上滝町	古墳時代前期の土坑。平安時代のA _s -B下水田。	市：調査1989報告1990			
32	上滝舟田北遺跡	高崎市上滝町	古墳時代のH _r -F A下水田。平安時代のA _s -B下水田。	市：調査1989報告1990			
33	下滝舟田前遺跡	高崎市下滝町	溝・土坑。古墳時代前期の土器。	市：調査1989報告1990			
34	下滝舟田南遺跡	高崎市下滝町	古墳時代後期の住居。中世土坑。	市：調査1989報告1990			
35	東島里遺跡	高崎市倉賀野町	平安時代のA _s -B下水田。				
36	横手井戸舟田遺跡	前橋市横手町	近世A _s -A泥炭埋設土坑。中世の洪水層下水田。平安時代のA _s -B下水田。	市：調査1998-99 『年報』18			
37	横手湯田遺跡	前橋市横手町	近世A _s -A泥炭埋設土坑。近世の洪水層下水田。中世の洪水層下水田・埋設土。平安時代のA _s -B下水田。古墳時代のH _r -F P下水田・H _r -F A下水田・住居・方形周溝墓。	市：調査1995-98 『年報』16-18			
38	村中遺跡	前橋市駒光路町	中世屋敷の礎・懸柱建物。平安時代のA _s -B下水田。古墳時代のA _s -C混土下水田。	市：調査1998-99 『年報』18			
39	横手早稲田遺跡	前橋市横手町	中世の洪水層下水田。平安時代のA _s -B下水田。古墳時代のH _r -F A・H _r -F P下水田。古墳時代前期の住居。	市：調査1998 『年報』18			
40	横手宮田遺跡	前橋市横手町	古墳時代のA _s -C混土下水田・H _r -F A下水田。平安時代のA _s -B下水田。中世洪水層下水田。	市：調査1995 『年報』16			
41	亀里平塚遺跡	前橋市亀里町	古墳時代のH _r -F A下水田。平安時代のA _s -B下水田。中世の洪水層下水田。	市：調査1998-99 『年報』17・18			
42	笹原塚古墳	高崎市元島名町	前方後方墳。粘土器内より鏡・石剣・刀等出土。周堀内より壺等出土。	市：調査1980報告1981			
43	岡中伊勢山古墳	高崎市下滝町	全長30m高さ3.5mの前方後円墳。横穴式周堀型石室。複室。	群馬大学研究調査			
44	観音山古墳	高崎市総貫町	全長101m高さ9.4mの前方後円墳。横穴式石室。	市：保存修理報告1981			
45	普賢寺古墳	高崎市総貫町	全長71m高さ6.6mの前方後円墳。横穴式石室。墓石。	市：『群馬県遺跡台帳』			
46	不動山古墳	高崎市総貫町	全長94m高さ10.1mの前方後円墳。横穴式石室。墓石。二段構成。	市：『群馬県遺跡台帳』			
47	蟹沢古墳	高崎市柴崎町	古墳時代前期の古墳。正始元年陳是作四神四獸鏡・獻文帝三神三獸鏡・製内行花文鏡2面(計4面)・鉄斧・槍等出土。	墳丘形平に築り古墳の形。位置不明			
48	浅間山古墳	高崎市柴崎町	径30m高さ5.5mほどの円墳。鏡・勾玉・大刀等出土。横穴式石室(?)	市：『群馬県遺跡台帳』			
49	龜玉山古墳	高崎市柴崎町	前方後円墳。横穴式石室。刀柄・勾玉・金環出土。	市：『群馬県遺跡台帳』			
番号	中世城館名	所在地	立地	存続期間	築・在城者名	遺構・遺物等	備考
50	高野塚遺構(横溝)	高崎市高野町	平地	16世紀	阿久沢氏	堀	
51	元島名城	高崎市元島名町	平地	15世紀	島名伊豆守 長井豊前守政実	堀・戸口・板小堀・板碑	1976・78年一部発掘調査
52	元島名内出	高崎市元島名町	屋敷	16世紀	阿久沢氏	堀・土居・戸口	
53	陸田屋敷	高崎市中太郎町	屋敷	16世紀	高井氏	堀・土塙	
54	新屋敷	高崎市横手町	平地		新井重安・重久	堀・土居・郭	
55	江原屋敷	高崎市上滝町	平地	16世紀末	江原重安・重久	堀・土居・郭	
56	上滝中屋敷	高崎市上滝町	平地	南北朝期		堀・壺・茶碗・摺鉢等の陶磁器	1980年発掘調査
57	慈恩寺	高崎市下滝町	屋敷			室町時代	
58	中島内出	高崎市中島町	平地	16世紀	田口兵庫兼祐	土居・板碑	
59	下滝内出	高崎市下滝町	平地	文明9年	足利成氏 大井田氏	堀・土居・戸口・井戸・別郭	文明9年成氏7ヶ月間仮御所。近世天田氏住
60	八幡山館	高崎市下滝町	平地	室町時代		堀	
61	堀米屋敷	高崎市倉賀野町	屋敷	16世紀	堀米氏		堀米氏墓地：宝塔等
62	大野寄居	高崎市柴崎町	平地		柴崎地蔵	堀・土居・戸口	近年破壊
63	大下屋敷	高崎市柴崎町	屋敷	16世紀	田口貞真	2重堀・土居・櫓台	

●県：群馬県教育委員会 市：高崎市教育委員会 団：財団法人群馬県風土文化財調査事業団

●第8図中の番号と一覧表の番号は同一である。

第3章 遺構と遺物

第1節 近世の調査

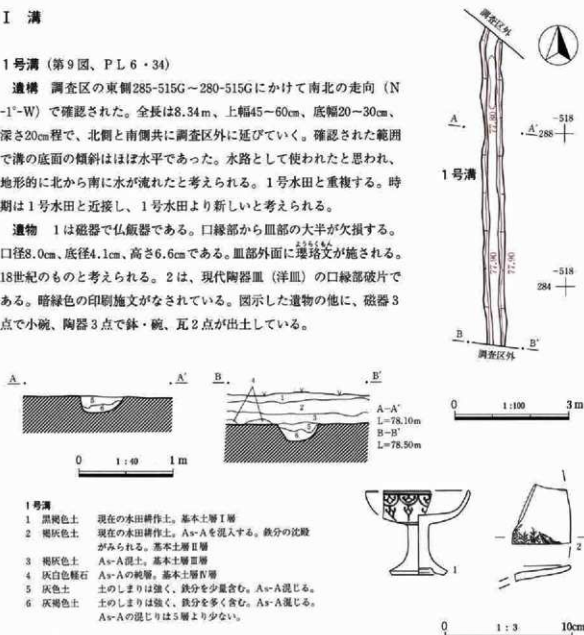
第1面の調査で確認された遺構は、溝20条と水田である。水田は畦畔が確認でき、畦畔で区画がわかるものや、農具の痕跡のみわかるものとなっている。比較的1区で水田区画がよく確認できた。溝は水田に伴うものと、水田よりやや新しいものが混在する。

I 溝

1号溝 (第9図、P L 6・34)

遺構 調査区の東側285-515G～280-515Gにかけて南北の走向(N-1°-W)で確認された。全長は8.34m、上幅45～60cm、底幅20～30cm、深さ20cm程で、北側と南側共に調査区外に延びていく。確認された範囲で溝の底面の傾斜はほぼ水平であった。水路として使われたと思われる。地形的に北から南に水が流れたと考えられる。1号水田と重複する。時期は1号水田と近接し、1号水田より新しいと考えられる。

遺物 1は磁器で仏飯器である。口縁部から皿部の大半が欠損する。口径8.0cm、底径4.1cm、高さ6.6cmである。皿部外面に環珞文が施される。18世紀のものと考えられる。2は、現代陶器皿(洋皿)の口縁部破片である。暗緑色の印刷施文がなされている。図示した遺物の他に、磁器3点で小碗、陶器3点で鉢・碗、瓦2点が出土している。



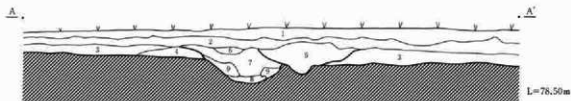
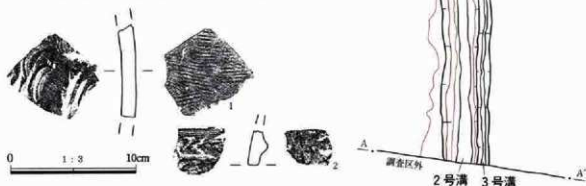
第9図 1面1号溝実測図・出土遺物

2号溝 (第10図、P.L 6・34)

遺構 調査区の東側295-525G～280-525Gにかけて南北の走向 (N-1°-E) で確認された。全長は13.96m、上幅80～115cm、底幅15～40cm、深さ25cmほどである。北側南側共に調査区外に延びていく。底面はわずかに北から南に傾斜している。3号溝と重複する。土層断面の観察で、2号溝は3号溝より古い。また1号畦畔と接することから1・2・3号水田と同時期と思われる、水田に関連した水路と考える。

遺物 1は須恵器の中型寛の胴部破片で、外面に平行叩き、内面に同心円当て目がみられ、割れ口の一面に磨耗痕がみられ、割れた後に再利用された可能性がある。2は円筒埴輪の胴部破片で、透孔の上端部が残存する。外面は縦ハケ後突帯貼付けのための横ナデ、内面はナデが施される。

図示した遺物の他に、陶器2点、軟質陶器3点、須恵器1点、瓦1点が出土している。陶器は18世紀ごろのものである。軟質陶器は焙烙の破片で、18～19世紀のものである。



2・3号溝

- 1 黒褐色土 現在の水田耕作土。基本土層Ⅰ層
- 2 黒灰色土 現在の水田耕作土。As-Aを混入する。鉄分の沈殿がみられる。基本土層Ⅱ層
- 3 黄褐色土 As-A混土。基本土層Ⅲ層
- 4 黄褐色土 中世の洪水層。As-A下水田の基盤層。As-Aを含まない。基本土層Ⅳ層
- 5 暗灰色土 As-Aを多量に含む。鉄分・炭化物少量混じる。
- 6 灰褐色土 As-Aを多量に含む。鉄分(赤褐色)を多く含む。
- 7 灰色土 As-Aを多量に含む。鉄分・流砂が多量に混じる。
- 8 流砂
- 9 壁面の崩落と思われる。土質はⅣ層に近い。



第10図 1面2・3号溝実測図・2号溝出土遺物

3号溝（第10図、P L 6）

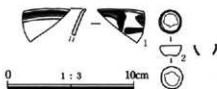
遺構 調査区の東側295-525G-280-525Gにかけて、南北の走向（N-1°-W）で確認された。全長は13.24mで、上幅25-45cm、底幅5-15cm、深さ10cmほどである。北側南側共に調査区外に延びていく。底面はわずかに北から南に傾斜している。2号溝と重複する。土層断面の観察により、3号溝は2号溝より新しい。II層直下よりV層まで掘り込まれている。

遺物 出土遺物はなかった。

4号溝（第11・15図、P L 7・34）

遺構 調査区の東側320-565G-285-565Gにかけて、ほぼ南北の走向（N-2°-W）で確認された。全長は37.5mで、上幅70-90cm、底幅25-50cm、深さ30cm前後で、北側南側ともに調査区外に続く。底面はわずかに北から南に傾斜している。5・7・8・9号溝と重複し、5・6・7号水田の区画と関係なく掘られている。重複する遺構の中で5号溝を除いて最も新しい時期のものである。

遺物 1は磁器の染付碗で口縁部破片である。19世紀と思われる。2は煙管の雁首節で薄く古様である。雁首節の口径は1.7cmである。17-18世紀のものと思われる。図示した遺物の他に、磁器13点、陶器9点、瓦2点、須恵器1点、石製品等3点が出土している。磁器は小碗・碗・蓋・小皿で18-20世紀のものである。陶器は碗・皿・鉢で17-20世紀のものである。石製品は石板の破片・石灰岩である。



第11図 1面4号溝出土遺物

5号溝（第12-15図、P L 7・34-37）

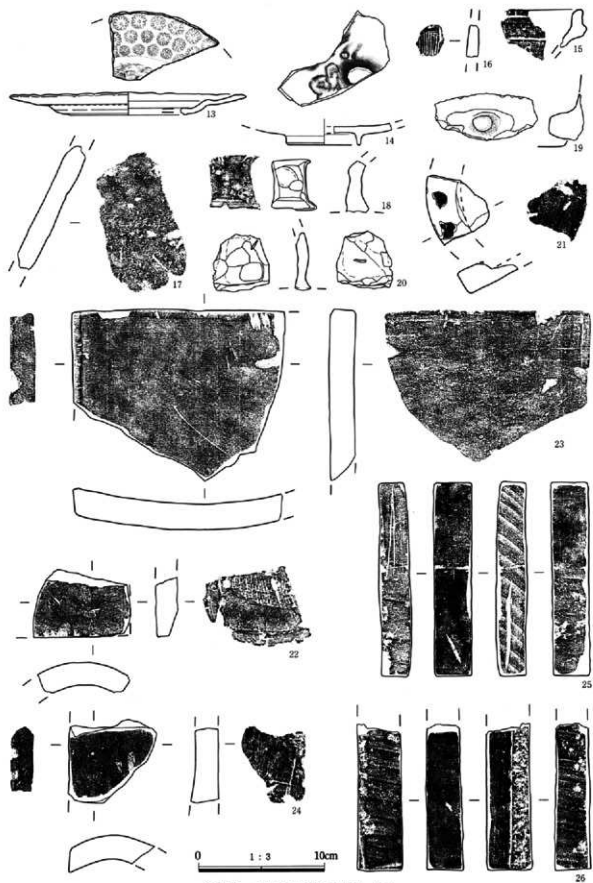
遺構 調査区の東側345-590G-285-560Gにかけて、北西から南東にゆるくS字状に蛇行して確認された。北側及び南側で調査区外に続く。全長は、69.3mで、上幅130-265cm、底幅25-85cm、深さ40-50cmである。底面は北から南にわずかに傾斜している。4・7・8・9・11・19・20号溝と重複する。11号溝とは同一の時期であるが他の重複する遺構の中では最も新しい。埋没土にビニール等が含まれていた。しかし、水田区画と5号溝の形状が一致し、水田と同じ時期に構築され、現代まで使用されたものと考えられる。5号溝中央やや南で8号・9号溝と接する。この接する部分の下流（南）に木杭が打ち込まれていた。残っていたものは新しいものであったので遺物扱いはしなかったが堰のようなものを築いて、水をせき止め8号・9号溝に水を送水していた施設と考えられる。

遺物 1-9は磁器である。1-3は青磁で、1は水注と思われる。産地は伊万里で18世紀。2は皿（小鉢）で13-15世紀。3は碗で外面に刺文が施され、13-15世紀。4は白磁の菊皿で口縁部は欠損する。底径は6.8cmと推定される。産地は伊万里系で18世紀。6は碗で、口縁部の一部と底部を欠損し、口径10.0cmである。19世紀と思われる。7は仏飯器で、脚部以下を欠損する。口径6.2cmである。18-19世紀で伊万里系である。8は染付の碗の底部で、底径4.0cmである。産地は伊万里系で18世紀。9は染付の皿で口縁部を欠損し、底径6.2cmで19世紀。5は人形の頭部で、頭部以下欠損。顔（前面）と後頭部の型造りで、唇の部分に赤彩色が施されている。10-16は陶器である。10は土鍋蓋で、摘の径7.6cm、底径21.2cmである。鉄軸と茶褐釉が施されている。19-20世紀。11は灯火皿で底部を欠損し、口径11.0cmで、18世紀。12は仏飯器で、口径5.8cm、底径2.8cm、高さ3.0cmである。産地は美濃で18世紀。13は現代陶器で、口径18.8cm、底径9.3cmと推定される。型押しで、印刷施文である。14は皿で口縁部を欠損し、底径5.7cmである。内面に鉄絵が施されている。産

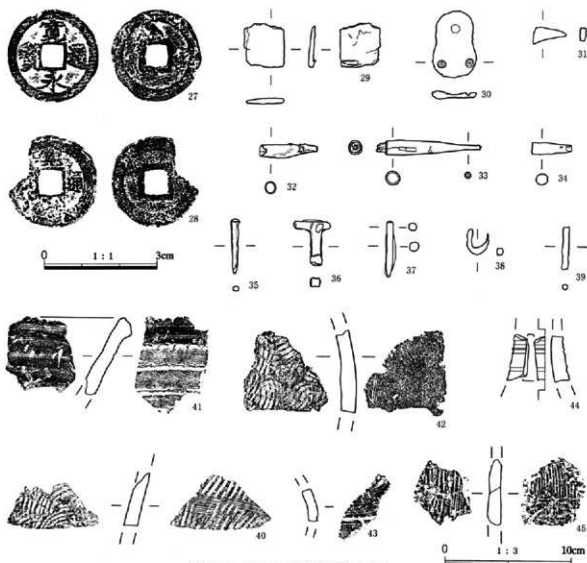
地は美濃で18世紀のものである。15は播鉢の口縁部で、内面に卸目がみられる。16は播鉢の胴部破片である。割れ口を研磨して、円板状にして再利用していると思われる。産地は信楽で18世紀である。17-20は軟質陶器である。17は播鉢の胴部破片。18は焙烙の内側の耳で、18-19世紀。19は火鉢。20は手づくね製作で中世軟質陶器の可能性がある。21-24は瓦である。21は鐘瓦で、表面に雲母粒が含まれ、燻しがみられる。22は丸瓦で外面に雲母粒と燻しがみられ、内面に刺子様整形痕がみられる。23は棧瓦と思われ、表面に雲母粒、燻しがみられ、端部・側部ともに面取りがなされている。24は棧瓦で表面に雲母粒・燻しがみられる。25・26は砥石で流紋岩製。25は丸鋸で側面と小口を切断している。26は側面で鋸引き後半削りしている。27-39は金属製品。27・28は古銭である。27は「寛永通寶」で、太字、裏面に文字はない。厚さは0.90-1.12mm、径23.96-24.13mmで古寛永と思われる。28は「寛口通口」で細文字、裏面に文字はない。厚さ1.24-1.26mm、径24.40mmで寛永通寶である。29・30は製品種不明の板状で鉄製である。29は片側に袋状の折り曲げがある。30は3穴あり、残存する外形は旧状である。飯止めは埴目状で、裏側に座金がある。31は鉄製の火打ち金で、鋸型の端部と思われる。32-34は煙管の吸口部である。32は部分的に潰れ、鏝継ぎ部にわれがみられる。33は羅字が残存し、羅字は篠様の材である。吸口は薄作りで鏝継ぎ目がある。羅字と吸口の間に紙巻が残存する。34は口部を欠損し、薄作りで鏝継ぎ目がある。35は鉄製釘。断面方形で頭部が残存する。36-39は鉄製で、製品種不明である。36は「T」字状の先端は調査時以降の欠損で、断面は円形である。「T」字状の接合際の断面形は隅丸方形である。37は断面隅丸方形で錆化少ない。38は釣り針状で、断面方形である。39は断面円形で錆化薄く、長く割れ、洋鉄と思われる。40-42は須恵器甕である。40は中型甕の胴部破片で、外面平行叩き、内面同心円当てが目みられる。41は中型甕の口縁部破片で、外面に波状文と沈線区画がみられる。42は中型甕の胴部破片で、外面にナデ痕、内面同心円当てが目みられる。43は須恵器小型壺の肩部と思われる。44は須恵器高坏脚部で、長脚二段透孔と思われる。外面に沈線区画がある。45は円筒埴輪の胴部破片である。図示した遺物の他に、磁器139点、陶器104点、軟質陶器1点、瓦31点、須恵器5点、石器等4点が出土している。磁器は、碗・小碗・皿・水注があり、染付を主体としている。18-20世紀である。陶器は、大甕・播鉢・鉢・碗・小碗・灯火皿・皿・徳利がある。時期は17-20世紀で、産地は唐津系、瀬戸、美濃である。石器は火打ち石・石灰岩である。



第12図 1面5号溝出土遺物(1)



第13圖 1面5号溝出土遺物(2)



第14図 1面5号溝出土遺物(3)

7号溝 (第15図)

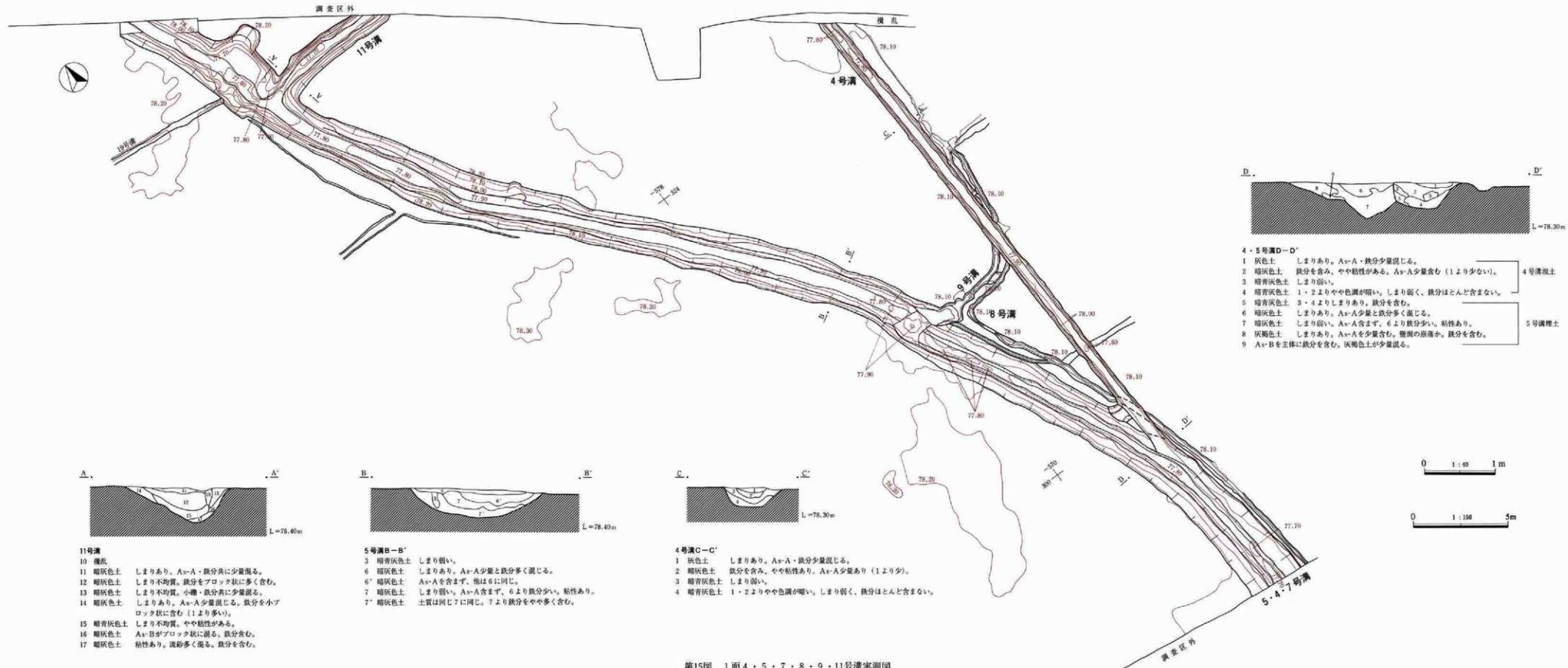
遺構 5・6・7号水田の西側を区画する畦畔(7・8号畦畔)の内側に接するように確認された。全長32.9m、上幅15~40cm、底幅5~20cm、深さ10cm前後である。4号溝により2ヶ所分断されている。埋没土はAs-Aを多量に含んだ混土であった。7号水田の水口で8号溝と連結し、6号水田の水口および5号水田の水口で9号溝とつながる。重複する4号溝より古い。水田と同じ時期で、水田の水利施設と考える。

遺物 出土遺物はなかった。

8号溝 (第15図)

遺構 6号水田を区画する西側の畦畔(8号畦畔)の外側で、5号溝の東で確認された。埋没土はAs-Aを多量に含む混土である。北側で5号溝とつながる。南側で7号水田の水口で7号溝とつながる。全長6.00mで、上幅15~20cm、底幅10~15cm、深さ5cmほどである。5号溝から水を取り入れて7号溝に水を送るものと思われる。水田と同じ時期で、水田の水利施設と考える。

遺物 出土遺物はなかった。



11号溝

10 礫混
 11 暗灰色土 しまりあり、A>A・鉄分少量混じる。
 12 暗灰色土 しまり不均質、鉄分をブロック状に多く含む。
 13 暗灰色土 しまり不均質、小礫・鉄分共に少量混じる。
 14 暗灰色土 しまりあり、A>A少量混じる。鉄分を小ブロック状に含む（1より多い）。
 15 暗青灰色土 しまり不均質、やや粘性がある。
 16 暗灰色土 A>Bがブロック状に混る。鉄分含む。
 17 暗灰色土 粘性あり、流砂多く混る。鉄分を含む。

5号溝B-B'

3 暗青灰色土 しまり弱い。
 6 暗灰色土 しまりあり、A>A少量と鉄分多く混じる。
 6' 暗灰色土 A>Aを含ませ、他は6に同じ。
 7 暗灰色土 しまり弱い、A>A含ませ、6より鉄分少く、粘性あり。
 7' 暗灰色土 土質は同じ7に同じ。7より鉄分をやや多く含む。

4号溝C-C'

1 灰色土 しまりあり、A>A・鉄分少量混じる。
 2 暗灰色土 鉄分を含む、やや粘性あり、A>A少量あり（1より少く）。
 3 暗青灰色土 しまり弱い。
 4 暗青灰色土 1・2よりやや色調が暗い、しまり弱く、鉄分ほとんど含まない。

4・5号溝D-D'

1 灰色土 しまりあり、A>A・鉄分少量混じる。
 2 暗灰色土 鉄分を含む、やや粘性がある、A>A少量含む（1より少ない）。
 3 暗青灰色土 しまり弱い。
 4 暗青灰色土 1・2よりやや色調が暗い、しまり弱く、鉄分ほとんど含まない。
 5 暗青灰色土 3・4よりしまりあり、鉄分を含む。
 6 暗灰色土 しまりあり、A>A少量と鉄分多く混じる。
 7 暗灰色土 しまり弱い、A>A含ませ、6より鉄分少く、粘性あり。
 8 灰褐色土 しまりあり、A>Aを少量含む。礫の混入が、鉄分を含む。
 9 A>Bを主体に鉄分を含む。灰褐色土が少量混る。

第15図 1面4・5・7・8・9・11号溝実測図

9号溝 (第15図)

遺構 6号水田を区画する西側の畦畔(8号畦畔)の外側で、5号溝とつながり、5号水田水口で7号溝とつながる状態で確認された。全長は9.80m、上幅25~50cm、底幅10~40cm、深さ5cmほどである。埋没土はAs-Aを多量に含む混土であった。4号溝と重複し、4号溝より新しい。5号溝から水を取り入れて、6号水田水口で7号溝に、さらに5号水田水口で5号水田に送水したと思われる。水田と同じ時期で、水田の水利施設と考える。

遺物 出土遺物はなかった。

11号溝 (第15・16図, P L 37)

遺構 調査区の中央北側340-580G~340-585Gにかけて、5号溝から分かれて東西の走向(N-88°-E)で確認された。東側は調査区外に続く。全長は6.40mで、上幅130~160cm、底幅25~60cm、深さ48cmである。溝の底面は5号溝より20cmほど高い。分岐点の下流(5号溝中)に、木杭で堰を築いていた痕跡が確認された。この付近は5号溝の幅がやや広がる。11号溝は、5号溝から水を取り入れて送水する施設と考える。時期は5号溝と同じと考える。

遺物 1・2は陶器である。1は、底部から胴部にかけての碗の破片で、底径4.0cmと推定される。産地は唐津・京焼き系で18世紀である。2は兼^{ひらけ}蓋で、底部に荒削りがみられる。底径5.0cm、高さ5.5cmである。産地は美濃で18世紀である。図示した遺物の他に、磁器6点、陶器7点、瓦3点である。磁器は碗・皿で18~19世紀である。陶器は、碗・灯火皿・甕で、産地は、美濃、唐津・京焼き系、常滑で18~19世紀である。

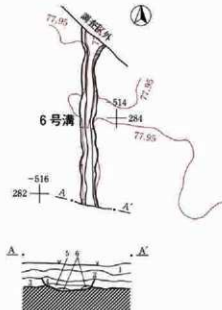
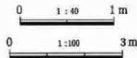


第16図 1面11号溝出土遺物

6号溝 (第17図)

遺構 調査区の東端で285-510G~280-510Gにかけて南北の走向(N-1°-W)で確認された。全長は4.7mで、上幅30~60cm、底幅15~45cm、深さ10cm前後である。北側南側共に調査区外に延びていく。底面の傾斜はほぼ水平であった。Ⅲ層を掘り込んでV層中に達する。重複する1号水田より新しい。

遺物 出土遺物はなかった。



6号溝

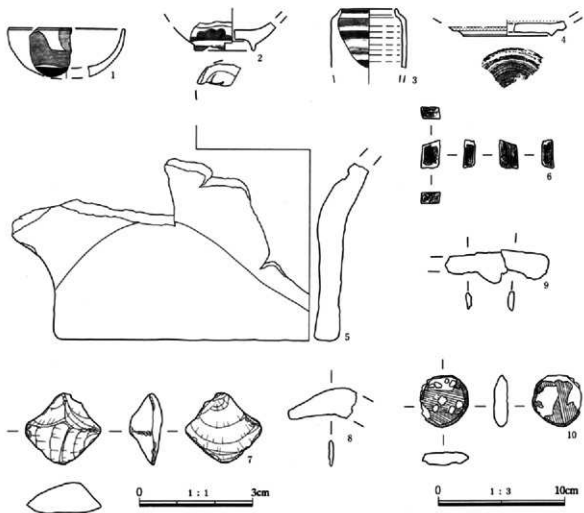
- 1 黒褐色土 現在の水田耕作土。基本土層Ⅰ層
- 2 褐灰色土 現在の水田耕作土。A-Aを混入する。鉄分の沈殿がみられる。基本土層Ⅱ層
- 3 黄灰色土 As-A混土。基本土層Ⅲ層
- 4 暗灰色土 しまりあり。As-A・鉄分少量混じる。
- 5 灰褐色土 しまりあり。As-A・鉄分少量混じる。
- 6 黄褐色土 やや粘性あり。

第17図 1面6号溝実測図

13号溝 (第18・19図、P L 7・37)

遺構 調査区の中央で、ほぼ南北の走向 (N-5°-E) で確認された。14号溝と接する部分でクランク状に曲がる。全長51.9m、上幅95~335cm、底幅23~110cm、深さ26~46cmである。重複は14・17・19・21・22号溝で、これらの溝はほぼ同じ時期のものと考えられる。北側・南側ともに調査区外に続く。14号溝の接続部分が確認された中では最も深くなっている。9・10・12号水田と接することや12号水田の南西の畦畔が13号溝の形状と一致することから、少なくとも水田の時期から現代まで使われていたと考えられる。

遺物 1~3は磁器である。1は赤絵の施された小碗で、底部を欠損する。口径9.1cmと推定され、産地は伊万里で18世紀と思われる。2は伊万里系の染付碗の底部である。底径4.6cmで18世紀。3は口縁部破片で、口径4.6cmと推定される。茶入れと思われ、緑釉が施されている。20世紀。4は陶器で皿の底部破片で、底径7.0cmと推定される。産地は瀬戸・美濃で17世紀前半と思われる。5は軟質陶器で置壺と思われる。6は珪化木。7は火打ち石で、周縁および稜に使用痕がみられる。8・9は鉄製鎌で同一個体である。錆化薄く、洋鉄と思われる。10は磨石である。表面の一部が風化し剥落している。図示した遺物の他に、磁器38点、陶器29点、軟質陶器7点、瓦1点、須恵器1点、土師器16点、石器1点が出土している。磁器は碗・皿で、18~20世紀である。陶器は、碗・徳利・鉢・播鉢で、産地は唐津系、美濃で17~19世紀である。

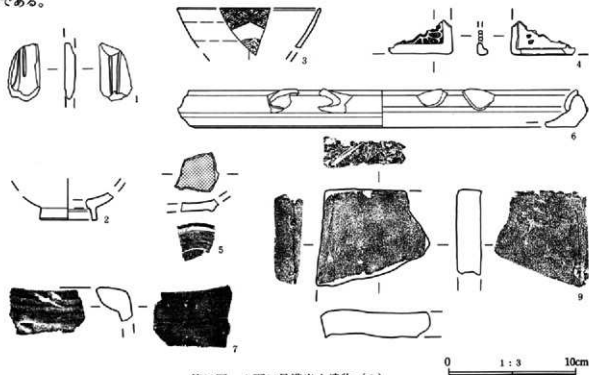


第18図 1面13号溝出土遺物

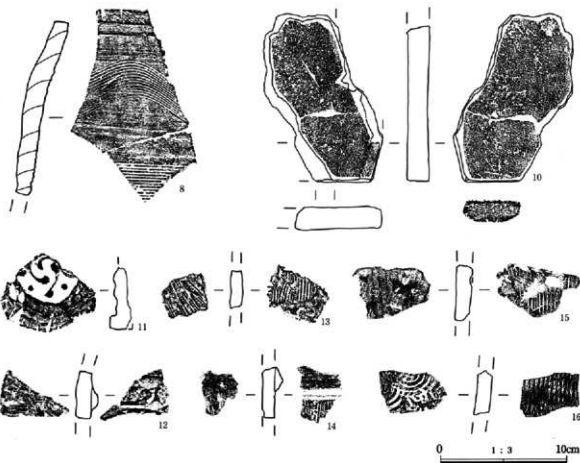
14号溝 (第20~22図、P.L.37・38)

遺構 調査区の西から13号溝に接する335-680G~340-605G付近で、東西の走向(N-86°-E)で確認された。全長は69.4m、上幅は125~215cm、底幅25~60cm、深さ60cmである。底面は西から東に傾斜している。13号溝とほぼ同じ時期と思われる。2面25号溝を壊している。2面25号溝からわずかに北にずれて掘られている。

遺物 1~4は磁器である。1は中国製の青磁で粘土色。器種は不明である。13~15世紀と思われる。2は青磁の碗の底部破片で、底径4.6cmと推定される。産地は伊万里で18世紀と思われる。3は碗の口縁部破片で、口径11.4cmと推定される。転写染付で、19世紀末~20世紀初めである。4は伊万里系の白磁の香炉で18~19世紀である。5は皿の底部破片で、低い三角形の削り出し高台、志野軸が施される。産地は美濃で、16世紀末~17世紀初めである。6~8は軟質陶器である。6は焙烙で底部欠損する。内外面に耳が付く。口径31.0cm、底径30.5cmと推定される。19世紀末と思われる。7は火鉢の口縁部で18~19世紀と思われる。8は置き壺、あるいはコンロの可能性が考えられる。外面に櫛描波状文と掻目が見られる。18~19世紀。9~11は瓦である。9は棧瓦で、端部・側部共に面取りがなされ、外面に雲母粒と煙しがみられる。10は道具瓦と思われ、端部・側部面取りがなされ、外面に煙しがみられる。11は丸瓦と思われる。12~15は円筒埴輪の胴部破片である。12は外面突帯貼付け後横ナデ、内面横ハケの整形がなされている。突帯の断面は台形で突出度大きい。13は内外面とも縦ハケがなされている。透孔の左側部が残存する。14は外面縦ハケ、突帯貼付けの横ナデがなされている。15は外面縦ハケ、内面縦ハケ後横ナデがなされている。胎土に結晶片岩が含まれる。16は須恵器中型甕の胴部破片で、外面に平行叩き、内面に同心円当てが目が見られる。割れ口の1面に磨耗痕がみられ、再利用していたと思われる。図示した遺物の他に、磁器63点、陶器51点、瓦11点、須恵器3点、石器1点が出土している。磁器は碗・小碗・皿・重鉢で、18世紀初頭~20世紀である。陶器は甕・鉢・搥鉢・大皿・小碗・皿・灯火皿で、16世紀末~19世紀前半ごろまでで、産地は美濃、瀬戸・美濃、唐津系である。



第20図 1面14号溝出土遺物(1)



第21図 1面14号溝出土遺物(2)

15号溝 (第22図)

遺構 14号溝の南で、東西の走向(N-86°-E)で確認された。全長は57.3mで、上幅30~75cm、底幅15~60cm、深さ15cmである。底面は西から東に緩く傾斜している。埋没土はAs-Aを多量に含んだ混土層であった。16号溝と重複する。土層断面の観察により、16号溝より新しい時期である。

遺物 出土遺物はなかった。

16号溝 (第22図)

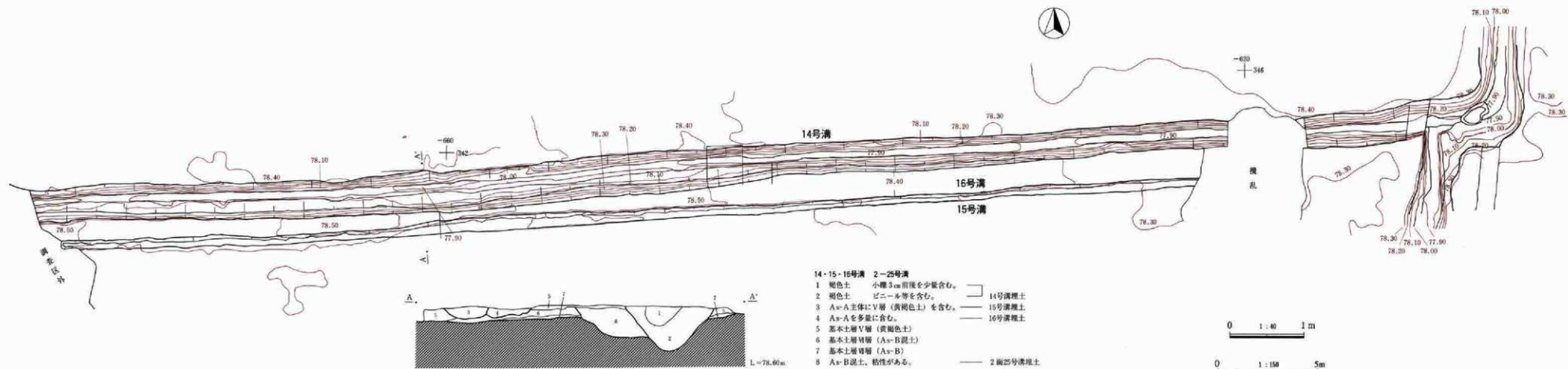
遺構 調査ミスで土層断面のみの確認になってしまった。15号溝に重複し、東西の走向であったと思われる。埋没土はAs-Aで埋まっていた。15号溝より古く、As-A降下前の時期である。

遺物 出土遺物はなかった。

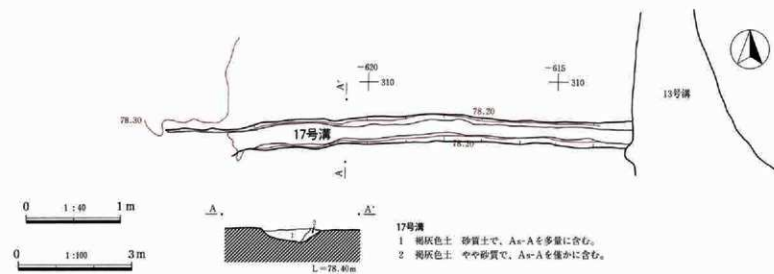
17号溝 (第23図)

遺構 調査区の中央南側305-620G~305-610Gで、東西の走向(N-89°-E)で確認された。全長は14.9mで、上幅55~80cm、底幅25~55cm、深さ15cm前後である。西側は不明瞭であるが調査区外に延びると考えられる。東側は13号溝につながる。底面は西から東に傾斜している。15号水田と接すること、埋没土がAs-Aを主体であることから水田と同じ時期で、水田と関連した施設と考える。

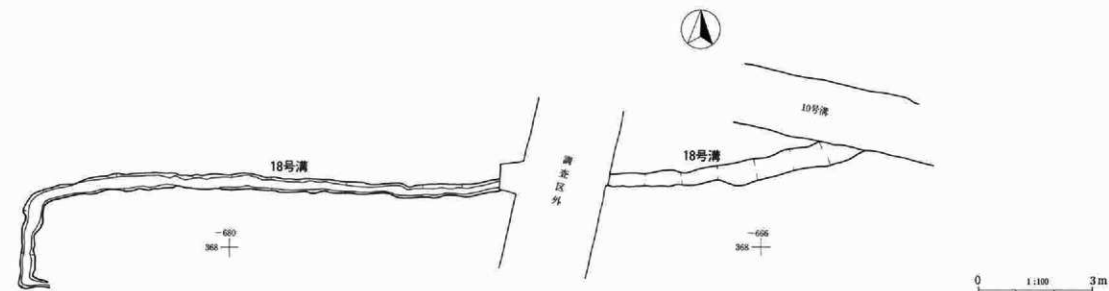
遺物 出土遺物はなかった。



第22図 1面14・15・16号溝実測図



第23図 1面17号溝実測図



第24図 1面18号溝実測図

18号溝 (第24図、P L 7)

遺構 3区中央の16号水田の南西の隅から北西の隅で「コ」の字状に、さらに東に伸び、2区北西の17号水田の北を東に伸び、調査区内の攪乱部分までつながる。2区と3区の間で調査区外になるが同一の溝として調査を行った。全長24.0m、上幅25～65cm、底幅10～35cm、深さ5cmである。埋没土はAs-Aを多量に含んだ混土で、水田の埋没土と同じであり、水田と同じ時期で、水田と関連するものと考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

19号溝 (第25図)

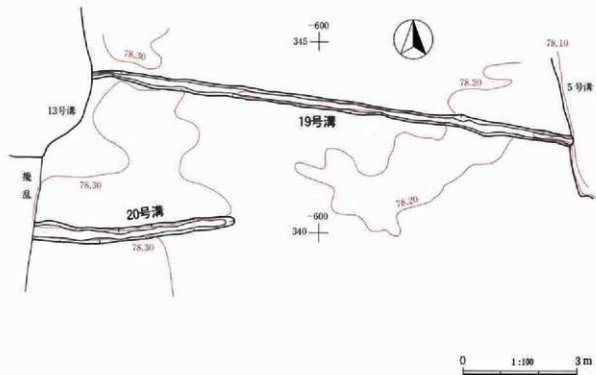
遺構 調査区の中央東寄り340-605G～340-590Gで、5号溝と13号溝に挟まれたところで、東西の走向(N-82°-W)で確認された。全長12.8m、上幅13～40cm、底幅5～20cm、深さ6cmである。埋没土はⅢ層であった。西から東に、13号溝から5号溝に緩く傾斜している。5号溝と13号溝と接し、ほぼ同じ時期と考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

20号溝 (第25図)

遺構 19号溝の南340-605G～340-600Gで、東西の走向(N-85°-E)で確認された。全長5.4mで、上幅30～55cm、底幅10～35cm、深さ5cmである。西側は現代の水路で壊されている。傾きはほぼ水平である。埋没土はⅢ層であった。時期は19号溝とは同じである。

遺物 出土遺物はなかった。



第25図 1面19・20号溝実測図

第3章 遺構と遺物

21号溝 (第26図)

遺構 調査区の中央南側305-605G～305-590Gで、東西の走向(N-84°-E)で確認された。全長19.0mで、上幅30～60cm、底幅15～30cm、深さ2～5cmである。13号溝と西端で接し、東は305-590G付近で途切れる。底面は東から西に傾斜している。13号溝に水が流れるように傾斜している。12・13号水田と関連したもので、水田の排水のための水路の可能性が考えられる。 **遺物** 出土遺物はなかった。

22号溝 (第27図)

遺構 21号溝の南側300-610G～295-585Gで、北西から南東の走向(N-74°-W)で確認された。全長24.7mで、上幅35～60cm、底幅15～40cmである。13号溝と西端で接し、東は295-580G付近で途切れる。底面は東から西に緩く傾斜している。13号溝に水が流れる状態である。13号溝と同じ時期と考える。南側が調査区域外のため他の遺構との関連は不明である。 **遺物** 出土遺物はなかった。

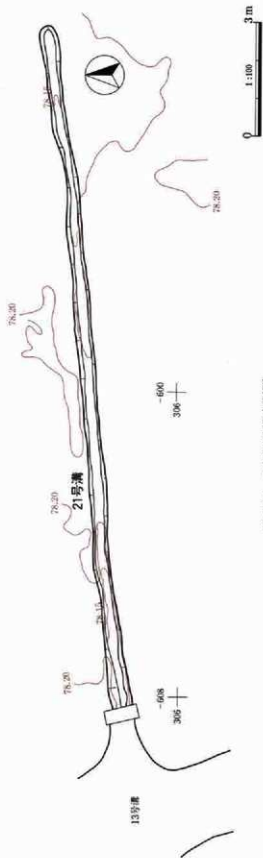
II 水田

Ⅲ層(As-A混土)およびⅣ層(As-A)上面まで重機による掘削を行った。調査区中央部分はⅢ～Ⅴ層が現代の耕作でなくなって、Ⅵ層及びⅦ層になってしまう。そのため水田が確認できなかった。畦畔19条、

1面(As-A下)水田計測表

水田No.	面積(m ²)	長軸(m)	短軸(m)	畦畔と耕作面の高さ(m)		水口の有無	備 考
				畦畔部分	耕作面		
1	(143.6)	(15.9)	(14.0)	78.01	77.95		調査区外、1-1・2・3・6溝、残乱
2	(7.7)	(5.8)	(2.8)	78.14	78.10		調査区外、残乱
3	(209.6)	18.6	14.3	78.15	78.09		調査区外
4	(153.8)	19.2	(8.5)	78.15	78.08		調査区外
5	(40.0)	(10.0)	(8.2)	78.14	78.01	○	調査区外、残乱
6	(224.6)	18.4	13.5	78.18	78.11	○	調査区外、1-4溝残乱
7	(247.8)	(18.0)	16.5	78.18	78.11	○	調査区外、1-4溝
8	(95.8)	(12.7)	10.6	78.25	78.20		調査区外、残乱
9	157.3	21.4	9.3	78.32	78.18		調査区外、残乱
10	391.1	22.5	21.5	78.32	78.19		南側不明
11	287.6	22.0	12.4	78.32	78.16		残乱
12	(138.7)	(15.5)	(11.8)	78.42	78.35		調査区外、残乱
13	(27.5)	(3.8)	9.9	78.40	78.36		西側不明、1-14溝
14	(35.4)	(12.8)	(5.7)	78.28	78.23		調査区外、残乱
15	(2.7)	(2.1)	2.0	78.50	78.46		調査区外
16	(36.4)	(12.3)	3.0	78.52	78.45		調査区外
17	(35.0)	(12.3)	3.0	78.45	78.40		調査区外、残乱
18	(2.9)	(4.6)	(1.1)	78.47	78.45		残乱、北側不明
19	84.3	18.1	5.0	78.42	78.38		
20	(275.1)	(24.9)	10.3	78.40	78.37		北・東側不明、1-14溝
21	(343.1)	(27.8)	10.3	78.45	78.36		調査区外、北側不明
22	(40.7)	(14.2)	3.4	78.40	78.31		調査区外
23	(23.5)	(6.8)	(3.5)	—	78.55		調査区外、東・南・西側不明
24	(8.1)	(6.2)	(1.3)	—	78.50		残乱、北・東不明
25	(7.2)	(3.0)	(2.8)	78.51	78.42		南・西側不明
26	(2.5)	(6.0)	(0.5)	78.51	78.49		調査区外
27	(5.1)	(4.7)	(1.1)	—	78.40		調査区外、残乱

() は推定値、または一部分の計測値。



第26图 1面21号溝実測図



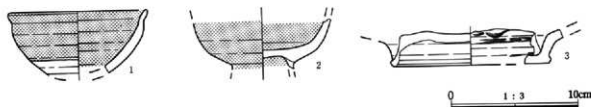
第1節 近世の調査

第27图 1面22号溝実測図

15・16・17・18・19号水田 (第29・30図、P L 5・38・39)

遺構 3区から2区の西にかけて確認された。17号水田から19号水田は「L」字型に曲がる。16号水田と17号水田は、2区と3区の境界で一部調査区外になるが、同一の水田区画であると推定される。農具の跡が、ほぼ全面で確認できた。7号水田を除いて確認できた農具の跡の長軸方向は、東西、南北であるのに対し15～19号水田の農具の跡は、北東または南西である。農具の跡は、Ⅳ層 (As-A) 及びⅢ層 (As-A混土) を取り除くとⅥ層 (As-B混土) に達している。14号水田も同様にⅥ層 (As-B混土) に農具の跡がみられた。このⅥ層 (As-B混土) は、2面17号溝の埋没土になる。15～19号水田は、ほぼ2面17号溝と重なる。周辺は、表土を掘削するとⅥ・Ⅶ層になってしまい、周辺より低い状況に農具の痕跡があったことになる。

遺物 16号水田を除いて明確に水田から出土した遺物はなかった。1～3は16号水田より出土した。全て陶器である。1は底部を欠損する天目碗で、口径11.0cm、産地不明で17～18世紀のものと思われる。2は口縁部と底部を欠損する碗で、底部に高台が付く。高台の先端部を欠損する。18世紀京焼き系と思われる。3は端反皿の底部破片で、底径12.6cmと推定され、内面に鉄絵が施される。産地は美濃で、16～17世紀と思われる。

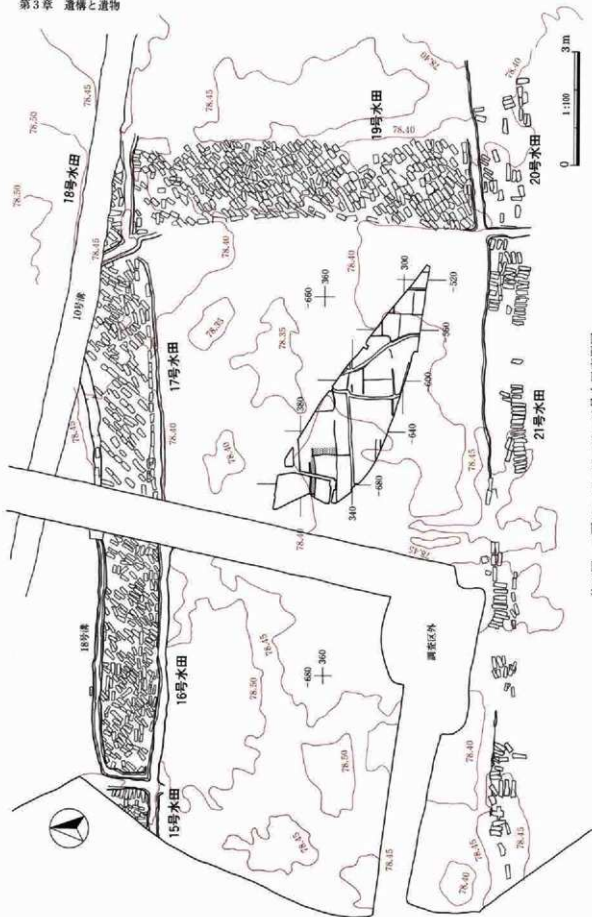


第29図 1面16号水田出土遺物

7号水田 (第31図、P L 4)

遺構 5号水田の南で北 (5号畦畔)・西 (8号畦畔)・東 (4号畦畔) の畦畔は確認できたが、南の畦畔は調査区外になると想定され、確認できなかった。西の8号畦畔は、5号溝が緩く曲線を描くのと同時に、東に張り出した緩い曲線を描く。東の4号畦畔は、ほぼ南北の直線で、長さ16.3mで北の5号畦畔とほぼ直交する。北の5号畦畔は、ほぼ東西の直線で、長さ18.2mで、東と西が区切れて水口となっている。東の水口は、6号水田から水が入るようになっている。西の水口は7号溝によって区切られている。7号溝は6号水田水口の9号溝から、8号溝を通じて5号溝から直接水を取り入れられるようになっている。7号水田は、ほぼ全面に農具の跡が確認できた。幅20cm前後、長さ60～80cmの長方形である。隅が丸くなっているものもあるが、底面を観察すると角張っている。3～5cmほどⅣ層 (As-A) で、一部Ⅲ層 (As-A混土) で覆われていた。20cm前後の角型の刃先を持った農具が推定される。北の5号畦畔付近は畦畔と農具の跡が直交するようにみられる。畦畔の手前から刃先を入れ、畦畔で止めるように掘っている。

遺物 明確に水田から出土した遺物はなかった。



第30图 1面15・16・17・18・19号水田実測図



第31図 1面7号水田実測図

Ⅲ 遺構外出土遺物 (第32~35図、P.L.39~42)

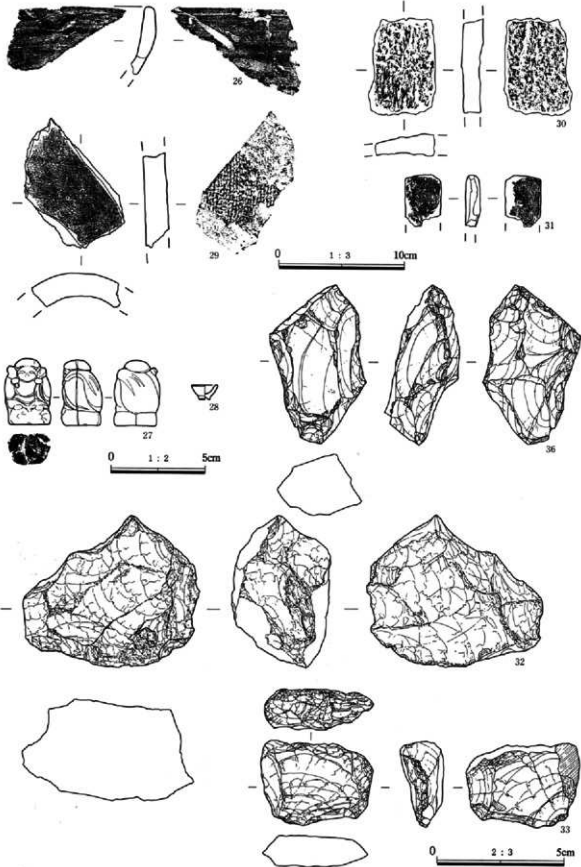
1面の表土(I層・II層)掘削時および遺構確認時に、明確に遺構に伴わない遺物をここで報告する。1~7は磁器である。そのうち1~3は中国製の青磁である。1は大皿の底部破片で、口縁部を欠損する。底径8.4cmと推定される。2は碗の胴部破片で、13~14世紀と思われる。3は梅瓶の胴部破片で12世紀と思われる。5は染付皿の底部破片で、底径7.6cmと推定される。16世紀末~17世紀初め景徳鎮産と思われる。6は皿の底部破片で、底径5.8cmと推定される。景徳鎮が伊万里産で16~17世紀と思われる。4は小碗の口縁部破片で外面に転写染付が施されている。7は碗の胴部破片で伊万里産である。4・7は18世紀である。8・9は陶胎磁器である。8は小碗の口縁部破片で、外面に赤上絵が施されている。9は碗の胴部破片である。8・9は18世紀である。10~24は陶器である。10は天目碗の口縁部破片で、口径12.2cmと推定される。17~18世紀で産地不明である。11は天目碗の胴部破片で15~18世紀である。12は皿で、底部を一部欠損する。口径9.0cmで、16世紀末~17世紀初めで産地は不明である。13は皿の口縁部破片で、口径11.2cmと推定され、16世紀で産地は不明である。14は皿の口縁部破片で、口縁部が水平近く反る。産地は瀬戸・美濃で16~17世紀である。15・16は皿で底部破片である。15の底径は6.2cm、16の底径は9.2cmで、低い三角形の削り出し高台が残存する。産地は美濃で16世紀である。17は皿の底部破片で、底径6.0cmで、低い三角形の削り出し高台が残存する。産地は美濃で17世紀である。18は皿の底部破片で、削り出し高台が付くと思われる。産地は美濃で17世紀である。19は灯火皿で口唇部がわずかに欠損する。口径7.2cmで、18世紀ごろで産地は不明である。20は梅瓶の胴部破片で、外面に印花文が施される。14世紀末~15世紀初めで、産地は瀬戸・美濃である。21は摺鉢の口縁部破片で、17世紀、堺港産である。22~24は壺の胴部破片で中世、産地は常滑である。25・26は軟質陶器である。25は火鉢あるいは手あぶりの胴部破片で、外面に紅葉の刻印が施されている。26は焙烙の口縁部破片で18~19世紀である。27は土製品で大黒像である。高さ3.5cmで型合わせ、最後に底面に粘土をつめている。中は空洞である。雲母顔料を表面に塗った痕跡がみられる。28は土製品で難小杯である。底部に高台が付く。口径1.4cm、底径0.6cm、高さ0.7cmで、外面に楽焼き用の透明釉が、内面に白色釉が施されている。楽焼きまたは陶器と思われるが土師質土器に近い。29は丸瓦で、外面回転痕、内面菰目がみられる。30~37は石器・石製品である。30は板碑の破片で緑色片岩製である。表裏とも文字等の痕跡はみられなかった。31は流紋岩製の砥石で、1面のみが使用面である。32~37は火打ち石である。32が石英で他は玉瑞製である。側縁や稜が使用により磨減している。38~49は金属製品である。38・39は煙管で、鋼主材である。38は吸口部で、片側が押し潰れた状態である。鏝継ぎ部分で割れている。39は雁首部で径1.6cm、全体に薄作りである。鏝継ぎは側部で行い、鏝は黒味が強く、銀主体と思われる。40は銚子の注口部で鋼主材である。押し潰されて扁平になっている。鏝継ぎで、注口先端が欠損し、元部に接合痕がみられる。41・42は釘で鉄製である。41は断面方形で、頭部・先端共に調査時以降の欠損である。42は断面方形で、錆化少なく、頭部は残存する。先端部は旧時欠損である。43は蹄鉄で、錆化少ない。左右6対の長方形の釘穴がみられる。5本の釘が残存する。釘の断面は方形である。44は鉄製で、品種は不明である。断面長方形で、錆化に層状剥落がみられる。45は鉄製で、釘または鏝と思われる。断面は方形で、片側は旧時欠損で、一方は調査時以降の欠損である。46は鋤物製の工具で、内外面に錆化少なく、割れた後に再整形している。47は鉄製で板状、品種は不明である。48は牛の鼻環で鋼主材である。薬番椽か所と留か所がある。49は銅線で、厚さ1.18~1.21mm、径22.83~23.22mmである。「寛永通寶」で細文字である。背面に背文字はみられない。50~53は須恵器である。50は碗の底部破片で、糸切り後高台を貼付けている。底径は8.0cmである。器面は磨耗し、胎土は軽い。9世紀後半と思われる。51は大型の甕の可能性ある。東海地方からの搬入品と思わ

第3章 遺構と遺物

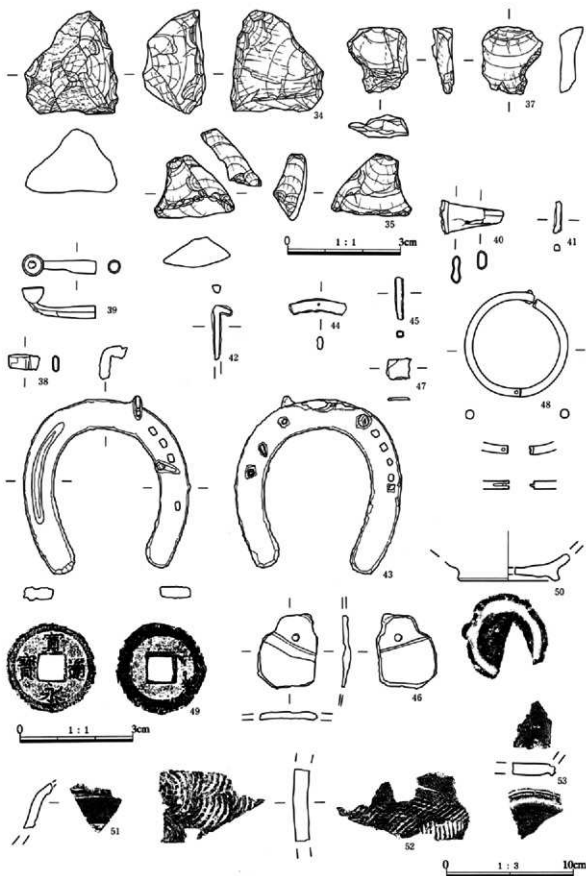
れる。外面に波状文と沈線区画が、内面に自然釉が施される。陶器Ⅰ期5～6段階で6世紀前半と思われる。52は中型の甕の頸部から胴部破片で、外面に平行叩き、内面に同心円当て目がみられる。6世紀と思われる。53は碗の底部破片で、削り出し高台である。8世紀と思われる。54～61は円筒埴輪で、55は口縁部破片で、他は胴部破片である。55は口縁部がやや外反する。下端に透孔の上端が残存する。62～64は縄文時代の石器と思われる。62は硬質泥岩製の砥石で敲石としても利用している。表面に横方向の擦痕が、側面に縦と横方向の擦痕がみられる。表裏に敲きの痕跡がある。63・64は粗粒輝石安山岩製で磨石で敲石としても利用している。63は表面が風化し、剥落が目立つ。図示した遺物の他に、磁器は105点で、碗・皿・猪口などであり、16～20世紀である。陶器214点で、碗・小碗・皿・鉢・土瓶等があり、16～20世紀である。軟質陶器144点、瓦12点、須恵器28点、土師器275点（内古式土師器10点を含む）、埴輪45点、火打石10点、石灰岩1点などである。



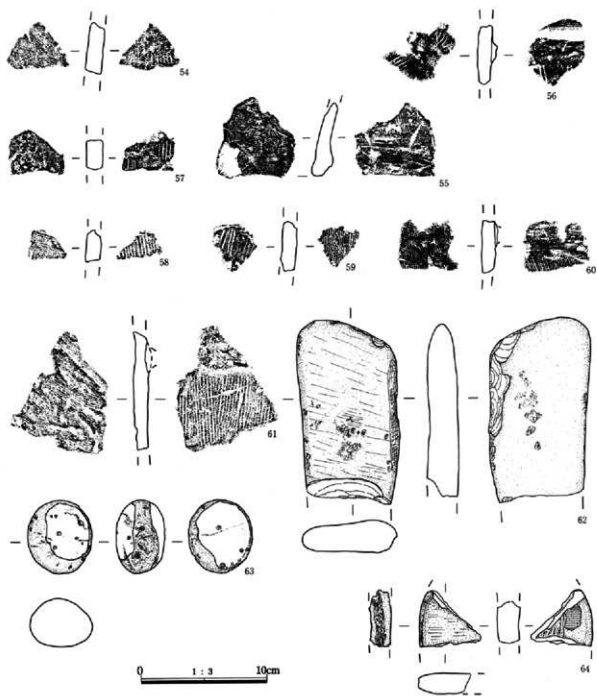
第32図 1面遺構外出土遺物(1)



第33図 1面遺構外出土遺物(2)



第34図 1面遺構外出土遺物(3)



第35図 1面遺構外出土遺物(4)

第2節 中世の調査

第2面として、Ⅷ層（As-B）下を調査した。確認された遺構は溝34条、土坑78基、掘立柱建物跡1棟、水田跡である。そのうち、Ⅷ層より上からの掘り込まれている遺構を中世として、第2面調査を分けて報告する。この節で報告する遺構は溝25条、土坑78基、掘立柱建物跡1棟である。

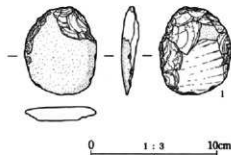
I 土坑

1号土坑（第42図、P L 9）

遺構 調査区の東側285-535Gで確認された。平面形は不整形な円形で、規模は長軸108cm、短軸97cm、深さ29cmである。長軸方位はN-47°-Eである。底面は凹凸がみられる。壁は北側が緩やかに立ち上がる。埋没土はⅥ～Ⅹ層の泥土で人為埋没であった。**遺物** 出土遺物はなかった。

2号土坑（第36・43図、P L 42）

遺構 調査区の東側290-535Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸99cm、短軸69cm、深さ24cmである。長軸方位はN-5°-Eである。底面はほぼ平坦である。壁は中ほどまではまっすぐに立ち上がり、上半分はやや外側に開く。埋没土は人為埋没と思われる。**遺物** 1は黒色頁岩製のスクレイパーで、表面大半に自然面を残し、下縁を除き細かい調整がみられる。下縁にみられる剝離は使用によるものと思われる。



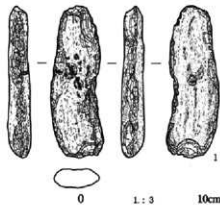
第36図 2面2号土坑出土遺物

3号土坑（第43図、P L 9）

遺構 調査区東側の南端285-560Gで確認された。平面形は不整形な円形で、規模は長軸94cm、短軸83cm、深さ30cmである。長軸方位はN-85°-Wである。底面の面積は狭く、摺鉢状である。埋没土はⅥ～Ⅹ層の泥土が中心で人為埋没であった。**遺物** 出土遺物はなかった。

4号土坑（第43図、P L 9）

遺構 調査区の東側290-555Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸86cm、短軸74cm、深さ24cmである。長軸方位はN-53°-Wである。断面形は半球状を呈す。埋没土は人為埋没であった。**遺物** 出土遺物はなかった。



第37図 2面5号土坑出土遺物

5号土坑（第37・43図、P L 9・42）

遺構 調査区の東側290-550Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸114cm、短軸64cm、深さ38cmである。長軸方位は、N-45°-Eである。底面は平坦である。埋没土はⅥ～Ⅷ層の泥土が主体である。**遺物** 1は敲石で、側面に鋭い物を敲いた痕跡が観察される。石材は黒色片岩で

ある。この時代以前に製作されたものを再利用していたと考えられる。図示した遺物の他に、5～6世紀の土師器埴と考える小破片1点が出土している。

6号土坑（第43図、P L 9）

遺構 調査区の東側300-560Gで確認された。平面形は、北辺が丸味を帯びた長方形で、規模は長軸148cm、短軸80cm、深さ26cmである。長軸方位は、N-12°-Eである。底面はやや凹凸がみられ、中央付近で窪みがみられる。壁はやや外側に開くように立ち上がる。埋没土はVI～IX層が主体の混土で、人為埋没である。

遺物 出土遺物はなかった。

7号土坑（第43図、P L 9）

遺構 調査区の東側290-535Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸314cm、短軸96cm、深さ48cmである。長軸方位はN-87°-Eである。底面は東から西に傾斜し、西側が深くなっている。壁はほぼまっすぐに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。**遺物** 図示し得なかったが、4世紀ごろと思われる土師器台付甕の小破片1点が出土している。

8号土坑（第43図、P L 10）

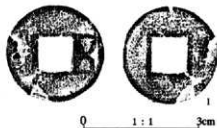
遺構 調査区の東側290-530Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸141cm、短軸78cm、深さ52cmである。長軸方位はN-8°-Wである。底面は平坦で、北側の底面に礫がみられた。礫は人為的な物ではないと考える。壁はほぼまっすぐに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。**遺物** 図示し得なかったが、9世紀ごろと思われる土師器坏の小破片が1点出土している。

9号土坑（第44図、P L 10）

遺構 調査区の東側295-550Gで確認された。平面形は東側がやや丸味を帯びた長方形で、規模は長軸218cm、短軸73cm、深さ36cmである。長軸方位はN-85°-Wである。底面は平坦であるが、東側でやや窪みがみられる。壁は、東側を除いてはほぼまっすぐに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。**遺物** 出土遺物はなかった。

10号土坑（第38・44図、P L 10・42）

遺構 調査区の東側305-550Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸116cm、短軸108cm、深さ36cmである。底面はわずかに凹凸がみられる。壁は底面近くが外側に開き気味で立ち上がる。埋没土は人為埋没である。**遺物** 1は土坑埋土中層より出土した。銅銭で表面右に文字がみられ、文字から中国後漢の五銖銭と思われる。裏面に文字はみられない。厚さ1.00～1.05mm、径25.63mmである。



第38図 2面10号土坑出土遺物

11号土坑（第44図、P L 10）

遺構 調査区の東側305-565Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸180cm、短軸115cm、深さ33cmである。長軸方位はN-87°-Eである。底面は平坦である。壁はやや開き気味で立ち上がる。埋没土は人為

第3章 遺構と遺物

埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

12号土坑 (第44図、P L 10)

遺構 調査区の東側320-565Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸196cm、短軸92cm、深さ23cmである。長軸方位はN-85°-Eである。底面は、壁際で凹凸がみられる。壁はやや開き気味に立ち上がる。埋没土はVI~IX層主体の混土で、人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

13号土坑 (第44図、P L 10)

遺構 調査区の東側295-565Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸200cm、短軸99cm、深さ37cmである。長軸方位はN-2°-Eである。底面は平坦である。東側の壁はまっすぐに立ち上がるが、西側の壁はやや開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没である。遺物 図示し得なかったが、土師器14点が出土した。いずれも小破片で、4世紀ごろの台付甕、9世紀ごろの坏などである。

14号土坑 (第44図、P L 11)

遺構 調査区の東側305-575Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸140cm、短軸120cm、深さ22cmである。底面は凹凸がみられ、西側が深くなっている。西側の壁はまっすぐに立ち上がるが、東側の壁が外に開く。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

15号土坑 (第45図、P L 11)

遺構 調査区の東側290-545Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸158cm、短軸66cm、深さ68cmである。長軸方位はN-7°-Eである。底面は南から北に傾斜し、北側が深くなっている。南側の壁が底面から10cmほどまっすぐに立ち上がり、外側に開く。その他の方向の壁はまっすぐに立ち上がる。埋没土はVI層~VII層の混土主体で、人為埋没であった。南東の位置に隣接して16号土坑が確認されている。遺物 出土遺物はなかった。

16号土坑 (第45図、P L 11)

遺構 調査区の東側290-550Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸278cm、短軸98cm、深さ50cmである。長軸方位はN-82°-Wである。底面は平坦であるが、西側の壁際がわずかに窪みがみられる。北・南側の壁はほぼまっすぐに立ち上がる。東・西側の壁は外側に開く。東側の壁は階段状になっているが、調査ミスで掘りすぎの可能性がある。遺物 出土遺物はなかった。

17号土坑 (第45図、P L 11)

遺構 調査区の東側290-565Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸110cm、短軸105cm、深さ39cmである。底面は平坦である。壁は外側に開き気味である。埋没土はVI~VII層主体の混土で、人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

18号土坑 (第45図、P L 11)

遺構 調査区の東側315-555Gで確認された。平面形は方形で、規模は長軸110cm、短軸105cm、深さ27cm

である。底面はわずかに凹凸がみられる。壁は外側に開き気味に立ち上がる。埋没土は、VI~IX層主体の泥土で、人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

19号土坑 (第45図、P L11)

遺構 調査区の東側325-575Gで確認された。平面形は不整形な長方形で、規模は長軸152cm、短軸90cm、深さ31cmである。長軸方位はN-76°-Wである。底面は平坦である。壁はまっすぐに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

20号土坑 (第45図、P L12)

遺構 調査区の東側南端280-525Gで、北側半分が確認された。残りの南側は調査区域外になってしまう。平面形はおそらく南北方向に長軸をもつ長方形と推定される。規模は短軸115cm、深さ45cmである。長軸方位はN-81°-Wと推定される。底面は平坦であるが、わずかに西側で窪みがみられる。壁はまっすぐに立ち上がる。埋没土は人為埋没で、掘り込み面はV層下面からである。遺物 出土遺物はなかった。

21号土坑 (第46図、P L12)

遺構 3区北側390-675Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸186cm、短軸96cm、深さ52cmである。長軸方位はN-1°-Wである。底面は平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。埋没土は人為埋没である。遺物 出土遺物はなかった。

22号土坑 (第46図、P L12)

遺構 3区北側385-670Gで確認された。北側に76号土坑が確認されている。平面形は楕円形で、規模は長軸154cm、短軸106cm、深さ42cmである。長軸方位はN-54°-Wである。底面は北側から南側に傾斜し、南側が深い。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

23号土坑 (第46図、P L12)

遺構 3区北端395-690Gで確認された。北側が一部調査区域外に続く。平面形は、南北方向に長軸を持つ長方形と推定される。確認された長軸152cm、短軸102cm、深さ45cmである。長軸方位はN-3°-Wである。土層断面より、VI層以下を掘り込んでいる。15号溝と南側の一部が重複する。平面のプラン確認時において、15号溝より新しいという所見を得た。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

24号土坑 (第46図、P L12)

遺構 調査区の西側355-670Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸100cm、短軸80cm、深さ40cmである。長軸方位はN-3°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。遺物 図示し得なかったが、6世紀ごろの土師器甕の小破片1点が出土している。

25号土坑 (第46図、P L12)

遺構 3区中央東寄り370-670Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸128cm、短軸76cm、深さ32cmである。長軸方位はN-7°-Eである。底面は平坦である。東壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は人為埋没

第3章 遺構と遺物

であった。遺物 出土遺物はなかった。

26号土坑 (第46図、P L 13)

遺構 調査区の西端355-660Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸120cm、短軸84cm、深さ37cmである。長軸方位はN-82°-Wである。底面はわずかに西側から東側に傾斜している。東側の壁はほぼまっすぐに立ち上がる。他の方向の壁は外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

27号土坑 (第47図、P L 13)

遺構 3区中央370-675Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸115cm、短軸95cm、深さ16cmである。長軸方位はN-82°-Eである。底面は凹凸がみられ、中央部が深い。壁は外側に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。17号溝と重複する。平面プラン確認において、17号溝より新しいという所見を得た。遺物 出土遺物はなかった。

28号土坑 (第47図、P L 13)

遺構 3区南側365-680Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸234cm、短軸114cm、深さ20cmである。長軸方位はN-1°-Eである。底面は南側から北側に傾斜している。壁は外側に開く。埋没土は人為埋没であった。17号溝と北側の大半が重複する。平面プラン確認において、17号溝より新しいという所見を得た。遺物 出土遺物はなかった。

29号土坑 (第47図)

遺構 調査区の西端345-685Gで確認された。南側に30号土坑が隣接して確認された。平面形は方形で、長軸113cm、短軸111cm、深さ34cmである。底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。19号溝と南側の一部が重複する。土層断面の観察で、19号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

30号土坑 (第47図、P L 13)

遺構 調査区の西端345-685Gで確認された。西側が調査区域外に続く。平面形は不整形な楕円形と推定される。規模は、長軸92cm以上、短軸100cm、深さ26cmである。長軸方位はN-77°-Eである。底面は丸底で、壁は外側に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没で、掘り込み面はVI層中からである。19号溝と重複する。平面プラン確認において、19号溝より新しいという所見を得た。遺物 出土遺物はなかった。

31号土坑 (第47図)

遺構 3区北側395-680Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸70cm、短軸63cm、深さ14cmである。底面は楕円状になっている。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

32号土坑 (第47図、P L 14)

遺構 3区北側385-680Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸120cm、短軸76cm、深さ43cmである。長軸方位はN-8°-Wである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋

没であった。遺物 出土遺物はなかった。

33号土坑 (第47図、P L 13)

遺構 調査区の西側345-670Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸168cm、短軸60cm、深さ37cmである。長軸方位はN-84°-Eである。底面は西側半分が一段下がる。壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。22号溝と重複する。22号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

34号土坑 (第48図、P L 14)

遺構 調査区の西側345-665Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸154cm、短軸87cm、深さ29cmである。長軸方位はN-80°-Wである。底面はわずかに凹凸がみられる。壁は外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。21号溝と重複する。21号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

35号土坑 (第48図、P L 14)

遺構 調査区の西側345-670Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸115cm、短軸90cm、深さ30cmである。長軸方位はN-89°-Eである。底面は平坦である。北壁に比べ南壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は、VI~Ⅷ層を主体とした混土で、人為埋没である。21号溝と重複する。21号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

36号土坑 (第48図)

遺構 調査区の西側345-660Gで確認された。平面形は不整形な方で、規模は長軸115cm、短軸104cm、深さ30cmである。底面は北から南に傾斜している。壁は外に開きながら立ち上がる。埋没土は、VI~Ⅷ層を主体とした混土で、人為埋没であった。21号溝と重複する。21号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

37号土坑 (第48図、P L 14)

遺構 調査区の中央北寄り360-625Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸92cm、短軸86cm、深さ46cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は、VI~Ⅷ層を主体とした混土で、人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

38号土坑 (第48図)

遺構 調査区の中央北寄り360-610Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸86cm、短軸83cm、深さ31cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は、VI~Ⅷ層を主体とした混土で、人為埋没であった。20号溝と北側の一部が重複する。遺物 出土遺物はなかった。

39号土坑 (第39・48図、P L 42)

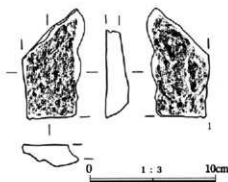
遺構 調査区の中央北寄り350-610Gで確認された。平面形は不整形な楕円形で、規模は長軸107cm、短軸70cm、深さ25cmである。長軸方位はN-28°-Eである。底面は平坦であるが、南側の壁は傾斜がゆるく、凹凸がある。埋没土は人為埋没であった。遺物 1は板碑の破片と思われ、石材は緑色片岩である。表面が比較的平坦であり、文字等の痕跡は認められなかった。裏面は凹凸がみられる。

第3章 遺構と遺物

40号土坑 (第48図)

遺構 調査区の中央北寄り345-610Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸56cm、短軸53cm、深さ25cmである。底面は平坦である。南壁は緩い傾斜で立ち上がる。他の方向の壁は階段状である。埋没土は、VI-X層を主体とした混土で、人為埋没である。21号溝と重複する。21号溝より新しい。

遺物 出土遺物はなかった。



第39図 2面39号土坑出土遺物

41号土坑 (第48図、P L 14)

遺構 調査区の中央345-625Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸122cm、短軸100cm、深さ32cmである。長軸方位はN-88°-Eである。底面は平坦である。壁は外に開き気味に立ち上がる。埋没土はVI-X層を主体とした混土で、人為埋没であった。21号溝と重複する。21号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

42号土坑 (第48図、P L 14)

遺構 調査区の西側340-640Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸138cm、短軸104cm、深さ16cmである。長軸方位はN-1°-Eである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。 **遺物** 出土遺物はなかった。

43号土坑 (第49図、P L 15)

遺構 調査区の西側南端310-635Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸240cm、短軸86cm、深さ33cmである。長軸方位はN-4°-Wである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土はVI層-VII層の混土で、人為埋没であった。24号溝と重複する。平面プラン確認において、19号溝より新しいとの所見を得た。 **遺物** 出土遺物はなかった。

44号土坑 (第49図、P L 15)

遺構 調査区の西側335-660Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸192cm、短軸100cm、深さ30cmである。長軸方位はN-88°-Wである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。23号溝と重複する。23号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

45号土坑 (第49図)

遺構 調査区の西側335-695Gで確認された。平面形は不整形な円形で、規模は長軸107cm、短軸94cm、深さ14cmである。北東隅に接するピットは本土坑に伴うか不明である。底面は凹凸がみられる。北壁はまっすぐに立ち上がるが、他の方向の壁は緩やかな傾斜である。埋没土はVI-IX層の混土で、人為埋没であった。23号溝と重複し、23号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

46号土坑 (第49図)

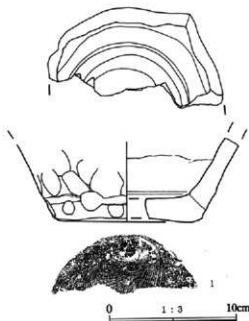
遺構 調査区西側335-655Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸90cm、短軸71cm、深さ21cmで

ある。長軸方位はN-74°-Wである。底面は凹凸がみられ、揺斜状である。埋没土はVI~VII層を主体とした混土で、人為埋没であった。23号溝と重複する。23号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

47号土坑 (第49図、P L 15)

遺構 調査区の西側335-650Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸118cm、短軸82cm、深さ16cmである。長軸方位はN-2°-Eである。底面はわずかに凹凸がみられ、中央付近が窪む。壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。23・38号溝と重複する。23・38号溝より新しい。

遺物 出土遺物はなかった。



第40図 2面48号土坑出土遺物

48号土坑 (第40・49図、P L 15・42)

遺構 調査区の中央北側345-600Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸118cm、短軸68cm、深さ35cmである。長軸方位はN-83°-Eである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味で立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。26号溝と重複する。26号溝より新しい。遺物 1は埋没土の下層より出土した。軟質陶器の壺の底部破片で、底径11.8cmである。外面に指圧痕、底面に左回転糸切り痕、内面による磨耗がみられる。胎土は極めて軽い。14世紀と思われる。

49号土坑 (第49図)

遺構 調査区の西側335-640Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸112cm、短軸78cm、深さ22cmである。長軸方位はN-1°-Eである。底面はわずかに凹凸がみられ、壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。23号溝と重複し、南側で77号土坑と重複する。23号溝より新しい。77号土坑との関係は不明である。遺物 出土遺物はなかった。

77号土坑 (第49図)

遺構 調査区の西側335-640Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸116cm、短軸46cm、深さ20cmである。長軸方位はN-87°-Wである。底面は平坦である。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。23・38号溝と重複し、北側で49号土坑と重複する。23・38号溝より新しい。49号土坑との関係は不明である。遺物 出土遺物はなかった。

50号土坑 (第50図、P L 16)

遺構 調査区の西側335-630Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸112cm、短軸76cm、深さ26cmである。長軸方位はN-1°-Eである。底面はわずかに凹凸がみられ、北側が深くなる。壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。37号溝と重複し、37号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

第3章 遺構と遺物

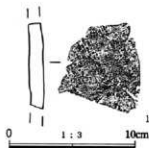
51号土坑 (第50図、P L 16)

遺構 調査区の西側325-635Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸180cm、短軸106cm、深さ30cmである。長軸方位はN-87°-Wである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。24号溝と重複する。平面プラン確認において24号溝より新しいという所見を得た。

遺物 出土遺物はなかった。

52号土坑 (第41・50図、P L 42)

遺構 調査区の中央南端305-630Gで確認された。南側は調査区外に続き、土坑全体は調査できなかった。平面形は長方形と推定される。規模は、短軸154cm、深さ26cmである。長軸方位はN-2°-Eと推定される。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は人為埋没で、掘り込み面はV層下面からである。遺物 1は埋没土の中層より出土した。陶器甕の胴部破片で、産地は常滑で中世と思われる。



第41図 2面52号土坑出土遺物

53号土坑 (第50図、P L 16)

遺構 調査区の中央南側310-605Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸118cm、短軸65cm、深さ22cmである。長軸方位はN-2°-Wである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。37号溝と重複する。37号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

54号土坑 (第50図)

遺構 調査区の中央330-605Gで確認された。平面形は不整形な長方形で、規模は長軸124cm、短軸55cm、深さ22cmである。長軸方位はN-3°-Eである。底面は凹凸があり、中央部分が深くなる。壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

55号土坑 (第50図、P L 16)

遺構 調査区の中央335-600Gで確認された。平面形は不整形な楕円形で、規模は長軸112cm、短軸63cm、深さ22cmである。長軸方位はN-15°-Eである。底面は平坦であるが、北東の隅で一段下がり深くなっている。埋没土はVI層～VII層主体の混土で、人為埋没であった。37号溝と重複する。37号溝より新しい。

遺物 出土遺物はなかった。

56号土坑 (第51図、P L 16)

遺構 調査区の中央320-605Gで確認された。平面形は不整形な楕円形で、規模は長軸73cm、短軸56cm、深さ22cmである。長軸方位はN-9°-Eである。底面は小さく、楕円状である。埋没土はVI層で自然埋没と考えられる。遺物 出土遺物はなかった。

57号土坑 (第51図、P L 16)

遺構 調査区の中央315-600Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸122cm、短軸86cm、深さ32cmである。長軸方位はN-83°-Eである。底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であ

た。37号溝と重複する。37号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

58号土坑 (第51図、P L 16)

遺構 調査区の中央南寄り315-600Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸83cm、短軸61cm、深さ26cmである。長軸方位はN-88°-Wである。底面は平坦である。壁は緩やかに傾斜し、立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。37号溝と重複する。37号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

59号土坑 (第51図、P L 17)

遺構 調査区の中央東寄り325-585Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸92cm、短軸90cm、深さ40cmである。底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

60号土坑 (第51図、P L 17)

遺構 調査区の東側325-575Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸96cm、短軸68cm、深さ58cmである。長軸方位はN-6°-Eである。壁は底面から垂直に立ち上がり、徐々に傾斜が緩く広がる。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

61号土坑 (第51図、P L 17)

遺構 調査区中央東より315-590Gで確認された。平面形は不整形な楕円形で、規模は長軸118cm、短軸92cm、深さ16cmである。長軸方位はN-86°-Wである。底面は凹凸がみられ、皿状である。埋没土は人為埋没である。遺物 出土遺物はなかった。

62号土坑 (第51図)

遺構 調査区の中央320-600Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸74cm、短軸60cm、深さ26cmである。長軸方位はN-2°-Wである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。37号溝と重複する。37号溝より新しい。遺物 出土遺物はなかった。

63号土坑 (第52図、P L 17)

遺構 調査区の東側325-580Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸128cm、短軸100cm、深さ60cmである。長軸方位はN-79°-Wである。底面は東側が深くなる。壁は垂直よりやや開きながらまっすぐ立ち上がる。遺物 出土遺物はなかった。

64号土坑 (第52図、P L 17)

遺構 調査区の東側315-595Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸140cm、短軸90cm、深さ40cmである。長軸方位はN-88°-Wである。底面は平坦である。壁はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。遺物 出土遺物はなかった。

第3章 遺構と遺物

65号土坑 (第52図)

遺構 調査区の中央東寄り310-590Gで確認された。平面形は楕円形であるが、東側が不整形となる。規模は長軸80cm、短軸60cm、深さ12cmである。長軸方位はN-88°-Eである。底面は凹凸がみられる。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。 **遺物** 出土遺物はなかった。

66号土坑 (第52図、P L 18)

遺構 調査区の中央南寄り305-595Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸57cm、短軸54cm、深さ19cmである。底面は平坦である。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。31・32号溝と重複する。31・32号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

67号土坑 (第52図)

遺構 調査区の東側305-580Gで確認された。平面形は不整形な楕円形で、規模は長軸90cm、短軸70cm、深さ26cmである。長軸方位はN-50°-Wである。底面は平坦である。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。埋没土はVI～X層主体の混土である。32号溝の東端で重複する。32号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

68号土坑 (第52図、P L 18)

遺構 調査区の中央345-600Gで確認された。平面形は南側がやや角張る楕円形である。規模は長軸92cm、短軸57cm、深さ32cmである。長軸方位はN-8°-Wである。底面は南側で平坦であるが、北側では一段下がる。東・西壁はやや外側に開き気味に立ち上がるが、南・北壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。26号溝と重複する。26号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

69号土坑 (第52図、P L 18)

遺構 調査区の中央東寄り315-585Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸83cm、短軸50cm、深さ42cmである。長軸方位はN-17°-Wである。底面は南側がやや深くなる。埋没土はVI～X層主体の混土である。 **遺物** 出土遺物はなかった。

70号土坑 (第52図)

遺構 調査区の西側335-640Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸146cm、短軸82cm、深さ18cmである。長軸方位はN-84°-Eである。底面は西側で平坦、東側で凹凸がみられる。南・北壁はやや外に開き気味に立ち上がるが、東・西壁は緩やかな傾斜である。埋没土は人為埋没であった。23号溝と重複する。23号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

71号土坑 (第53図)

遺構 3区南側360-685Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸218cm、短軸100cm、深さ36cmである。長軸方位はN-82°-Wである。底面は平坦である。東・南壁はほぼまっすぐに立ち上がるが、北・西壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。20号溝と重複する。20号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

72号土坑 (第53図)

遺構 3区南側355-685Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸136cm、短軸110cm、深さ32cmである。長軸方位はN-84°-Wである。底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。20号溝と重複する。20号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

73号土坑 (第53図)

遺構 調査区の中央北側360-620Gで確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸132cm、短軸66cm、深さ37cmである。長軸方位はN-27°-Wである。底面は中央部が深くなる。壁はほぼまっすぐに立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。20号溝と重複する。20号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

74号土坑 (第53図)

遺構 調査区の中央北側360-620Gで確認された。平面形は方形で、長軸54cm、短軸53cm、深さ21cmである。底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。20号溝と重複する。20号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

75号土坑 (第53図)

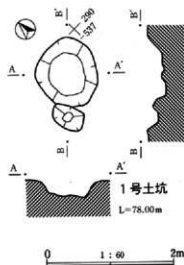
遺構 3区南側355-675Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸142cm、短軸98cm、深さ30cmである。長軸方位はN-88°-Eである。底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。埋没土は人為埋没であった。20号溝と重複する。20号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

76号土坑 (第53図)

遺構 3区北側385-670Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸150cm、短軸106cm、深さ40cmである。長軸方位はN-80°-Wである。底面は平坦である。底面はやや外に開き気味に立ち上がる。埋没土はVI~Ⅷ層主体の混土で、人為埋没であった。16号溝と重複する。16号溝より新しい。 **遺物** 出土遺物はなかった。

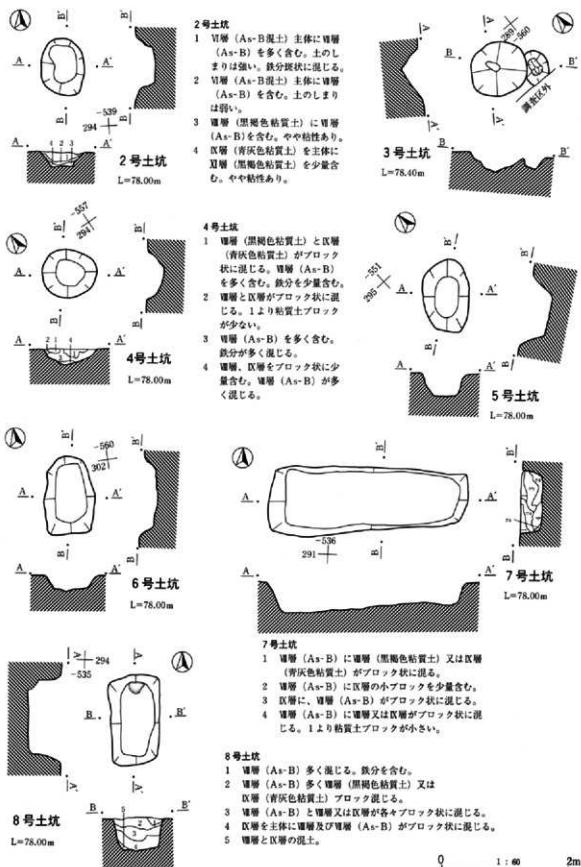
78号土坑 (第53図、P L 18)

遺構 3区北側385-685Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸186cm、短軸99cm、深さ17cmである。長軸方位はN-3°-Wである。底面は平坦である。壁は緩やかに傾斜している。埋没土は人為埋没であった。2面調査時は攪乱されていてわからなかった。5面調査時に確認された。 **遺物** 出土遺物はなかった。



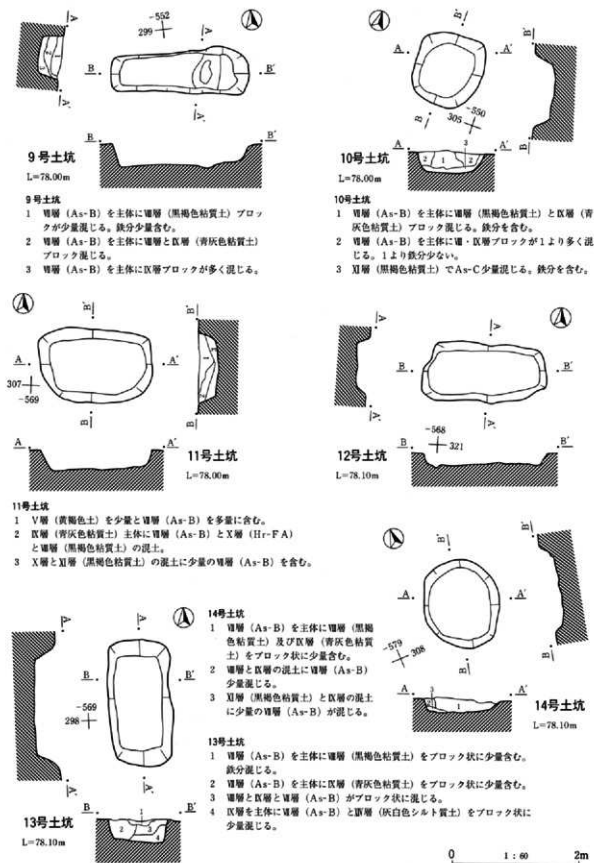
第42図 2面1号土坑実測図

第3章 遺構と遺物



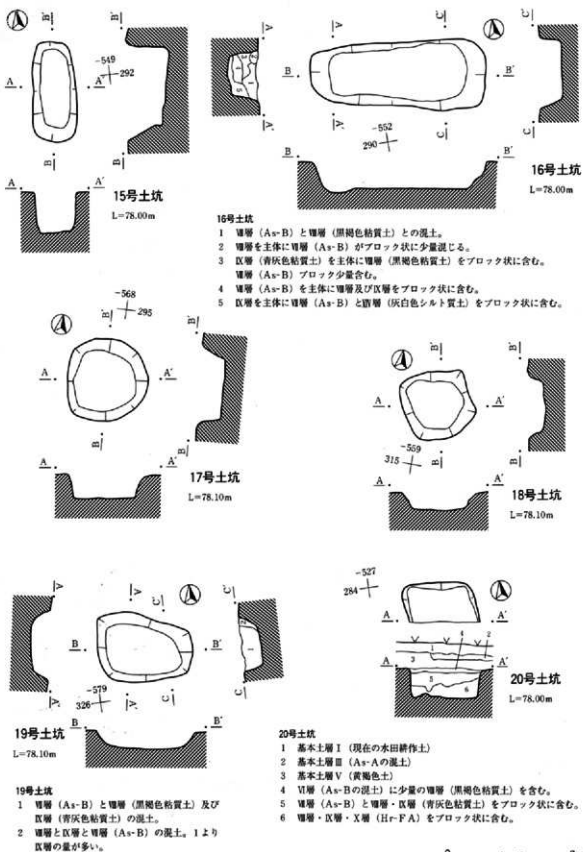
第43図 2面2～8号土坑実測図

0 1:60 2m

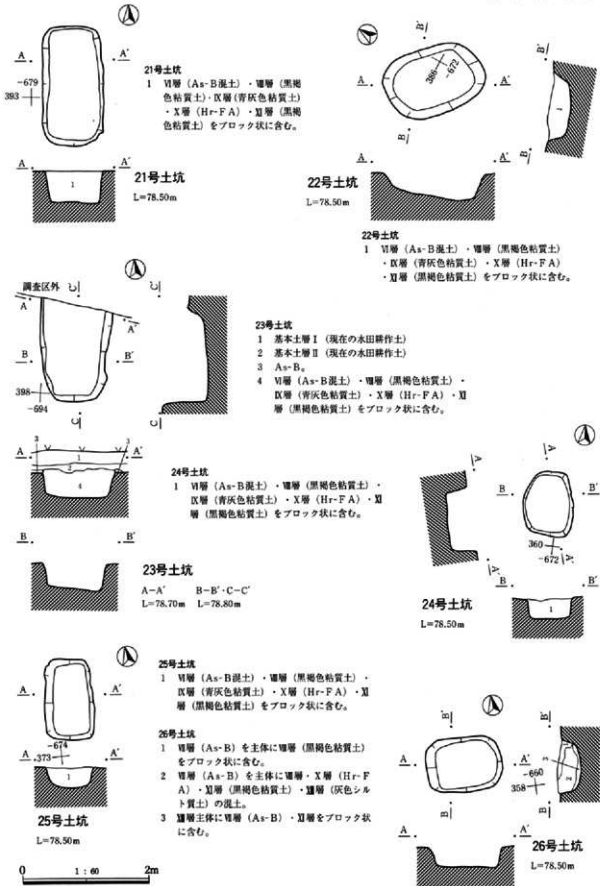


第44図 2面9～14号土坑実測図

第3章 遺構と遺物

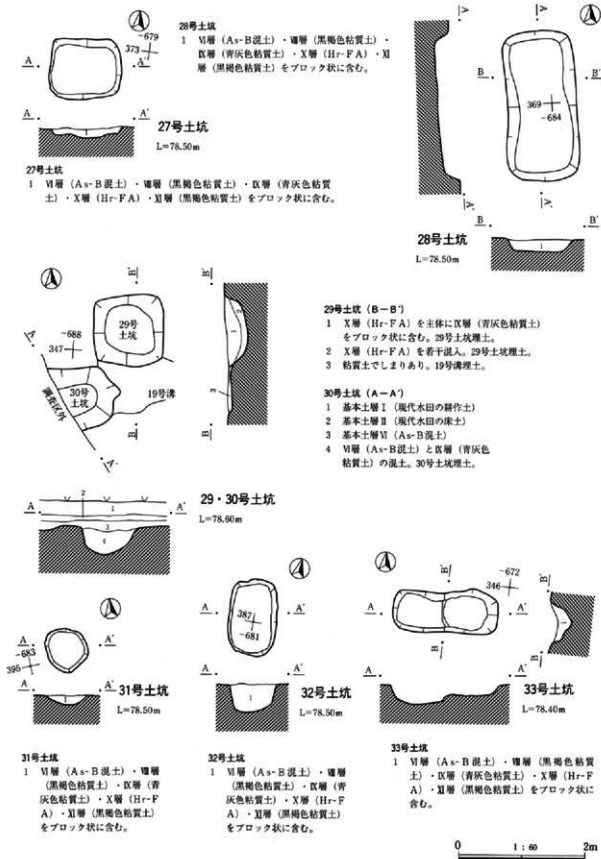


第45図 2面15~20号土坑実測図

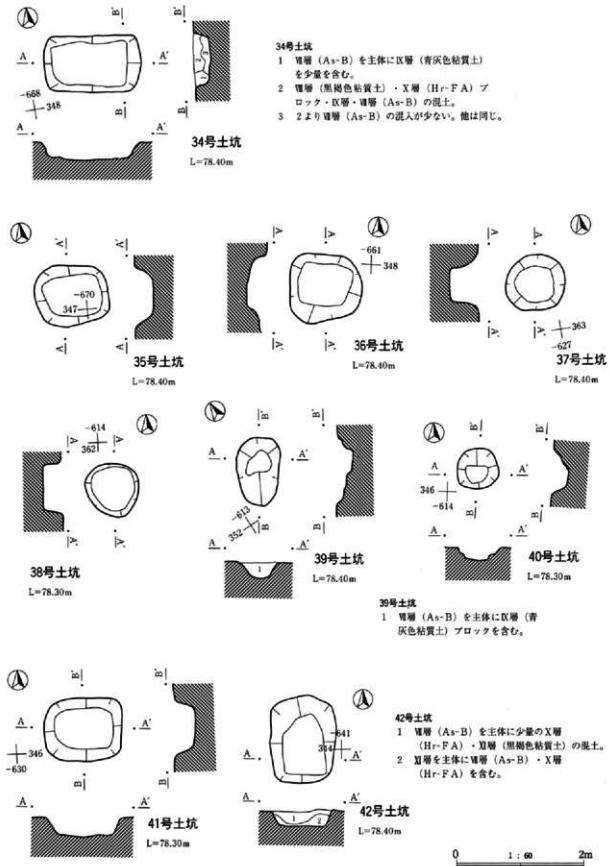


第46図 2面21~26号土坑実測図

第3章 遺構と遺物

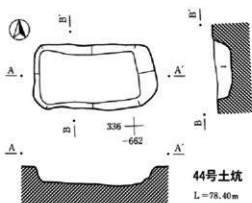
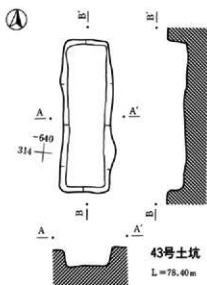


第47図 2面27～33号土坑実測図



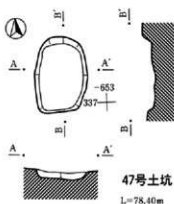
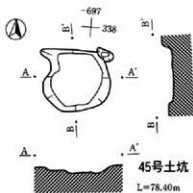
第48図 2面34~42号土坑実測図

第3章 遺構と遺物



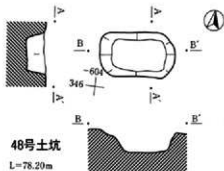
44号土坑

1 VI層 (As-B混土)・VII層 (黒褐色粘質土)・IX層 (青灰色粘質土)・X層 (Hr-F A)・XI層 (黒褐色粘質土)をブロック状に含む。



47号土坑

1 VI層 (As-B混土)・VII層 (黒褐色粘質土)・IX層 (青灰色粘質土)・X層 (Hr-F A)・XI層 (黒褐色粘質土)をブロック状に含む。

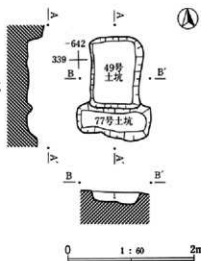


49号土坑

1 VI層 (As-B混土)・VII層 (黒褐色粘質土)・IX層 (青灰色粘質土)・X層 (Hr-F A)・XI層 (黒褐色粘質土)をブロック状に含む。

77号土坑

1 VI層 (As-B混土)・VII層 (黒褐色粘質土)・IX層 (青灰色粘質土)・X層 (Hr-F A)・XI層 (黒褐色粘質土)をブロック状に含む。



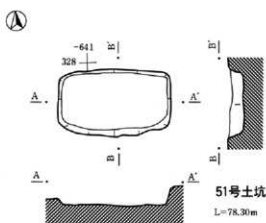
0 1:60 2m

第49図 2面43～49・77号土坑実測図



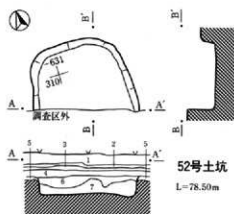
50号土坑

- 1 Ⅵ層 (A_s-B 泥土) を主体にⅦ層 (A_s-B) ・Ⅷ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に含む。
- 2 Ⅶ層 (A_s-B) を主体にⅧ層 ・Ⅸ層 (青灰色粘質土) ・Ⅹ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に含む。



51号土坑

- 1 Ⅶ層 (A_s-B) を主体にⅨ層 (青灰色粘質土) ・Ⅹ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に含む。

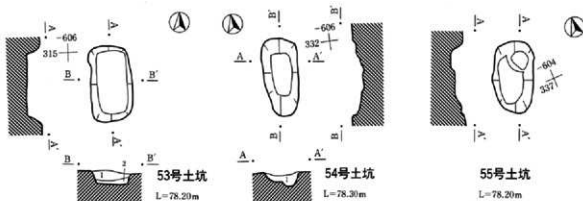


52号土坑

L=78.50m

52号土坑

- 1 基本土層Ⅰ (現在の水田耕作土)
- 2 基本土層Ⅱ (現在の水田耕作土)
- 3 基本土層Ⅲ (A_s-A 泥土)
- 4 基本土層Ⅴ (黄褐色土)
- 5 基本土層Ⅵ (A_s-B)
- 6 Ⅶ層 (A_s-B) を主体にⅧ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に少量含む。
- 7 Ⅶ層 (A_s-B) を主体にⅠより多くⅧ層 ・Ⅸ層 (青灰色粘質土) ・Ⅹ層 (H-r-F A) ・Ⅺ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に含む。



53号土坑

- 1 Ⅶ層 (A_s-B) を主体にⅧ層 (黒褐色粘質土) ・少量のⅨ層 (青灰色粘質土) をブロック状に含む。
- 2 Ⅺ層 (黒褐色粘質土) を主体にわずかにⅦ層 (A_s-B) とⅨ層を含む。

54号土坑

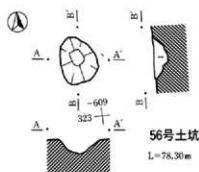
- 1 Ⅶ層 (A_s-B 泥土) 主体にⅧ層 (黒褐色粘質土) ブロックを含む。

55号土坑

L=78.20m

0 1:60 2m

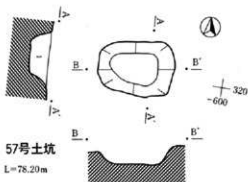
第50図 2面50～55号土坑実測図



56号土坑
L=78.30m

56号土坑

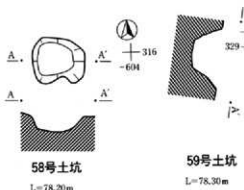
- 1 VI層 (A-s-B混土) で粘性が弱い。酸化鉄分の斑点がみられる。



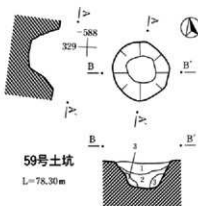
57号土坑
L=78.20m

57号土坑

- 1 VI層 (A-s-B混土) を主体とし、IV層 (青灰色粘質土) ブロックを多く含む。



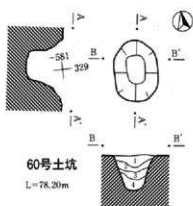
58号土坑
L=78.20m



59号土坑
L=78.30m

59号土坑

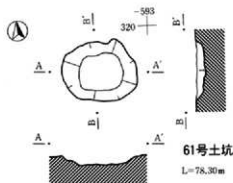
- 1 VI層 (A-s-B混土) が主体で鉄分の沈殿がみられる。
- 2 1にIV層 (青灰色粘質土) ブロックを少量含む。
- 3 III層 (灰色シルト質土) の腐層層と思われる。しりまない。



60号土坑
L=78.20m

60号土坑

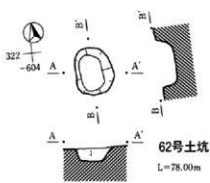
- 1 VI層 (A-s-B混土) 主体にV層 (黄褐色土) を含む。
- 2 VI層 (A-s-B混土) で鉄分の沈殿がみられる。
- 3 IV層 (青灰色粘質土) とIII層 (黒褐色粘質土) の混土にIV層 (A-s-B) が含まれる。
- 4 III層 (A-s-B) に青灰色シルト質土が混る。



61号土坑
L=78.30m

61号土坑

- 1 III層 (A-s-B) 主体に少量X層 (H-r-F-A) ブロック、IV層 (青灰色粘質土) ブロックをわずかに含む。



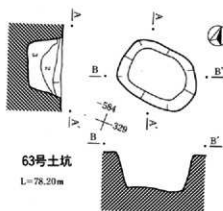
62号土坑
L=78.00m

62号土坑

- 1 IV層 (青灰色粘質土) 主体に、X層 (H-r-F-A) ブロック、III層 (黒褐色粘質土) ブロック含む。



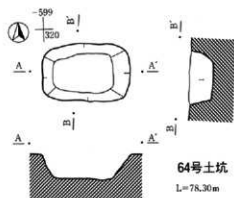
第51図 2面56~62号土坑実測図



63号土坑
L=78.20m

63号土坑

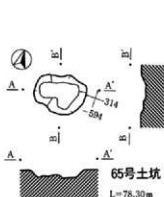
- 1 Ⅱ層（青灰色粘質土）ブロック、Ⅲ層（Hr-F A）ブロックにⅣ層（As-B）を含む。
- 2 1よりⅣ層（As-B）を多く含む。
- 3 Ⅳ層（As-B）を主体に少量のⅢ層（Hr-F A）、Ⅱ層（青灰色粘質土）、Ⅰ層（黒褐色粘質土）をブロック状に含む。As-Bを主体とする。



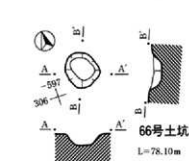
64号土坑
L=78.30m

64号土坑

- 1 Ⅳ層（As-B）主体にⅤ層（黒褐色粘質土）、Ⅲ層（Hr-F A）、Ⅱ層（黒褐色粘質土）、Ⅰ層（青灰色粘質土）、Ⅳ層（灰色シルト）をブロック状に含む。



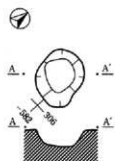
65号土坑
L=78.30m



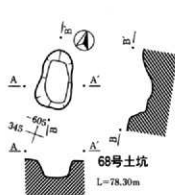
66号土坑
L=78.10m

66号土坑

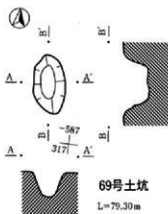
- 1 Ⅳ層（As-B）を主体とした土でわずかにⅤ層（黒褐色粘質土）とⅡ層（青灰色粘質土）ブロックを含む。



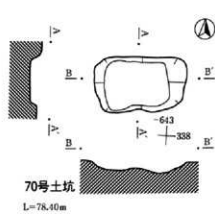
67号土坑
L=78.00m



68号土坑
L=78.30m



69号土坑
L=79.30m

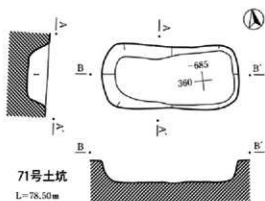


70号土坑
L=78.40m



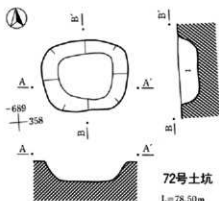
第52図 2面63～70号土坑実測図

第3章 遺構と遺物



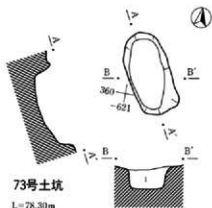
71号土坑

1 遺層 (A-s-B) 主体に遺層 (黒褐色粘質土)、Ⅱ層 (青灰色粘質土)、Ⅲ層 (H-r-F A)、Ⅳ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に含む。



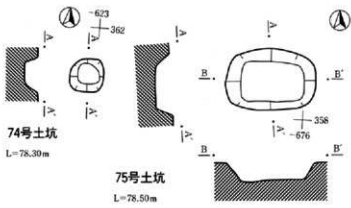
72号土坑

1 遺層 (A-s-B) 主体に遺層 (黒褐色粘質土)、Ⅱ層 (青灰色粘質土)、Ⅲ層 (H-r-F A)、Ⅳ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に含む。



73号土坑

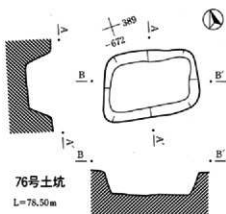
1 遺層 (A-s-B) 主体に遺層 (黒褐色粘質土)、Ⅱ層 (青灰色粘質土)、Ⅲ層 (H-r-F A)、Ⅳ層 (黒褐色粘質土) をブロック状に含む。



74号土坑

75号土坑

L=78.50m



76号土坑

L=78.50m



78号土坑

L=78.20m

0 1 : 60 2m

第53図 2面71~76・78号土坑実測図

II 溝

13号溝 (第54図, P L 18)

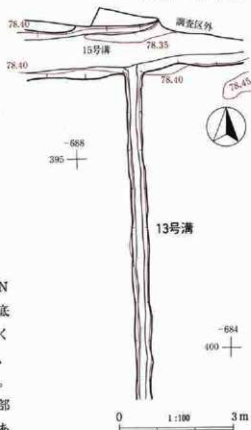
遺構 3区北側390-685G-395-685Gでは南北の走向(N-2°-W)で確認された。全長は8.50mで、上幅35-45cm、底幅15-25cm、深さ6cmである。底面はわずかであるが、北から南に傾斜している。北端で15号溝と重複する。新旧関係は不明である。南側は攪乱され、不明である。

遺構 出土遺物はなかった。

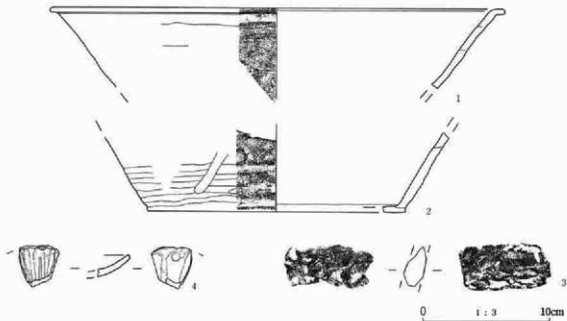
14号溝 (第55・56図, P L 18・43)

遺構 3区北側390-670G-395-670Gで、ほぼ南北の走向(N-1°-W)で確認された。全長は8.40mで、上幅55-125cm、底幅25-85cm、深さ7cmである。底面はほぼ水平であるが、ごくわずかに北から南に傾斜している。北側は調査区域外に続き、南側は攪乱され、不明である。16号溝と重複の可能性がある。

遺物 1-3は軟質陶器である。1・2は鉢の口縁部と底部から胴部で、外面に滲しがみられる。17世紀後半-18世紀である。1の口径は35.8cmで、2の底径は20.4cmである。3は壺の破片で、内外面に軽い滲しがあり、胎土は軽い。整形は風化消耗が多く不明である。14世紀ごろと思われる。4は陶器の皿の口縁部破片で、内外面に菊目としての凹凸と口縁に輪花の刻みがある。釉色は暗い黄緑色である。産地は美濃で17世紀と思われる。図示した遺物の他に、磁器1点、陶器4点、軟質陶器23点が出土している。



第54図 2面13号溝実測図



第55図 2面14号溝出土遺物

第3章 遺構と遺物

16号溝 (第56図, P L 19)

遺構 3区北側385-670Gで東西の走向(N-84°-E)で確認された。全長は0.70mで、上幅60-75cm、深さ3-5cmである。東は調査区域外に続き、西は76号土坑と攪乱で不明。76号土坑と重複する。平面プラン確認時において、76号土坑より古いことを確認した。

遺物 出土遺物はなかった。

17号溝 (第58図, P L 19)

遺構 3区-2区の西側でY=-370ライン付近で東西走向(N-86°-E)、655-370G付近でほぼ直角に南に曲がり、南北の走向(N-3°-E)となる。655-350Gで21号溝と接する。直角に曲がる外側の隅は攪乱により不明。東側に続く可能性がある。東西走向部は、長さ34.0m、上幅385-535cm、底幅15-65cmである。南北走向部は長さ19.7m、上幅70-400cm、底幅30-350cmである。全長は53.7mで、深さ15cmほどである。東西走向部の西側で27・28号土坑と重複し、27・28号土坑より古い。20・21号溝とも重複する。20号溝より新しい。21号溝との関係は不明である。

遺物 図示し得なかったが、須恵器1点、土師器2点、土師質土器2点が出土した。須恵器は10世紀と思われる坏で、土師器は8-9世紀の坏で、土師質土器は10-16世紀と思われる。

19号溝 (第63図, P L 19)

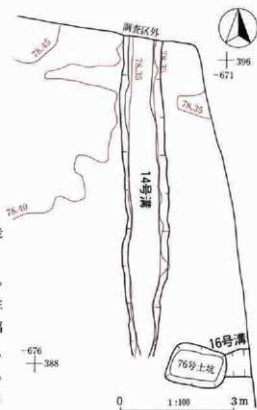
遺構 2区西端345-680G~345-685Gにかけて東西走向(N-80°-E)で確認された。全長は3.20mで、上幅35-55cm、底幅25-40cm、深さ4cmほどである。底面は西から東に傾斜している。西側で29・30号土坑と重複し、さらに西側の調査区域外に続く。土層断面の観察等より、29・30号土坑より古い。

遺物 出土遺物はなかった。

20号溝 (第57・64図, P L 19・43)

遺構 3区南側から2区で、Y=-360ライン付近をほぼ東西の走向(N-86°-E)で確認された。途中、2区と3区の未調査部分があるが、同一の溝である。東西とも調査区域外に続く。全長は(2区と3区の未調査部分を含む)80.6mで、上幅40-200cm、深さ4-8cmである。底面は西から東に傾斜している。2条及び3条になる部分もあるが、まとめて1つの溝であると考える。重複は西から71・75・24・74・73・38号土坑と17・39号溝とである。39号溝を除いて重複する他の遺構よりも古い。39号溝との関係は不明である。

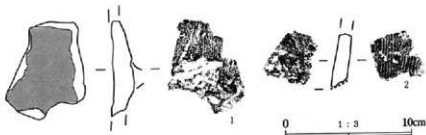
遺物 1は円筒埴輪の口縁部破片で、内外面磨減し調整は不明である。胎土に海綿骨針と結晶片岩を含む。



21号溝 (第59・63図, P L43)

遺構 2区西端から中央で、Y=-350ライン付近を東西の走向(N-87°-E)で確認された。全長は75.2m、上幅620-825cm、底幅15-115cm、深さ18cmである。底面は西から東に傾斜している。345-615G付近で二つに分かれる。北を28号溝、南を27号溝とした。南側の縁にあたる部分に22号溝が平行して確認された。北の縁から南の縁までを1つの溝、21号溝と考えたい。北の縁は350-620G付近で確認できなくなる。26・28号溝が東に続くことから北の縁も続くかと推定される。29・35・36号溝を挟むような幅広の溝が37号溝に続くかと推定される。重複する遺構は西から33・35・34・36・41・40・68・48号土坑である。いずれの土坑よりも古い。

遺物 1・2は埴輪である。1は形態不明である。内面ほぼ全域に剥離痕がみられ、わずかに下端に表面が残る。外面中央部に粘土を貼り付け、調整のため縦方向に刷毛が施される。2



第59図 2面21号溝出土遺物

は円筒埴輪の胴部破片で、透孔の上端部が残存する。胎土に結晶片岩を含む。図示した遺物の他に、土師器17点、埴輪片1点が出土した。土師器は4世紀ごろの甕、5世紀高杯、6世紀杯、9世紀杯が含まれる。埴輪は6世紀の円筒埴輪である。

22号溝 (第60・63図, P L43)

遺構 2区西端から中央で、345-680G-345-605Gにかけて東西の走向(N-88°-E)で、21号溝の内側で確認された。全長は79.5mで、上幅60-115cm、底幅30-80cm、深さ8-15cmである。さらに1面13号溝の東側に26号溝として東に続く。22号溝と26号溝は調査の都合で分けたが同一の溝と考える。

遺物 1-3は埴輪である。1は形象(人物)埴輪の付属物で、額または人物の上衣の紐の結び目の可能性が考えられる。胎土に海綿骨針を含む。2・3は円筒埴輪の胴部破片である。2は突帯が剥落している。外面縦ハケ、突帯貼付けの横ナデ、内面斜め指ナデが施される。3は外面縦ハケ、内面指ナデが施され、胎土に結晶片岩を含む。図示した遺物の他に土師器9点、須恵器1点、灰軸陶器1点、近世陶器1点が出土している。土師器は6-7世紀の甕、須恵器は8-9世紀の甕。灰軸陶器は10世紀ごろと思われる。



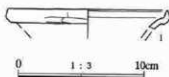
第60図 2面22号溝出土遺物

26号溝 (第61・63図, P L43)

遺構 調査区の中央北側、1面13号溝の東側で、345-605G-345-595Gにかけて東西の走向(N-88°-E)で確認された。全長は、11.5mで、上幅50-110cm、底幅15-95cm、深さ5cmである。底面は西から東に傾斜している。26号溝は、1面13号溝の西側の22号溝の延長上で確認され、22号溝と同一の溝と考える。68・48号土坑、29・35号溝と重複する。68・48号土坑より古い。29・35号溝との関係は不明である。

第3章 遺構と遺物

遺物 1は土師器の高坏で、口径12.8cmである。内外面に回転のあるナデ痕がみられる。胎土に雲母粒を含み、県外からの搬入品の可能性がある。図示した遺物の他に土師器1点、土師質土器1点が出土した。土師質土器は皿で10～16世紀と思われる。



第61図 2面26号溝出土遺物

27号溝 (第63図, P L 20)

遺構 調査区の中央北側345-615Gで28号溝から分岐し、1面13号溝まで21号溝の内側を東西の走向(N-87°-E)で、長さ15.9m、上幅35～85cm、底幅20～40cm、深さ5cmである。340-600G付近で直角に曲がり南北走向(N-9°-E)となり、南の26号溝に直交するまでで、長さ1.7m、上幅44～55cmである。

遺物 出土遺物はなかった。

28号溝 (第63図, P L 20)

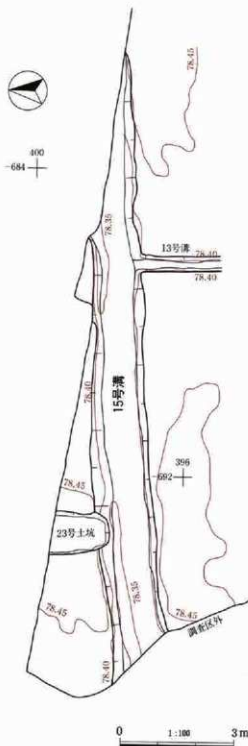
遺構 調査区の中央北側345-615Gで27号溝と分岐し、東西走向(N-82°-E)で、調査区外に続く。全長18.0mで、上幅40～100cm、底幅20～60cm、深さ14cmほどである。底面はほぼ水平であるが、ごくわずかに西から東に傾斜している。

遺物 出土遺物はなかった。

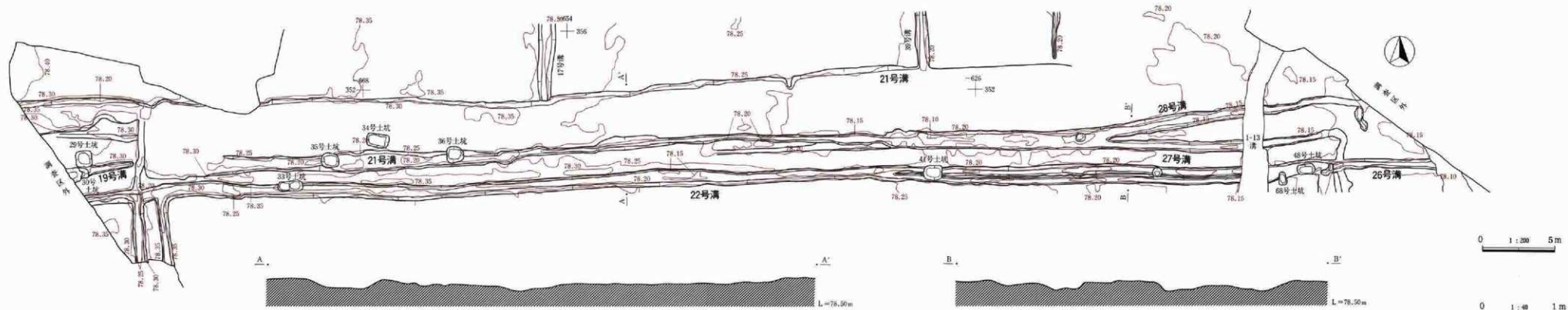
15号溝 (第62図, P L 18)

遺構 3区北側395-680G～395-695Gで、東西の走向(N-85°-E)で確認された。全長は15.30mで、上幅120～155cm、底幅80～105cm、深さ7cmである。底面はわずかに西から東に傾斜している。東西両端とも調査区外に続く。13号溝と23号土坑と重複する。13号溝との新旧関係は不明である。23号土坑より古い。

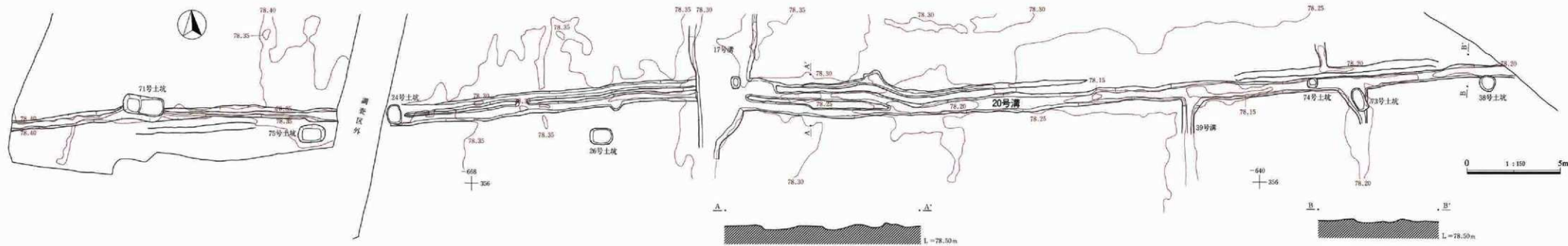
遺物 出土遺物はなかった。



第62図 2面15号溝実測図



第63图 2面19·21·22·26·27·28号溝実測图



第64图 2面20号溝实测图

29号溝 (第65図、P L 20)

遺構 調査区の中央北側340-600 G-345-600Gにかけて南北の走向(N-8°-W)で確認された。北は26号溝、南は37号溝につながる。全長は7.80mで、上幅45-70cm、深さ4cmである。底面は北から南に傾斜している。27号溝と同一の溝と考える。26・37号溝との関係は不明である。

遺物 出土遺物はなかった。

35号溝 (第65図、P L 20)

遺構 調査区の中央北側340-600 G-345-600Gにかけて南北の走向(N-2°-W)で確認された。北は26号溝、南は37号溝につながる。全長6.80mで、上幅90-125cm、深さ5cmである。26・37号溝との関係は不明である。

遺物 出土遺物はなかった。

36号溝 (第65図、P L 20)

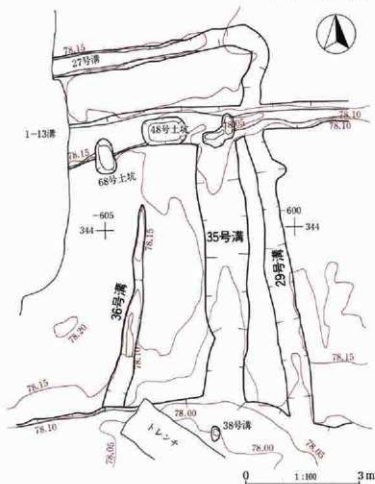
遺構 35号溝の西側で、340-605Gで南北の走向(N-9°-E)で確認された。全長は5.40mで、上幅20-55cm、深さ9cmである。底面は北から南に傾斜している。南側で37号溝とつながる。37号溝との関係は不明である。

遺物 出土遺物はなかった。

31号溝 (第70図、P L 21)

遺構 調査区の中央南側305-620G-305-580Gにかけて東西の走向(N-86°-E)で、305-580G-295-580Gにかけては南北の走向(N-1°-W)で確認された。東西走向部分は長さ43.8m、上幅150-585cm、底幅14-44cm、深さ10-26cmである。南北走向部分は長さ14.5m、上幅40-50cm、底幅18-30cmである。東西走向部分と南北走向部分は、それぞれ西側・南側の調査区域外に続く。610-305Gで1面13号溝に部分的に壊されている。重複は東西走向部分で平行して32号溝が、305-600Gで37号溝と直角に接する。南北走向部分で33号溝と300-580Gで直交する。埋没土も同じで重複している溝はほぼ同時期のものと考えられる。

遺物 図示し得なかったが、土師器3点、須恵器1点が出土した。土師器は8-9世紀の坏、須恵器は9-10世紀の坏である。



第65図 2面29・35・36号溝実測図

32号溝 (第70図、P L 21)

遺構 31号溝の東西走向部分の南側の縁の内側で平行して確認された。東西の走向 (N-88°-E) で、全長33.7mで、上幅50~90cm、底幅15~60cm、深さ5cm前後である。底面は西から東に傾斜している。西側で1面13号溝に壊されている。31号溝調査中に確認できた。31号溝と同一の溝の可能性も考えられる。

遺物 図示し得なかったが、土師器1点、須恵器1点が出土した。須恵器は9~10世紀の坏片である。

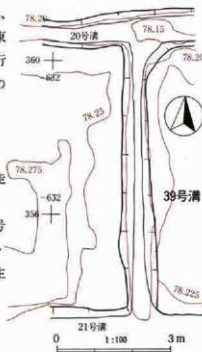
33号溝 (第70図、P L 20)

遺構 調査区の中央南側300-600G~300-580Gにかけて東西の走向 (N-89°-E) で確認された。西側は調査区域外に続く。全長は22.95mで、上幅45~145cm、底幅15~35cm、深さ24cmである。底面はほぼ水平であるが、ごくわずかに西から東に傾斜している。31号溝から4mほど南である。31号溝の南北走行部分と300-580Gで直角に接する。31・32号溝とほぼ同時期のものと考えられる。遺物 出土遺物はなかった。

39号溝 (第66図)

遺構 調査区の中央西側350-610G~355-610Gにかけて南北の走向 (N-2°-W) で確認された。全長は6.90mで、上幅60~100cm、底幅15~50cm、深さ5cmである。底面はほぼ水平である。北は20号溝、南は21号溝につながっている。20・21号溝とほぼ同時期で、20・21号溝と関連した施設と考える。埋没土はVI層 (As-B混土) が主体であった。

遺物 出土遺物はなかった。



第66図 2面39号溝実測図

23号溝 (第67・71図、P L 20・43)

遺構 調査区の西側330-675G~330-640Gにかけて東西の走向 (N-88°-E) で確認された。西側は調査区域外に続く。全長は37.9mで、上幅7.05~8.50m、底幅15~100cm、深さ32cmである。底面は西から東に傾斜している。21号溝の7mほど南である。330-640Gで、ほぼ直角に曲がり、南北の走向になる。南北走向部分を調査の都合で24号溝と別の溝番号を付けたが、同一の溝と考える。さらに330-640Gでそのまま東西走向で東に延びる37号溝が確認されている。溝中央部の掘り方が23号溝と異なることから別の溝と考える。23号溝の埋没土はVI層 (As-B混土) が主体である。重複は45・44・46・47・70・49・77号土坑と37・38号溝である。重複する土坑はいずれも23号溝より新しい時期のものである。



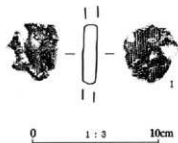
第67図 2面23号溝出土遺物

遺物 1は中世軟質陶器の鉢の胴部破片で、内面に使用の磨耗がみられ、外面に指の整形痕がみられる。15～16世紀と思われる。2は須恵器の坏の底部破片で、底径5.0cmである。底面に墨書の可能性ある痕跡がみられる。不明瞭である。9世紀と思われる。3は円筒埴輪の胴部破片で、外面縦ハケ、内面指ナデが施される。胎土に結晶片岩が含まれる。図示し得なかったが、他に土師器6点、陶器2点が出土した。陶器は19～20世紀である。土師器は8～9世紀である。

24号溝 (第68・71図、P L 20・43)

遺構 調査区の西側335-640G～310-640Gにかけて南北の走向(N-1°-W)で確認された。南側は調査区域外に続く。全長は24.3mで、上幅465～530cm、底幅130～185cm、深さ26cmである。底面はわずかに北から南に傾斜している。溝の中央部の掘り方が23号溝と同じことから、同一の溝と考える。重複は37・38号溝と43・51号土坑である。37・38号溝は、ほぼ同時期と考えられる。43・51号土坑は24号溝より新しい時期のものである。

遺物 1は円筒埴輪の胴部破片で、外面縦ハケ、内面ナデが施される。図示した遺物の他に、土師器14点、須恵器1点、磁器3点が出土した。土師器は4世紀と思われる甕片と器台、6世紀の甕片である。磁器は染付蓋、蕎麦猪口で18世紀である。



第68図 2面24号溝出土遺物

37号溝 (第72図、P L 21)

遺構 調査区の中央330-640G～335-600Gにかけて東西の走向(N-88°-E)で、335-600Gで直角に南に曲がり、南北の走向(N-2°-E)で、305-600Gで31号溝につながる。全長は、66.7mで、深さ20～29cm、東西走向部分長さ38.0m、上幅170～280cm、底幅8～30cm、南北走向部分長さ28.7m、上幅230～300cm、底幅10～34cmである。接する23・24・31号溝との関係は同時期あるいは前後する時期と考えられる。東西走向部分で38号溝が重複する。東西走向から南北走向に変わる所からそのまま東に延びる40号溝がある。溝中央部の掘り方が違うことから別の溝と考える。南北走向の3条の溝、29・35・36号溝とも重複する。埋没土はVI層(A_s-B_s泥土)主体である。他に重複する遺構は、50・55・62・57・58・53号土坑である。いずれも土坑が新しい時期のものである。

遺物 出土遺物はなかった。

38号溝 (第72図)

遺構 調査区中央西よりで、335-650G～335-620Gにかけて東西の走向(N-86°-E)で、23号溝と37号溝の中に重複する形で確認された。7mほど不明瞭なところがあるが、全長68.0mで、上幅20～210cm、深さ20cmほどである。底面は西から東に傾斜している。西は47号土坑と重複し、47号土坑の西側は確認できなかった。東は攪乱部で、攪乱部より東でも確認できなかった。重複は、47・77号土坑で、いずれも土坑が新しい時期のものである。23・24・37号溝とほぼ同時期か、あるいは前後する時期のものとする。

遺物 出土遺物はなかった。

40号溝 (第73図)

遺構 調査区中央東より335-600G～335-580Gにかけて、37号溝の東西走向部分の延長上で確認された。西は37号溝に接続し、東は調査区域外に続く。東西の走向(N-88°-W)で、全長は21.2mで、上幅155～265cm、深さ10cmである。底面は西から東に傾斜している。37号溝と溝中央部の掘り方が異なることから別の溝と考える。時期は37号溝と同時期と思われる。埋没土はVI層(A_s-B混土)主体であった。

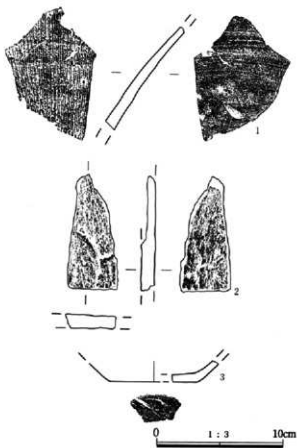
遺物 出土遺物はなかった。

25号溝 (第69・74図、P L43)

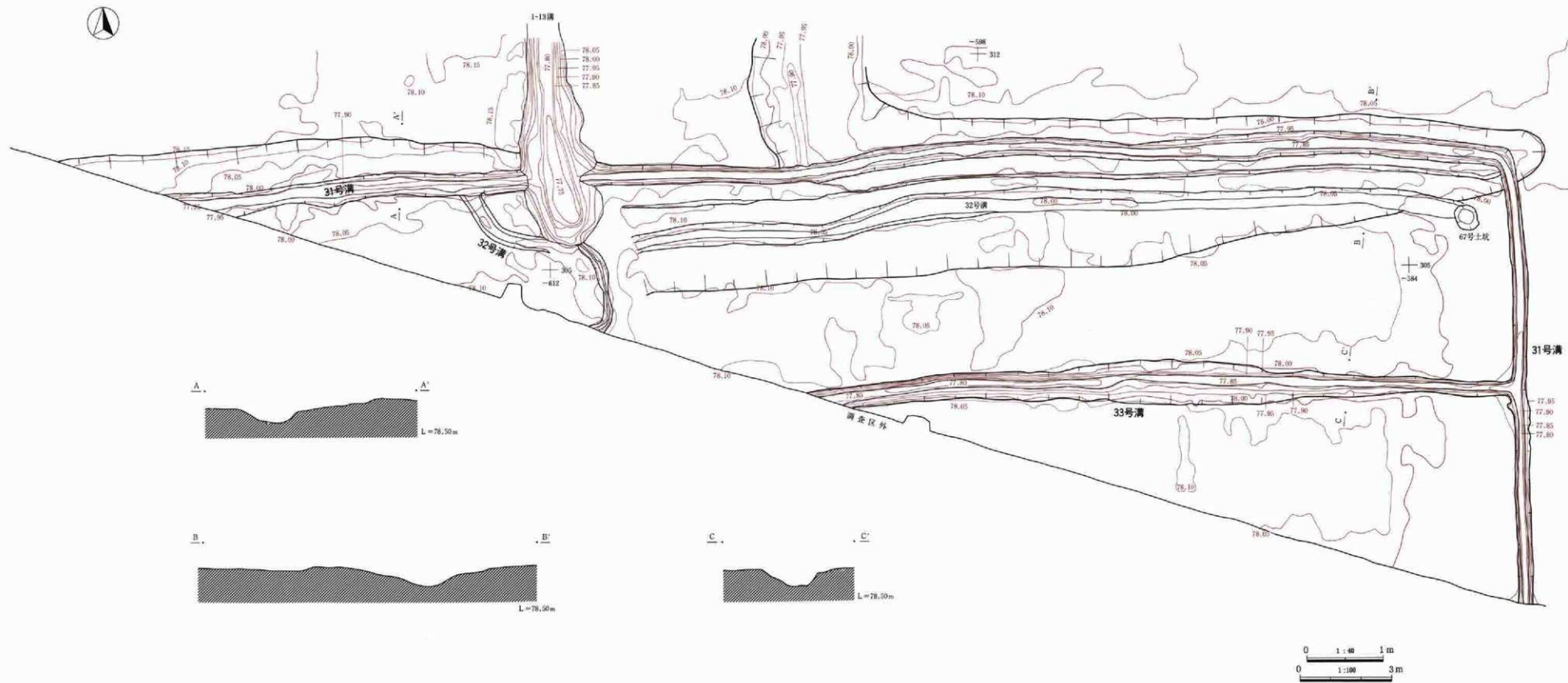
遺構 調査区の西側から中央の335-680G～340-610Gにかけて東西の走向(N-87°-E)で確認された。西は調査区外に続き、東は1面13号溝で壊され不明である。全長は69.0m、上幅40～150cm、底幅20～80cm、深さ44cmである。底面は西から東に傾斜している。1面14号溝の南で、北側の壁の立ち上がりは1面14号溝で壊されている。埋没土はVI層(A_s-B混土)を主体とした土である。

遺物 1は陶器の播鉢の胴部破片で、内面に7条以上の罫し目が、外面に回転条痕・指の整形痕がみられる。産地は信楽で17世紀である。2は板碑の破片で、表裏とも文字等の痕跡はみられなかった。石材は緑色片岩である。3は須恵器の底部破片で、底径は7.0cmである。底面に糸切りの痕跡があり、胎土は軽い。9世紀と思われる。

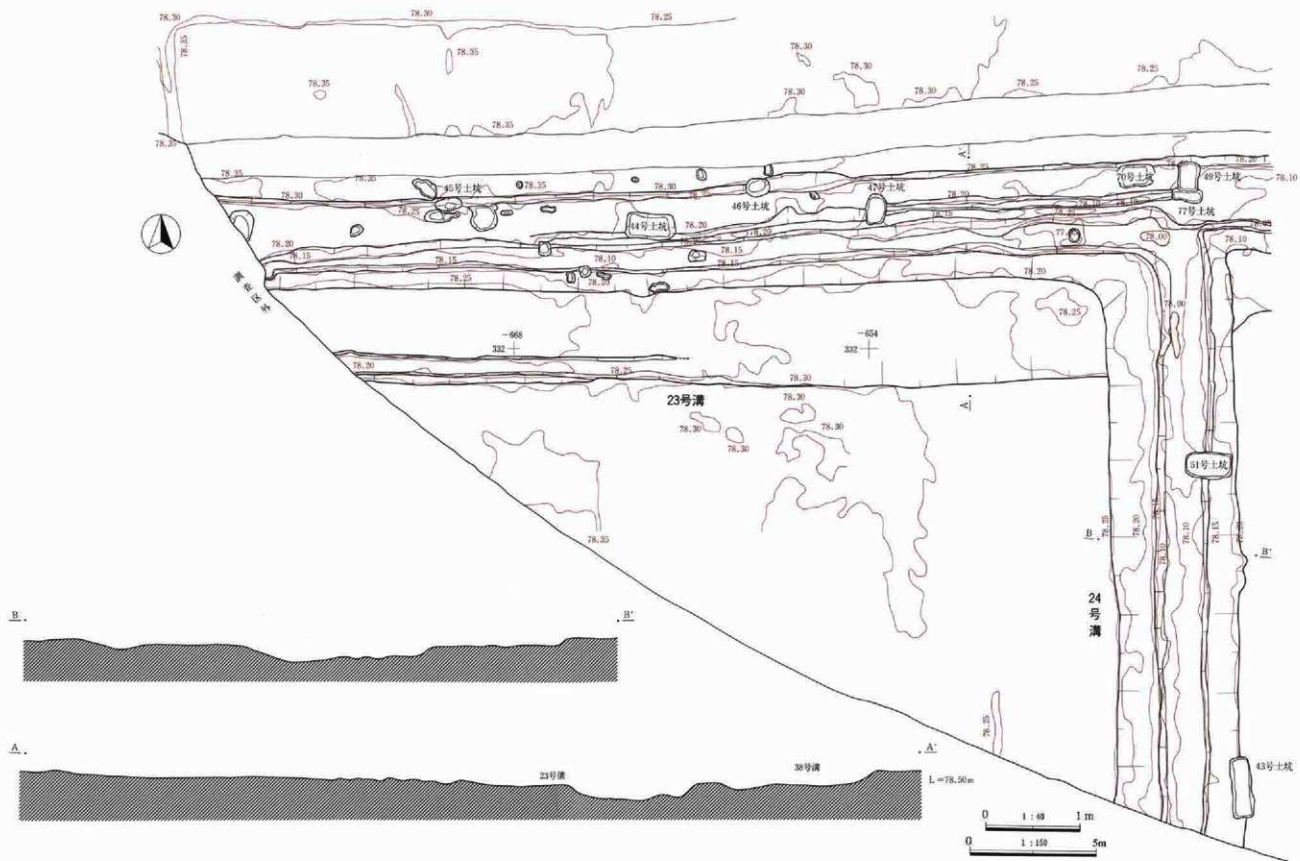
図示した遺物の他に、陶器2点、土師器3点が出土した。陶器は播鉢などで17世紀ごろのものである。



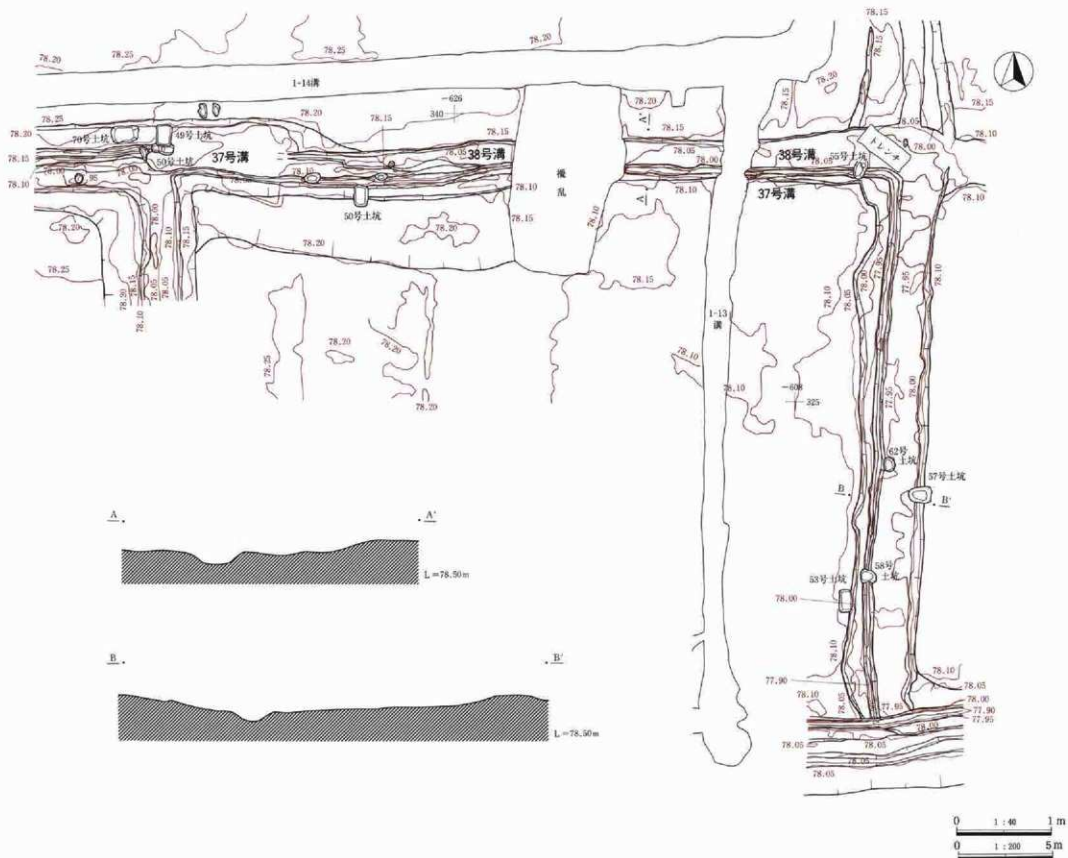
第69図 2面25号溝出土遺物



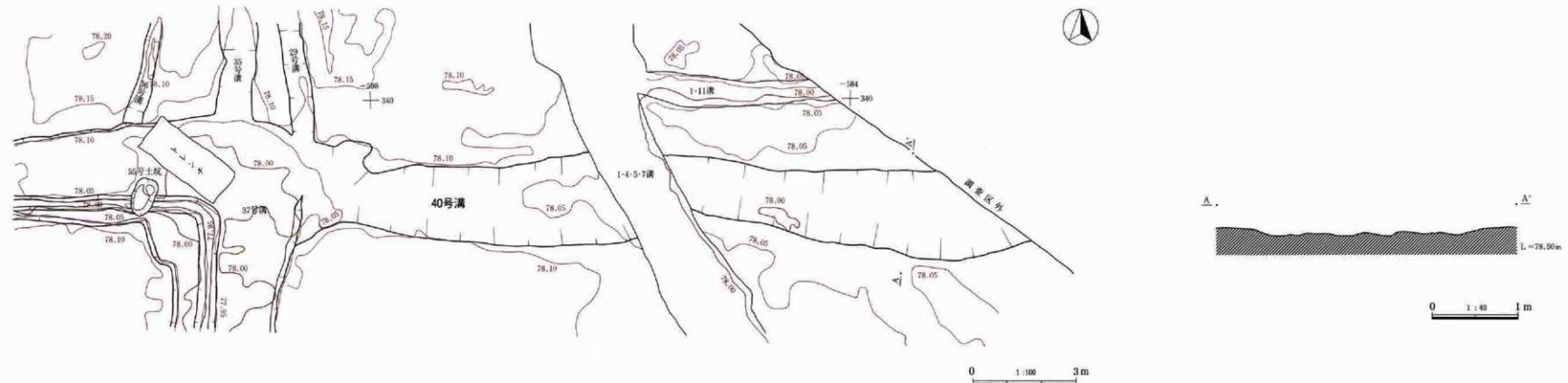
第70图 2面31·32·33号溝实测图



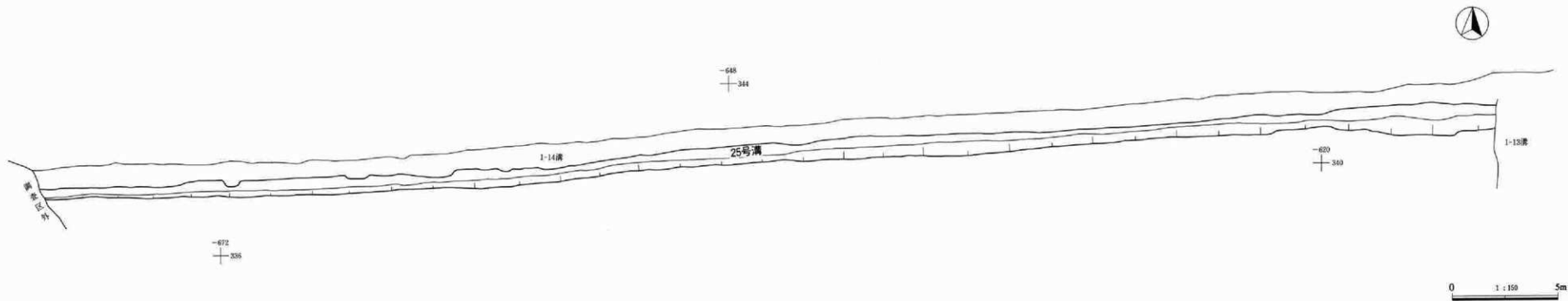
第71图 2面23·24号溝实测图



第72图 2面37·38号溝实测图



第73图 2面40号沟实测图



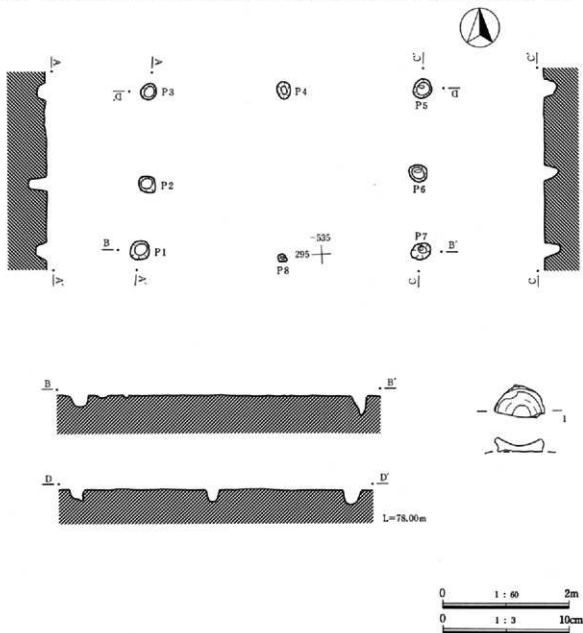
第74图 2面25号沟实测图

Ⅲ 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (第75図、P.L.22・44)

遺構 調査区の東側295-530G～295-535Gにかけて確認された。規模は桁行2間(4.38m)、梁行2間(2.55m)で、床面積11.120㎡である。主軸方向はN-88°-Wである。柱間寸法は桁行P1・P8間7尺(2.20m)、P8・P7間7尺(2.18m)で、梁行東列P5・P6間4.5尺(1.39m)、P6・P7間4尺(1.16m)、西列P3・P2間5尺(1.47m)、P2・P1間3.5尺(1.08m)である。柱穴の平面形は円形から楕円形である。P1・P2は方形に近い。柱穴の規模は15×11cm～32×28cmで、深さ7～34cmである。柱痕はどの柱穴からも確認できなかった。柱穴の埋没土はAs-Bを多量に含む混土層であった。

遺物 1はP6の埋没土中より出土した。須恵器の蓋の柄みの部分である。他に出土遺物はなかった。



第75図 2面1号掘立柱建物実測図・出土遺物

第3節 平安時代の調査

第2面として、Ⅵ層 (As-B) 下を調査した。第2節で報告した遺構と同じ確認面で調査を実施した。そのため溝は、第2節からの通し番号である。確認された遺構は溝8条、畦畔で区画された水田跡を確認した。

I 溝

1号溝 (第76図、P L23)

遺構 調査区の東側310-545G～290-555Gにかけて北東・南西の走向 (N-26°-E) で確認された。全長は21.36mで、上幅15～45cm、底幅5～20cm、深さ10cm前後である。北側は、擾乱・調査区外に続く。埋没土はⅥ層 (As-B) であった。12・13・14号水田と重複する。水田と同時期で水田に関係する施設と考える。

遺物 出土遺物はなかった。

6号溝 (第76図、P L23)

遺構 調査区の中央南側310-610Gで確認された。南北の走向 (N-11°-E) であるが、水田の畦畔と交差するところから緩やかに東に曲がる。確認された全長は4.20mで、上幅30～60cm、底幅15～25cm、



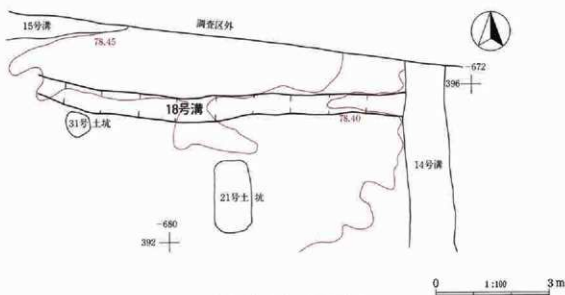
第76図 2面1・6号溝実測図

深さ9cmである。南は2面31号溝で北東は1面13号溝で壊されている。水田に関する施設の可能性が考えられる。遺物 出土遺物はなかった。

18号溝 (第77図、P L 23)

遺構 3区北側395-670G-395-680Gにかけて東西の走向(N-87°-W)で確認された。東は2面14号溝により壊されている。西は395-680Gで不明瞭で確認できなくなった。全長は9.70m、上幅50-70cmで掘り込みは浅く、溝の底面是水田耕土と同様であった。水田に関する施設の可能性が考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。



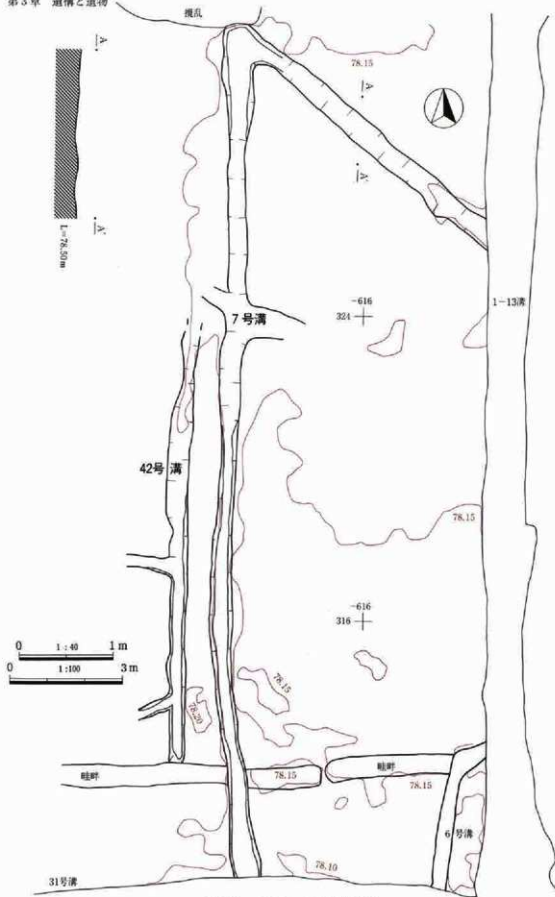
第77図 2面18号溝実測図

7号溝 (第78図、P L 23)

遺構 調査区の中央南側305-615G-325-615Gにかけて南北の走向(N-1°-W)で、325-615Gで北西から南東の走向(N-51°-W)で確認された。南は31号溝で壊され、東は1面13号溝で壊されている。1面13号溝の東では確認できなかった。全長は、南北走向部分21.8m、北西・南東走向部分8.5m、計30.3mである。上幅は35-75cm、底幅20-60cm、深さ4cmである。325-615Gで東西に分岐する痕跡が確認された。西に70cm-1mのところ41号溝が確認されている。底面是水田耕土と同様の土であった。水田に関する何らかの施設と考える。遺物 出土遺物はなかった。

42号溝 (第78図)

遺構 調査区の中央南側310-620G-320-620Gにかけて南北の走向(N-2°-E)で確認された。全長は11.3mで、上幅25-55cm、底幅20-30cm、深さ3cmであるが、さらに北に続く可能性がある。南は水田区画の畦畔で終わっている。2カ所、西に分岐する部分も確認されている。溝底面是水田耕土と同様の土であった。7号溝と41号溝の間に畦畔があった可能性が考えられる。水田に関する何らかの施設と考える。7号溝と42号溝はほぼ同時期と考える。遺物 出土遺物はなかった。

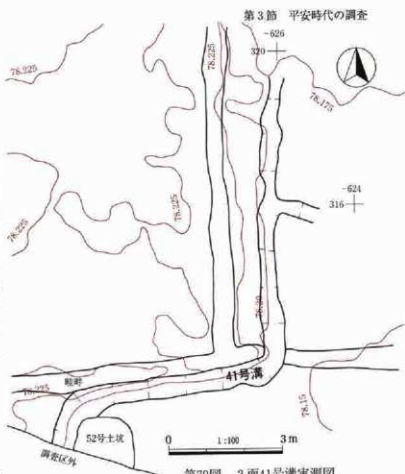


第78図 2面7・42号溝実測図

41号溝 (第79図)

遺構 調査区の中央南側310-630G～335-625Gにかけてクランク状で、南北走向(N-20°-E)で、長さ1.2m・東西走向(N-81°-E)で、長さ5.0m・南北走向(N-2°-E)で、長さ7.3mで確認された。上幅30～70cm、深さ5cmで、全長13.5mである。南は調査区域外に続く。北は355-625Gで確認できなくなったが、さらに北に続くと考えられる。途中、東に分岐する部分も確認できた。東西走向部分は、水田区画の畦畔に接して確認できた。溝底面は水田耕土と同様であった。水田に関する何らかの施設と考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。



第79図 2面41号溝実測図

43号溝 (第80図)

遺構 調査区の西側330-660G～330-665Gにかけて、緩い弧状で北西・南東の走向(N-60°-W)で確認された。全長は5.2mで、上幅30～55cm、底幅15～35cm、深さ4cmである。溝の底面は西から東に傾斜し、水田耕土と同様の土である。水田に関する何らかの施設と考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

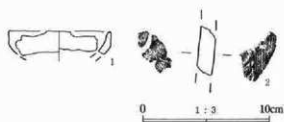


第80図 2面43号溝実測図

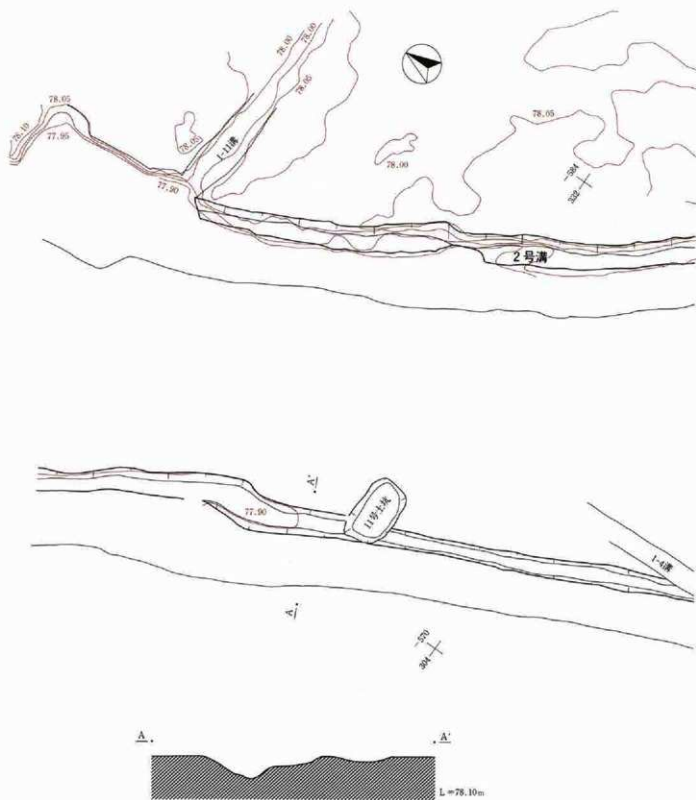
2号溝 (第81・82図, P L 46)

遺構 調査区東より335-590G～290-560Gにかけて、北西から南東に「S」字状に確認された。全長56.6m、上幅35～105cm、底幅15～70cm、深さ4～6cmである。南端で2条に分かれる。底面は北西から南東に傾斜している。水田に関する施設と考えられる。

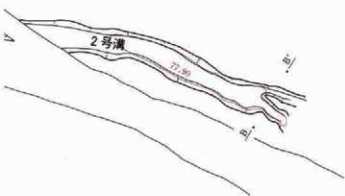
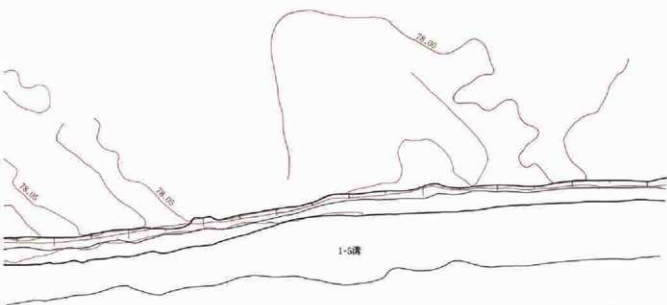
遺物 1は土師質土器の皿の口縁部破片である。口径8.0cm全体に酸化が強く、器内は厚い。14～16世紀と思われる。2は円筒埴輪の胴部破片で、外面



第81図 2面2号溝出土遺物



第82図 2面2号溝実測図



第3章 遺構と遺物

縦ハケ、内面ナデが施されている。

図示した遺物の他に、陶器1点、土師器5点が出土している。陶器は陶胎染付で18世紀である。1面5号溝からの混入と思われる。

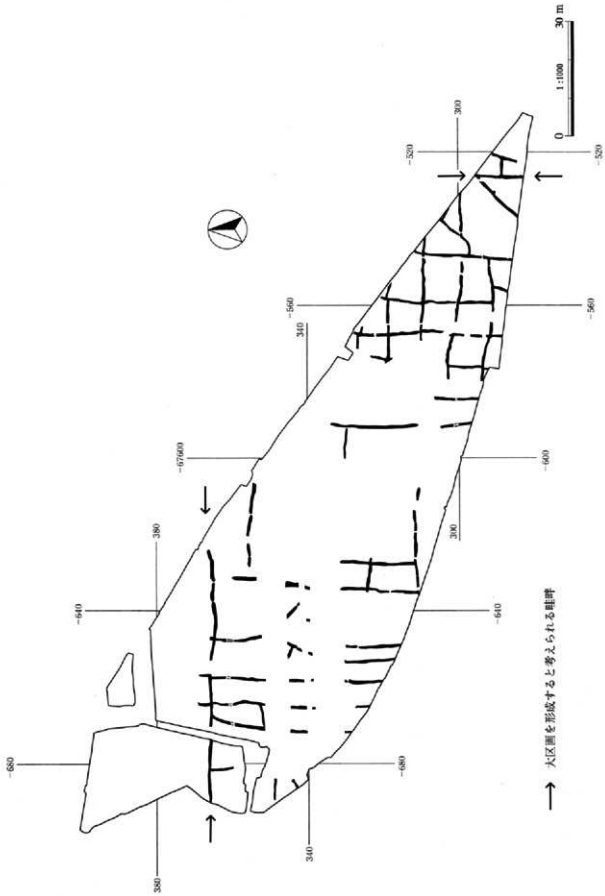
II 水田 (第83回、P.18・22)

Ⅴ層 (As-B) は、厚層3~10cmほどで、一部分を除いて、ほぼ調査区全域に堆積していた。この層の下部、水田面の直上に薄く褐色の火山灰と大粒の白色味を帯びた軽石が確認された。Ⅵ層 (As-B) はブライマリーな層と考えられる。Ⅶ層を取り除いて、調査区はほぼ全域で、水田を確認した。1区で畦畔による区画が、比較的良好に確認できた。2・3区では中世の溝等で畦畔が壊されている。南北方向の畦畔が確認できたが、東西方向の畦畔が確認できず、区画は不明な所が多くなっている。5区は調査区が狭く、畦畔は確認できなかったが、耕作面と考えられるⅧ層を確認した。耕作面と畦畔との高低差は3~5cmであった。地形は北西から南東に傾斜し、標高77.80~78.50mで、比高差80cmほどである。畦畔の方は概ね東西・南北方向であるが、1区で一部、南西・北東の畦畔がみられる。この部分で地形的な調整をしているものと考え

1区2面 (As-B下) 水田計測表

水田No.	面積 (㎡)	長軸 (m)	短軸 (m)	畦畔部分		水口の有無	備 考
				畦畔部分	耕作面		
1	(5.83)	(2.82)	(2.41)	78.08	78.05		調査区外、西側不明
2	(2.27)	(2.75)	(1.19)	78.05	78.04		調査区外、1-4溝
3	(3.73)	(3.12)	(1.24)	77.99	77.95		西・北側不明、1-5溝、2-2溝
4	(41.15)	7.86	(5.30)	78.05	78.03		北西側不明、2-12土坑
5	(45.03)	9.16	6.04	78.02	78.02		調査区外、1-4溝、2-12土坑
6	(27.74)	6.91	(3.88)	78.03	78.00		西側不明、1-5溝、2-2溝
7	42.87	7.88	5.44	77.98	77.98		1-5溝、2-2溝
8	63.20	8.28	7.61	78.02	78.00	○	1-4溝、2-18土坑
9	(4.15)	(3.34)	(1.95)	78.05	77.98		調査区外
10	(79.33)	12.93	8.60	78.02	78.00	○	調査区外、2-1溝
11	(3.13)	(3.44)	(1.72)	77.95	77.95		調査区外
12	(1.85)	(3.12)	(0.58)	78.03	—		西側不明、2-14土坑
13	87.05	11.70	7.44	78.00	77.96		西側不明、1-5溝、2-2溝、2-11土坑
14	60.12	8.48	6.85	77.98	77.96		1-4・5溝、2-2溝
15	111.12	11.96	9.23	77.99	77.95		2-1溝、2-9・10土坑
16	(69.83)	(11.36)	—	77.97	77.92	○	調査区外
17	(9.32)	(1.60)	(0.22)	77.94	—		調査区外
18	(25.34)	(7.08)	(6.01)	77.94	77.91	○	調査区外
19	(25.90)	(8.32)	(3.04)	78.03	78.00	○	西側不明
20	68.09	9.12	7.62	78.02	77.96		2-13・17土坑
21	71.31	8.74	8.32	77.97	77.94		1-4・5溝、2-2溝、2-13・17土坑
22	82.74	11.43	7.58	77.97	77.94		2-1溝、2-4・5土坑
23	226.77	20.54	14.10	77.95	77.90	○	2-1掘立柱建物、2-1・2・7・8土坑
24	(2.09)	(3.03)	(0.78)	77.99	77.98		調査区外
25	(30.26)	(8.37)	(3.89)	78.02	78.00		調査区外
26	(17.93)	(5.74)	(3.06)	78.02	77.97	○	調査区外、1-4・5溝、2-2溝
27	(19.33)	(5.91)	(3.33)	77.95	77.95	○	調査区外、2-2溝、2-3土坑
28	(37.05)	(7.07)	(5.63)	77.97	77.93		調査区外、2-15・16土坑
29	(48.34)	(10.40)	(8.90)	77.90	77.85		調査区外、1-3溝
30	(23.43)	(6.40)	5.60	77.91	77.85		調査区外
31	(20.45)	(5.95)	(4.14)	77.86	77.82		調査区外
32	(75.19)	(13.30)	(9.30)	77.85	77.80		調査区外

() は推定値、または一部分の計測値。



第83図 2面 (A's-B'F) 水田実測図

第3章 遺構と遺物

る。1区の区画のわかる水田は6枚で、面積は60.12~111.12㎡で、平均76.09㎡である。

本遺跡の北で、北関東自動車道関連の遺跡上滝町北遺跡(K T-010)・宿横手三波川遺跡(K T-020)・西横手遺跡群(K T-030)・横手井戸南遺跡(K T-040)・横手湯田遺跡(K T-050)において、比較的しっかりした畦畔が確認され、一定の間隔で大区画が検出されている。いわゆる「条里制」と推定される。その延長で、本遺跡の確認された水田を検討すると、 $Y = -525$ ライン付近の南北の畦畔、 $Y = -635$ ライン付近の畦畔、 $X = 365$ ライン付近の畦畔が大区画を区画する畦畔にあたると考えられる。しかし、どの畦畔も幅50cmほどで、大畦畔といえるものではない。その他の畦畔は一部で地形的な理由で規則的ではないが、ほぼ東西・南北に畦畔が確認された。本遺跡の南から西に微高地がみられることから、「条里制」の縁辺にあたるのではないかと推定される。また、時間的に「条里制」の時期より下ることから、「条里制」の区画を踏襲しながらも、区画がくずれているとも推定される。今後、周辺の発掘調査で解明されることを期待する。

Ⅲ 遺構外出土遺物(第84~86図、P L22・44~46)

第2面として調査を行った際に、重機によるV層・V層掘削時やVI・VII層を除去する遺構確認時に明確に遺構に伴わない遺物をここで報告する。

1・2は磁器である。1は青磁碗の胴部破片で、外面に鎬施文が施されている。内外面に暗い青磁釉を薄く施す。龍泉系で13~14世紀と思われる。2は染付皿の底部破片で、底径7.6cmと推定される。内面に染付が施される。景德鎮系で、16世紀後半と思われる。

3~9は陶器である。3は陶胎染付の碗の口縁部破片である。外面に呉須の施文、内外面に透明釉が施される。唐津系で18世紀である。4は仏花瓶の胴部から頸部で、最大径10.4cmと推定される。外面にクロロ目と耳跡がみられる。内外面に暗黒褐色味のある釉(鉄釉)が施される。産地は美濃で17世紀である。5・6は甕の胴部破片で、産地は常滑である。7は播鉢の口縁部破片で、内面に8条以上の卸目がある。内外面に茶褐色の鉄釉が施される。口縁部は消耗がみられる。産地は美濃で17世紀である。8は碗の胴部破片で、胴部の最大径の部分である。内外面にクロロ目がみられ、暗黒褐色味のある天目釉(鉄釉)が施される。産地は美濃で17~18世紀である。9は皿の底部破片で、低い三角形の削り出し高台が付き、トチン痕がみられる。内面に目跡がみられる。内外面に長石釉が施される。産地は美濃で16世紀である。

10~12は軟質陶器である。10は火鉢の底部破片で、底径15.0cmである。時期は中世と思われる。11は壺の底部破片で、底径13.8cmである。底面に糸切りまたは圧痕がみられ、外面に指のナデ痕がみられる。12は播鉢の胴部破片と思われる。

13~15は土師質土器皿である。13・14は器肉が厚い。13は口径10.0cm、底径5.8cm、高さ2.4cmで、14は口径10.4cmである。13・14は17~18世紀である。15は器肉が薄く、口径9.6cm、底径5.8cm、高さ2.4cmで中世である。

16~18は板碑の破片で表裏とも文字等の痕跡はみられなかった。石材は、いずれも緑色片岩である。19は火打ち石で、表に縦・横方向の擦痕がみられる。側縁や稜に使用による磨減がみられる。石材は石英である。

20~22は鉄製品である。20は鎌と思われる。錆化少なく、両端は調査時以降の欠損である。21は板状で器種は不明である。直線的に深く割れがみられる。鋤物鉄である。22は板状で器種は不明である。層状剥落し、和鉄の可能性が。23・24は古銭で銅主材である。23は「寛永通寶」で、太文字である。背文字はみられ

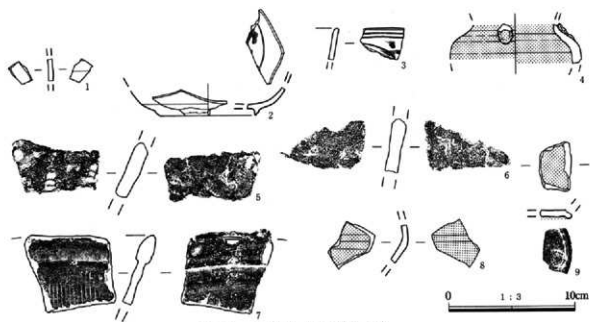
ない。厚さ1.24~1.26mm、径24.40mmである。24は左側を欠損する。厚さ1.04~1.05mm、径24.43mmである。表に「熙寧元口」と篆書体で記され、背文字はない。北宋銭の熙寧元宝と思われる。熙寧元宝は初鋳が1068年である。

25~27は形象埴輪である。25は人物立像の袴の裾、あるいは鞍の下の膝の左側の部分と考えられる。外面斜めハケ後、端部から側面まで粘土貼付で肥厚させている。内面は横から斜めハケ後、一部指ナデが施されている。胎土に結晶片岩を含む。26は下の方に張り出す物の一部である。端部内面に粘土紐を貼り付け肥厚させている。外面はナデ仕上げ、内面は割れ跡である。胎土に結晶片岩を含む。27は家型埴輪の基部のコーナー近くの可能性が考えられる。突帯の断面は台形で上縁が低い。胎土に結晶片岩を含む。28~40は円筒埴輪である。28は基底部の可能性がある。29は胴部破片で突帯の断面は台形で下縁が低い。30は口縁部破片で、口唇部は受け口状につまみあげている。胎土に結晶片岩・海綿骨針を含む。31は基底部破片で、底面に棒状圧痕がみられる。32は胴部破片で、破片上端に突帯貼付の横ナデがみられる。破片左に透孔の一部が残る。胎土に角閃石を含む。33は胴部破片で、透孔の上端部が残存する。透孔は直線的である。突帯は上縁が突出する。34は口縁部破片で、赤彩の可能性がある。35~37は胴部破片である。37は胎土に結晶片岩を含む。38・39は口縁部破片である。39は残存部が直線的に立ち上がる。胎土に結晶片岩を含む。40は突帯周辺部で、突帯の断面は台形と思われる。

41・42は須恵器の甕の胴部破片である。41は中型甕で、外面に2回以上の平行叩き、内面に同心円当て目がみられ、6世紀と思われる。42は小型甕で、外面に平行叩き、内面に同心円当て目と擦痕がみられ、6世紀と思われる。43は土師器の高坏の脚部である。

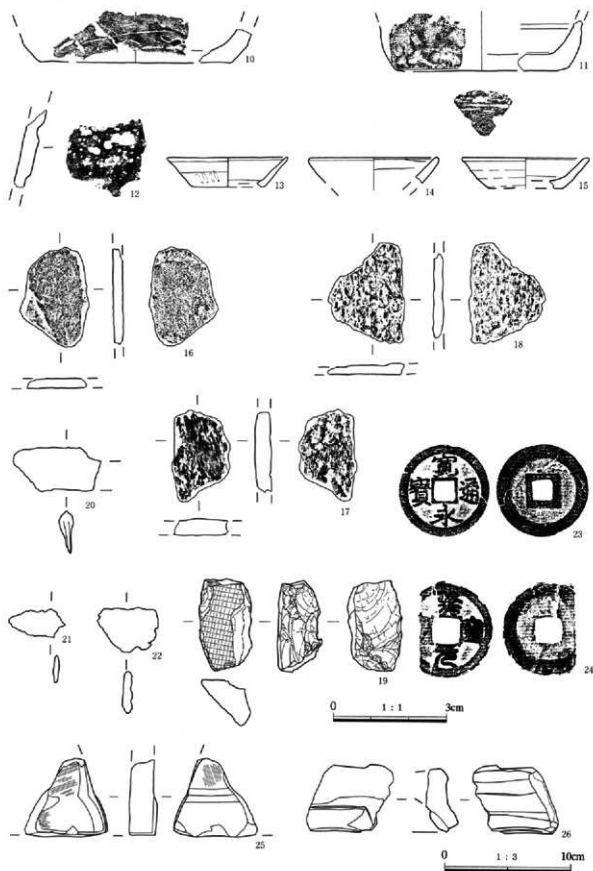
44・45は縄文時代の石器で、石材は粗粒輝石安山岩である。44は使用痕のある剃片である。表に自然面を残す。45はサイドスクレイパーである。表に自然面を残す。

図示した遺物の他に、磁器9点、陶器19点、軟質陶器46点、須恵器9点、土師器140点、火打ち石3点が出土している。土師器は4世紀の甕片9点を含む。

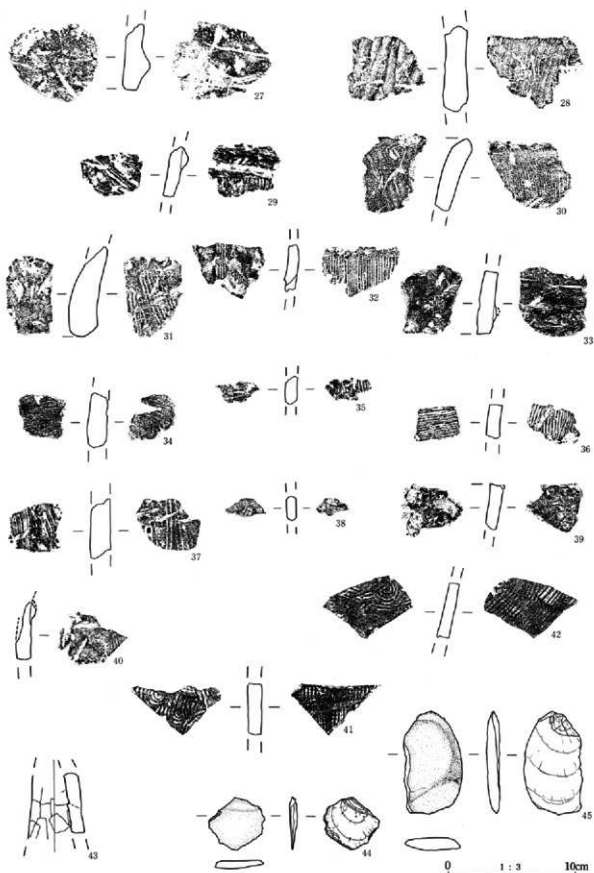


第84図 2面遺構外出土遺物(1)

第3章 遺構と遺物



第85図 2面遺構外出土遺物(2)



第86圖 2面遺構外出土遺物(3)

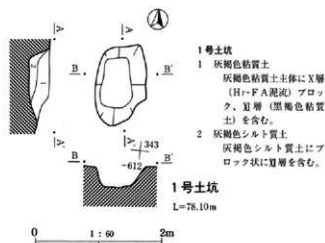
第4節 古墳時代の調査

第3面として、X層（Hr-F A泥流）下を調査した。X層の堆積は調査区の北側で比較的厚かった。層厚3cm前後で南側ではほとんど残っていない状態であった。確認された遺構は、土坑1基、溝8条、溜井状遺構2基、畦畔で区画された水田跡を確認した。

I 土坑

1号土坑（第87図、P L 28）

遺構 調査区の中央340-610Gで確認された。南側の一部が1面14号溝で壊されている。平面形は楕円形で、規模は長軸122cm、短軸78cm、深さ33cmである。長軸方位はN-6°-Wである。底面は平坦である。南側の壁を除き壁はやや外に開き気味に立ち上がる。南側の壁は緩い傾斜で立ち上がる。 **遺物** 出土遺物はなかった。



第87図 3面1号土坑実測図

II 溝・溜井状遺構

1号溝（第88図、P L 26）

遺構 調査区の東側の320-560G-300-540Gにかけて北西から南東の走向（N-51°-W）で確認された。全長24.3m、上幅35-105cm、底幅20-80cm、深さ10cm前後である。底面はわずかに北西から南東に傾斜している。底面は小さい穴などの凹凸がみられた。北西の先端部は長さ40cm、幅20cmで水口状になって、1号溜井状遺構とつながる。溝の両端は大畦に挟まれている。南側の大畦が2ヶ所明らかに切られて水口になっている。南東側の先端部は小畦で区切られて溝は終わっている。その先は小区画水田となっている。1号溝の南西にある小区画水田に水を送る水路と考える。埋没土はX層（Hr-F A泥流）であった。

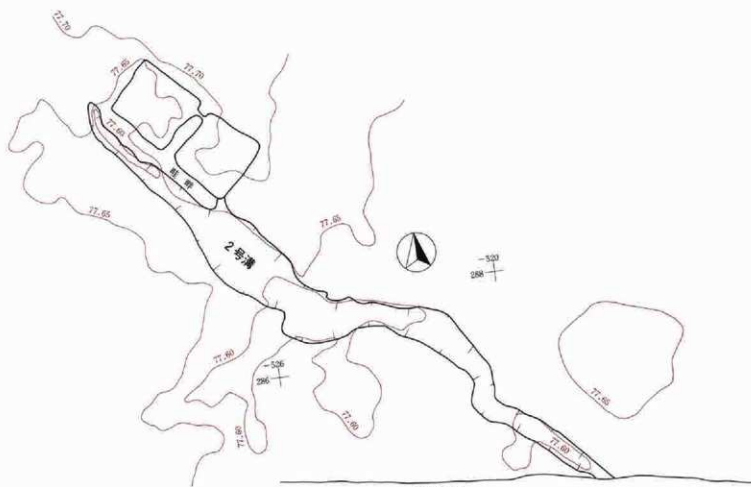
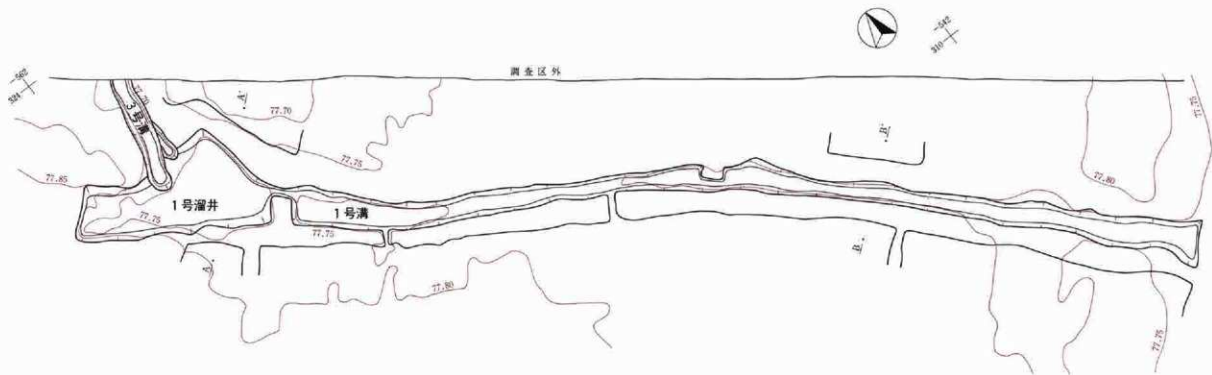
遺物 出土遺物はなかった。

3号溝（第88図、P L 26）

遺構 調査区の東側北端320-560Gでやや東に傾いた南北走向（N-15°-E）で確認された。全長は3.20mで、上幅50-65cm、底幅25-35cm、深さ16cmである。溝の断面形は箱型に近く、壁は急な角度で立ち上がる。北側は調査区外に続く。南側は1号溜井状遺構につながる。調査区外のどこかで水を取り入れ1号溜井状遺構に送水するための水路と考える。埋没土はX層（Hr-F A泥流）であった。 **遺物** 出土遺物はなかった。

1号溜井状遺構（第88図、P L 26）

遺構 調査区の東側315-555G-315-560Gで確認された。平面形は北東側の辺が三角形に突き出て、他の辺は長方形である。長軸5.02m、三角形部分の短軸2.54m、方形部分の短軸1.40m、深さ10cm前後を測る。埋没土はX層（Hr-F A泥流）である。3号溝で送られた水を一旦貯水し、1号溝との連結部の水口を

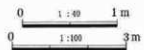


调查区外

第89图 3面2号溝实测图



第88图 3面1·3号溝、1号溜井状遺構実測图



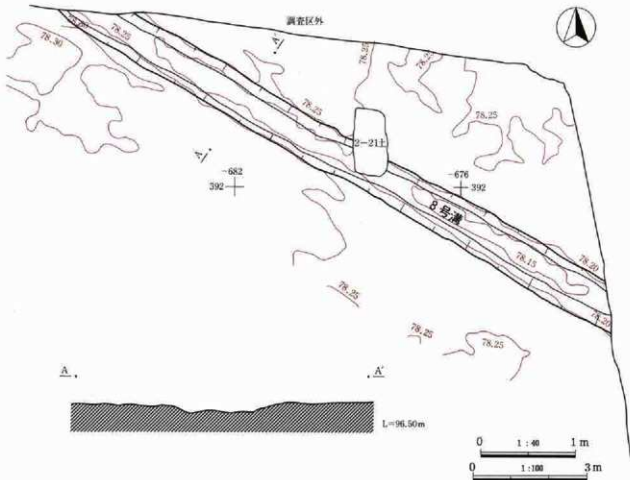
通して1号溝に送水するための施設と考える。さらに一旦貯水するため水温を上げるための「⁶³温め」の施設とも考えられる。遺物 出土遺物はなかった。

2号溝 (第89図、P.L.26)

遺構 調査区の東端290-525G～280-515Gにかけて、北西から南東に蛇行して確認された。北西はNo.286水田から発して、南東の調査区外に続く。全長は17.7mで、上幅30～160cm、深さ7cm前後である。埋没土はX層(Hr-F A泥流)であった。人為的なものではなく、自然の流路の可能性が高い。遺物 出土遺物はなかった。

8号溝 (第90図、P.L.27)

遺構 3区北側395-685G～385-670Gにかけて北西から南東の走向(N-61°-W)で確認された。全長16.9m、上幅100～120cm、底幅40～60cm、深さ10cm前後である。一部2面21号土坑で壊されている。両端は畦畔が確認され、さらに小区画水田が確認されている。埋没土はX層(Hr-F A泥流)である。水田に水を取り入れる水口は確認されなかった。確認された位置より下流に水を送るための水路と考える。遺物 出土遺物はなかった。



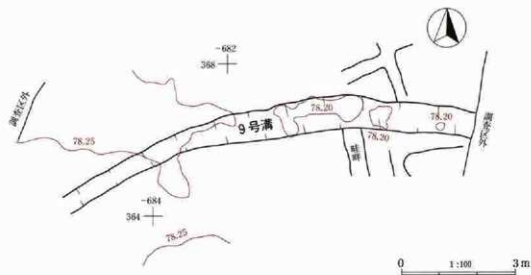
第90図 3面8号溝実測図

第3章 遺構と遺物

9号溝 (第91図、P.L.28)

遺構 3区南側360-685G~365-675Gにかけて、北側に張り出した緩い弧状で、東西の走向で確認された。全長11.3mで、上幅45~90cm、深さ5cm前後の浅い溝である。東は調査区外に続くが、さらに2区では確認できなかった。西は不明瞭で確認できなくなった。小区画水田の畦畔に関係ない状況である。埋没土はX層(Hr-F A泥流)である。人為的なものでなくX層(Hr-F A泥流)堆積時に削られた可能性が考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。



第91図 3面9号溝実測図

4号溝 (第92図、P.L.27)

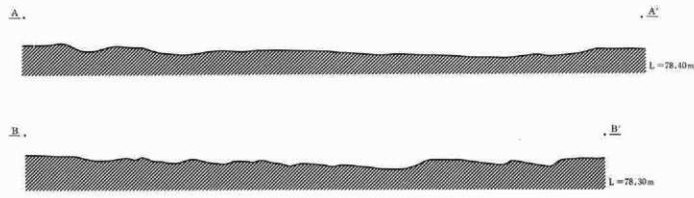
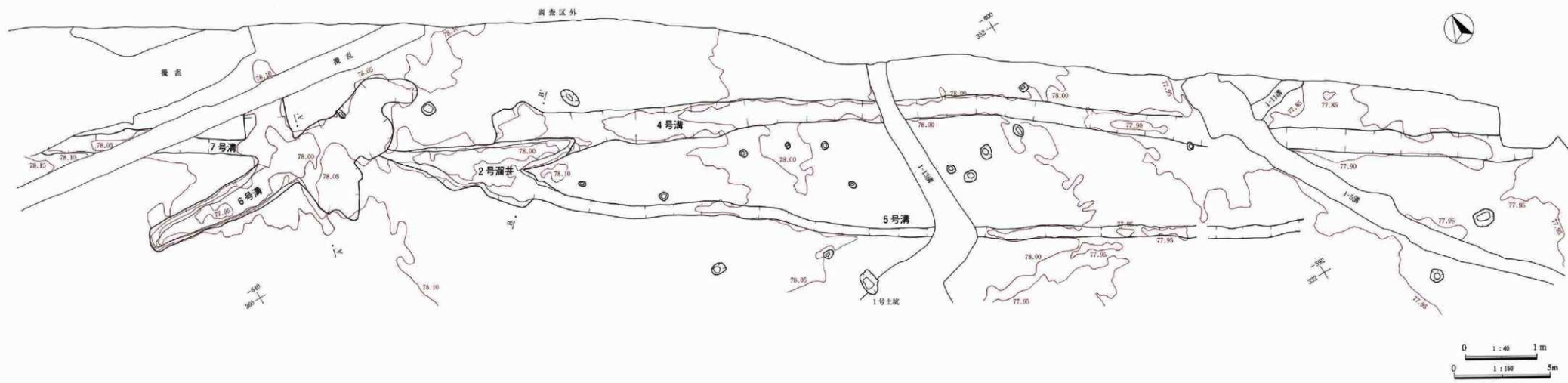
遺構 調査区の西から中央の北側360-620G~330-580Gにかけて北西から南東の走向(N-57°-W)で確認された。北東側の先端は2号溜井状遺構につながる。南東側の先端は徐々に不鮮明になり、確認できなくなった。さらに南東に延びると推定される。確認された全長は、54.5mで、上幅100~190cm、深さ10cm前後であった。途中、1面5号溝・1面13号溝に壊されている。埋没土はX層(Hr-F A泥流)であった。1面5号溝と1面13号溝の間は溝の両端に畦畔が確認され、さらに小区画水田が確認されている。2号溜井状遺構と1面13号溝の間の北側に小区画水田が確認されているが、溝と水田の間に畦畔は確認できなかった。X層(Hr-F A泥流)が堆積する過程で畦畔が壊されてしまったと考える。No.193水田で畦畔を切って排水と思われる水口が確認できた。4号溝と水田は同時期で、4号溝は水田に関係する水路と考える。

遺物 出土遺物はなかった。

5号溝 (第92図、P.L.27)

遺構 調査区の中央北側355-625G~330-590Gにかけて北西から南東の走向(N-56°-W)で確認された。北東の先端は2号溜井状遺構につながる。南東の先端は徐々に不明瞭になり、確認できなくなった。さらに南東に延びると推定される。途中1面13号溝にこわされている。埋没土はX層(Hr-F A泥流)である。全長40.5mで、上幅35~75cm、深さ4cm前後の浅い溝である。1面13号溝より南東では、5号溝の北側に畦畔が確認され、さらに小区画水田が確認されている。直接この水田に5号溝から給水したことは確認できないが、水田と同時期で、水田に関係する水路であると考える。

遺物 出土遺物はなかった。



第92图 3面4·5·6·7号沟、2号涵井状道横实测图

7号溝 (第92図)

遺構 調査区の西側370-645G～365-635Gにかけて北西から南東の走向 (N-57°-W) で確認された。北西の先端部は攪乱されていて不明であるが、調査区外に続くものと思われる。南東側の先端部は6号溝とつながる。全長11.1mで、上幅70～100cm、深さ3cm前後の浅い溝である。埋没土はX層 (Hr-F A泥流) であった。走向、埋没土の状況、断面の形状等から8号溝と同一の溝の可能性が考えられる。直接2号溜井状遺構につながっていないが、2号溜井状遺構に水を送るための水路と考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

6号溝 (第92図)

遺構 調査区の西側365-640G～365-625Gにかけて東西の走向 (N-85°-W) で確認された。西はなだらかに立ち上がり溝は終わる。東は不明瞭で不整形であった。南東部で2号溜井状遺構につながり、逆の北西部で7号溝とつながる。溝の中央部が不整形に広がる。全長は5.34m、上幅125～185cm、底幅40～125cm、深さ9cmである。溜井状遺構のような施設であった可能性も考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

2号溜井状遺構 (第92図)

遺構 調査区の西側360-625G～355-620Gにかけて確認された。平面形は不整形な三角形で、深さ10cmほどである。7号溝を通して送られた水を、一旦、2号溜井状遺構に水を貯め、4・5号溝に分ける機能をしていたと考える。埋没土はX層 (Hr-F A泥流) であった。

遺物 出土遺物はなかった。

Ⅲ 水田

X層(Hr-F A泥流)で覆われていた水田を310枚確認した。調査区全域にX層が確認されず、部分的であった。X層は、Hr-F Aの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物と思われ、6世紀初頭である。層厚は0~5cmほどである。X層の確認できた範囲とはほぼ同じところで水田が確認された。確認された水田は、6世紀初頭であり、いわゆる小区画水田である。3区北側地区、5区、2区南西地区、2区北東地区、1区北東地区で集中して確認された。X層(Hr-F A泥流)下の地形は北西から南東にゆるやかに傾斜する。標高は78.3~77.6mである。水田の長軸方位は概ね北西方向(N-29~60°-W)である。水田耕土はAs-Cを含む黒褐色粘質土(XI層)である。確認した310枚のうち完全に区画がわかるものは109枚で、面積は1.05~7.78㎡、平均3.27㎡である。

2区北東地区水田(第93図、P L 24・25)

遺構 4号溝と5号溝の間と4号溝の北側で、X層(Hr-F A泥流)で覆われた水田を41枚確認した。このうち完形は13枚で、面積は1.71~4.76㎡で、平均2.92㎡である。タテアゼの方位はN-50~57°-Wであった。1面13号溝の東側では、4号溝の両端に畦畔が確認できたが、西側では確認できなかった。畦畔の幅は、30~50cmほどである。耕作面と畦畔の高低差は、3cm前後である。タテアゼの方位は北西から北東で、地形の傾斜にそっている。

遺物 明確に水田に伴う遺物はなかった。

1区北東地区水田(第94図、P L 24・25)

遺構 1区の北東側、1・2号溝の周辺で、X層(Hr-F A泥流)で覆われた水田を95枚確認した。このうち完形は47枚で、面積は1.93~7.78㎡、平均4.03㎡である。1号溝の両端に水田の通常の畦畔より幅の広い畦畔が確認された。北側の畦畔(2号畦畔)は幅60~80cm、南側の畦畔(1号畦畔)は50~80cmである。1号畦畔は2カ所途切れ、水口となっている。1号畦畔に接する水田区画はヨコアゼが1カ所を除いてみな離れて、水口となっている。他の調査区の水田ではみられない特徴である。小区画水田のタテアゼ・ヨコアゼの幅は、25~60cmで、耕作面と畦畔の高低差は3~5cmほどであった。タテアゼの方位は、N-36~46°-Wであった。 **遺物** 明確に水田に伴う遺物はなかった。

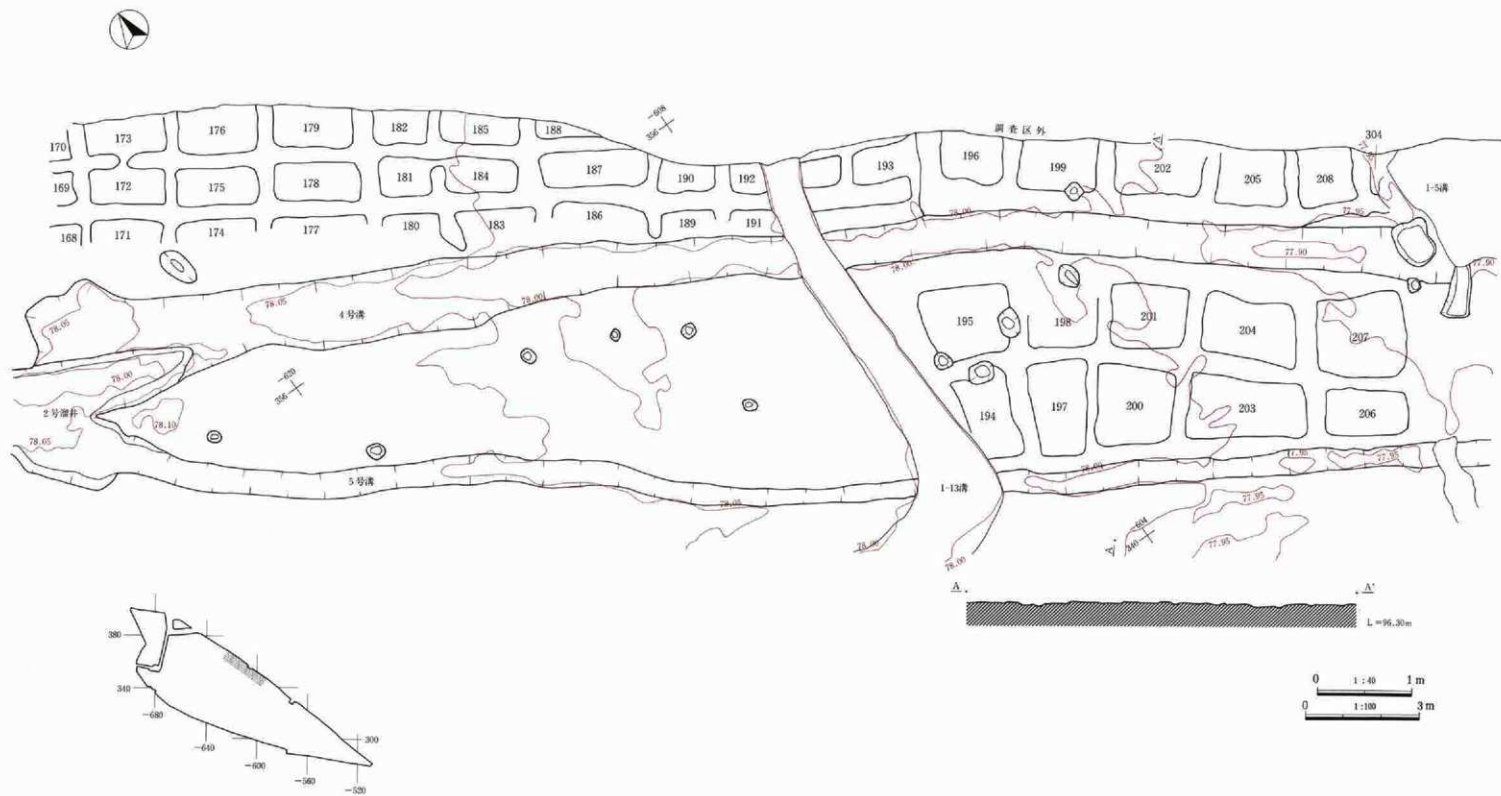
3区北側地区水田(第95図、P L 24・25)

遺構 3区全体でX層(Hr-F A泥流)で覆われた小区画水田を、81枚確認した。このうち完形は29枚で、面積は1.05~6.29㎡で、平均は2.47㎡である。畦畔の幅は30~50cmで、タテアゼの方位はN-29~60°-Wであった。耕作面からの高さは3cm前後である。耕土はXI層(黒褐色粘質土)である。地形は北東から南西に傾斜している。傾斜にそってタテアゼを造っている。8号溝から取水する水口等は確認できなかった。

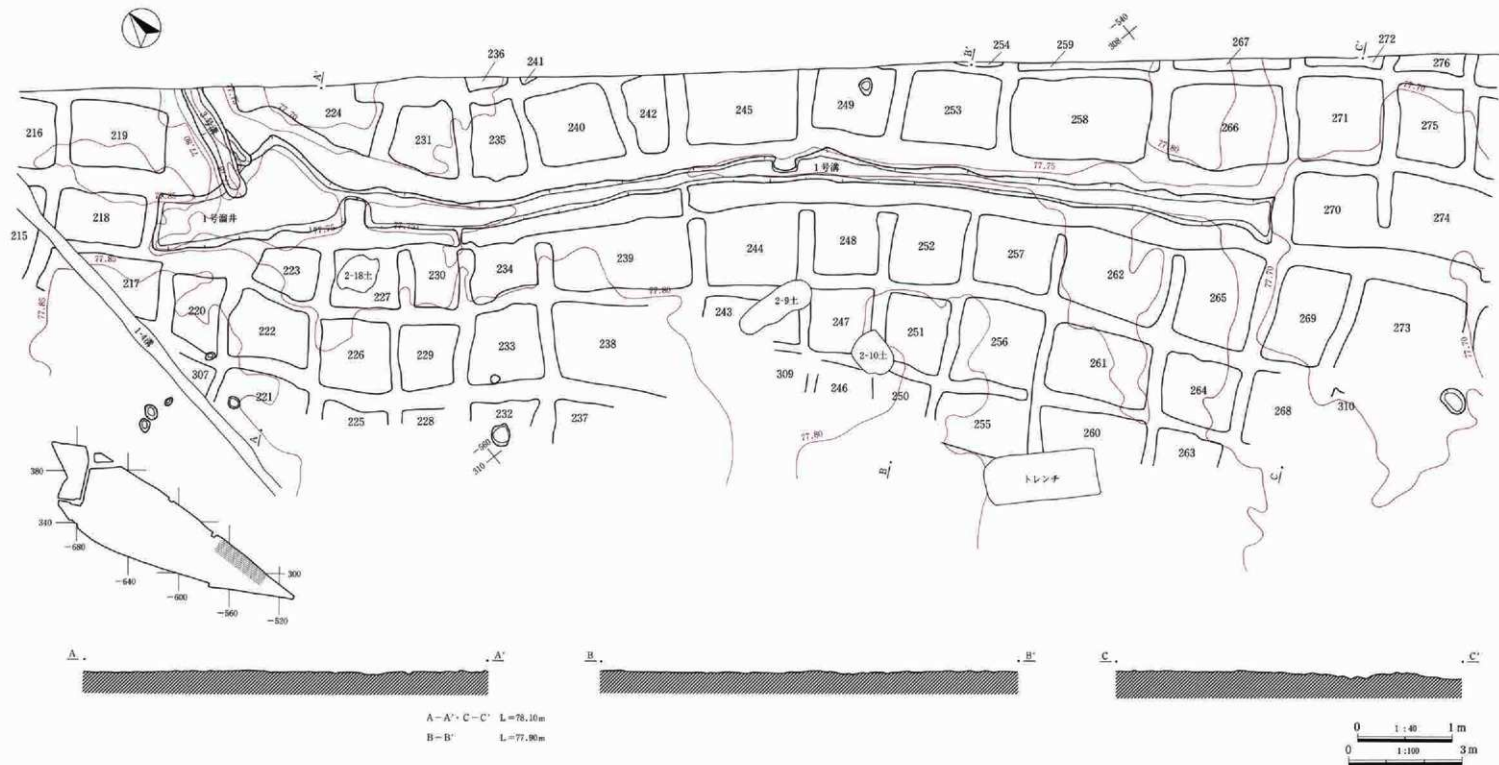
遺物 明確に水田に伴う遺物はなかった。

2区南西地区水田(第96図、P L 24)

遺構 水田を46枚確認した。このうち完形は18枚で、面積は2.04~4.24㎡で、平均2.96㎡である。畦畔の幅は30~50cmほどである。この付近はX層(Hr-F A泥流)が薄く、水田耕土と畦畔の高低差はほとんどなかった。タテアゼの方位はN-38~44°-Wであった。 **遺物** 明確に水田に伴う遺物はなかった。



第93图 3面2区北東地区水田实测图

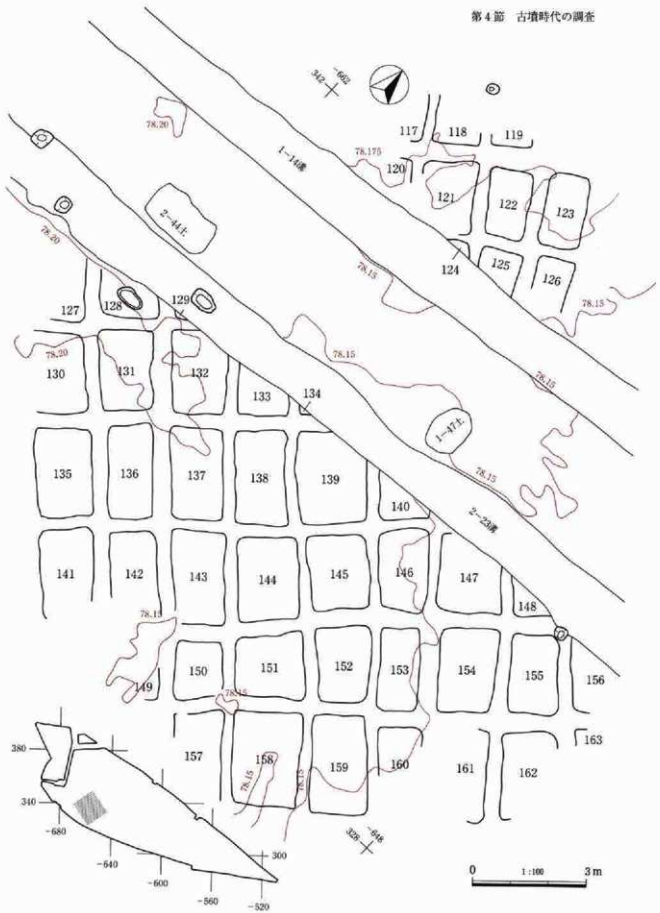


第94図 3面1区北東地区水田実測図



第95图 3面3区北侧地区水田实测图

第4節 古墳時代の調査



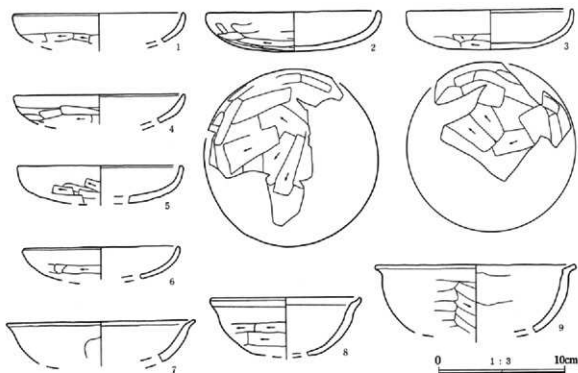
第96図 3面2区南西地区水田実測図

IV 遺構外出土遺物 (第97・98図, P L46~48)

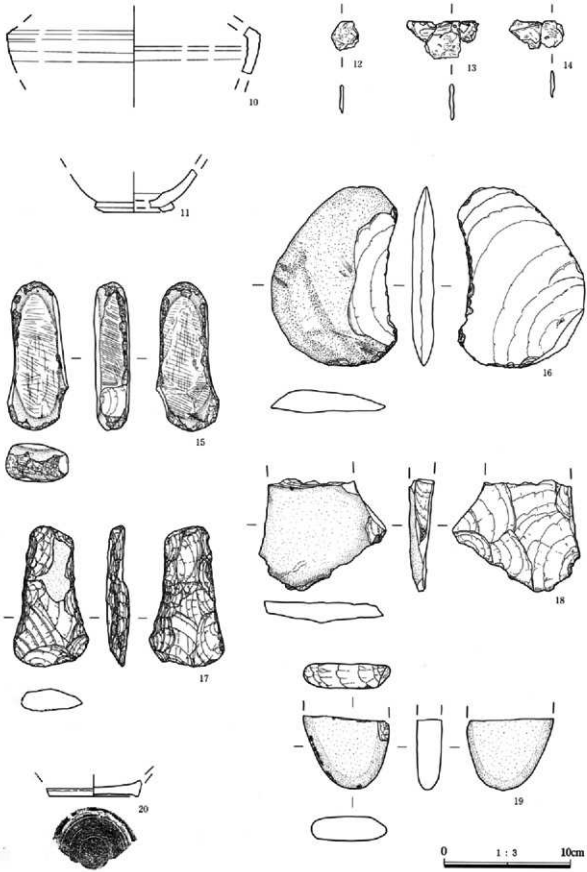
第3面として調査する際に、重機によるⅧ・Ⅸ層掘削時や遺構確認時に明確に遺構に伴わない遺物をここに報告する。

1～5は土師器坏で、口縁部と内面ナデ、外面の大半が寛削りである。8世紀後半～9世紀初めである。1・4は口径13.6cmである。2は口径13.6cm、高さ3.1cmである。3は口径12.9cm、高さ3.1cmである。5は口径12.8cmである。6は土師器坏で、口縁部と内面ナデ、外面の大半が寛削りである。胎土に赤色粒を含む。9世紀初めである。口径12.4cmである。7～9は土師器坏で、口唇部が外に開く内斜口縁で、外面寛削りである。胎土に砂粒を含む。6世紀前半である。7は口径14.8cm、8は口径12.0cm、9は15.8cmである。10は須恵器長頸壺の胴部から肩部の破片で、肩部に最大径で20.2cmで隆線が施される。8世紀である。11は須恵器碗の底部破片で、底径6.3cmで、貼付け高台である。9世紀後半～10世紀前半と思われる。12～14は同一個体で鉄製品で器種は不明である。板状で和鉄で薄延ばしである。片側の端部に折り曲げがある。15～19は石器である。15は砥石で、敲き石としても利用している。表裏と両側面に縦・横方向の擦痕がみられ、砥石の使用面である。両側縁と上下面に敲きの痕跡がみられる。石材は流紋岩である。16はスクレイパーである。表に自然面を残し、側縁に細かい調整刺維で刃部を作り出している。石材は黒色頁岩である。17は打製石斧で、風化が進んでいる。石材は粗粒輝石安山岩である。18は打製石斧またはスクレイパーで、上部を欠損する。刃部に縦方向の擦痕がみられる。石材は粗粒輝石安山岩である。19は敲き石で上半分を欠損する。下面から側面にかけて敲きの痕跡がみられる。石材は閃緑岩である。20は陶器皿の底部破片で、底径7.0cmである。低い三角形の削り出し高台で、部分的に長石軸がみられる。産地は美濃で17世紀初頭である。

図示した遺物の他に、土師器231点、須恵器8点、埴輪7点、磁器2点、陶器4点、瓦1点が出土している。



第97図 3面遺構外出土遺物 (1)



第98図 3面遺構外出土遺物(2)

第3章 遺構と遺物

3面 (Hr-F A泥流下) 水田計測表 (1)

水田No.	面積 (㎡)	長軸 (m)	短軸 (m)	畦畔と耕作面の高さ (m)	畦畔部分 耕作面	水口の有無	備 考
1	(1.84)	1.80	1.16	78.29	78.28		調査区外
2	(2.09)	1.70	1.38	78.29	78.28		調査区外
3	(0.06)	(0.46)	(0.26)	—	—		調査区外
4	(1.37)	2.14	(0.94)	78.31	78.29		調査区外
5	2.65	2.20	1.30	78.31	78.31		
6	3.64	2.36	1.62	78.31	78.29		
7	(2.26)	2.40	(1.34)	78.31	78.27		調査区外
8	(0.28)	(1.0)	(0.46)	78.28	—		調査区外
9	(2.06)	1.92	1.40	78.29	78.28		調査区外
10	2.30	1.94	1.26	78.29	78.28		
11	3.54	2.10	1.85	78.30	78.28		
12	3.13	2.10	1.90	78.31	78.28		
13	(0.06)	(0.50)	(0.25)	78.29	—		調査区外
14	(3.26)	2.85	1.36	78.28	78.28		調査区外
15	3.20	2.52	1.35	78.28	78.29		
16	4.04	2.76	1.54	78.29	78.29	東○	
17	6.29	2.94	2.36	78.31	78.29	北○	
18	3.41	2.60	1.45	78.30	78.28		
19	(0.22)	0.60	0.50	78.28	—		調査区外
20	(0.20)	0.70	0.40	78.29	—		調査区外、攪乱
21	(2.02)	2.30	1.55	78.28	78.27		攪乱
22	2.79	2.50	1.20	78.28	78.29		
23	2.92	2.24	1.33	78.28	78.29		
24	2.13	1.92	1.22	78.28	78.28		
25	1.93	1.90	1.06	78.28	78.28		
26	1.54	1.50	1.08	78.29	78.26		
27	1.16	1.83	0.70	78.26	78.27	北○	
28	(1.01)	1.40	0.86	78.28	78.28		調査区外
29	(0.55)	(1.02)	(1.0)	78.28	78.27		調査区外
30	(0.76)	1.36	0.58	78.26	78.25		攪乱
31	1.24	1.16	1.10	78.28	78.26		
32	1.43	1.40	1.08	78.28	78.26		
33	1.44	1.37	1.14	78.28	78.27		
34	1.10	1.14	1.10	78.29	78.26		
35	1.71	1.80	1.08	78.27	78.27	北○	
36	(2.01)	1.48	1.46	78.28	78.23		2-21土坑
37	(0.49)	(1.18)	(0.76)	78.25	78.24		調査区外
38	(5.12)	3.50	1.85	78.26	78.26		調査区外、攪乱
39	(0.06)	0.18	0.52	78.26	—		攪乱
40	(1.66)	1.56	1.13	78.25	78.26		攪乱
41	1.05	1.36	0.78	78.25	78.23		
42	3.42	2.10	1.90	78.27	78.26		
43	(1.63)	1.60	1.16	78.25	78.22		2-21土坑
44	(1.62)	1.46	1.12	78.25	78.24		調査区外
45	(0.26)	(0.82)	(0.62)	78.26	78.25		調査区外
46	(0.97)	2.06	0.64	78.26	78.27		調査区外、攪乱
47	(1.96)	2.50	1.02	78.26	78.25		攪乱
48	(1.86)	2.70	1.0	78.26	78.26		攪乱
49	(1.35)	2.0	1.08	78.25	78.25		攪乱
50	(1.18)	2.14	(0.70)	78.26	78.25		西側不明
51	(4.31)	2.15	2.07	78.26	78.21		南側不明
52	1.42	1.76	0.88	78.25	78.24		
53	1.77	2.02	1.0	78.26	78.25		
54	(1.89)	1.95	(1.16)	78.26	78.26		調査区外
55	(1.48)	2.50	0.70	78.26	78.25		調査区外

●水口の方位はテナアゼの方向を北としている。

3面 (Hr-F A 泥流下) 水田計測表 (2)

水田No.	面積 (㎡)	長軸 (m)	短軸 (m)	小畦畔と耕作面の高さ (m)		水口の有無	備 考
				畦畔部分	耕作面		
56	(2.27)	2.40	0.94	78.26	78.26		東側不明、攪乱
57	(1.52)	1.90	1.15	78.24	78.24		攪乱
58	(0.35)	0.82	0.72	78.25	—		攪乱
59	2.39	2.62	1.02	78.26	78.26	東○	
60	2.72	2.52	1.12	78.26	78.26	東○	
61	(2.81)	2.55	1.12	78.23	78.23		北側不明
62	(2.83)	1.95	1.70	78.24	78.21		調査区外
63	(0.25)	(0.67)	(0.55)	—	—		調査区外
64	(0.68)	(1.0)	0.72	78.25	78.26		南側不明、調査区外
65	(0.75)	0.95	0.80	78.25	78.24		南側不明
66	(0.88)	0.98	0.95	78.25	78.24		南側不明
67	(0.78)	0.90	0.86	78.25	—		南・東側不明
68	(1.06)	1.66	0.84	78.23	78.25		西側不明、攪乱
69	2.01	1.74	1.20	78.24	78.23		
70	(1.53)	1.63	1.0	78.24	78.21		南側不明
71	(1.73)	(1.48)	1.13	78.23	78.21		南側不明
72	(2.85)	(2.25)	(1.16)	78.23	78.23		北・西側不明
73	(2.25)	(1.74)	(1.30)	78.23	—		北・東側不明
74	(2.22)	3.65	(1.06)	78.21	—		3-9溝
75	(1.96)	(1.52)	(1.20)	78.23	78.21		東側不明、3-9溝
76	(5.24)	2.38	(2.20)	78.25	78.23		西側不明、3-9溝
77	(1.98)	(1.56)	1.40	78.23	78.23		調査区外
78	3.16	2.0	1.68	78.25	78.25		
79	2.24	1.93	1.24	78.25	78.25		
80	(1.16)	1.58	1.0	—	—		調査区外
81	(0.52)	(0.90)	(0.50)	78.26	78.26		西・南側不明
82	(0.84)	(1.0)	1.05	78.26	78.25		南側不明
83	(1.52)	1.45	(1.20)	78.25	78.23		南側不明
84	(0.61)	(1.12)	(0.57)	78.25	78.23		南・東側不明
85	(0.06)	(0.36)	(0.20)	78.24	—		調査区外
86	(0.09)	(0.30)	(2.20)	78.24	—		攪乱
87	(0.12)	(0.55)	(0.45)	78.226	—		調査区外
88	(0.85)	(1.42)	0.80	78.23	78.225		調査区外
89	(0.94)	(1.42)	0.90	78.24	78.22		攪乱
90	(0.03)	(0.34)	(0.16)	78.24	—		攪乱
91	(1.10)	(1.20)	(1.16)	78.225	—		調査区外
92	(1.02)	1.32	0.94	78.226	78.225		攪乱
93	(0.13)	(0.48)	(0.48)	—	—	北○	攪乱
94	(0.84)	1.0	1.0	78.215	78.215		調査区外
95	(0.11)	(0.58)	(0.34)	78.215	—		攪乱
96	(0.03)	(0.28)	(0.22)	78.215	—		調査区外
97	(0.83)	1.14	(0.26)	78.215	—		調査区外、攪乱
98	(0.02)	(0.22)	0.66	—	—		調査区外
99	(0.03)	(0.26)	(0.36)	—	—		攪乱
100	(0.61)	(1.40)	0.66	—	—		調査区外、攪乱
101	(0.10)	(0.46)	(0.36)	—	—		攪乱
102	(0.76)	1.20	(0.60)	—	—		調査区外、攪乱
103	(0.39)	(0.82)	(0.62)	—	—		調査区外、攪乱
104	(0.58)	(1.30)	(0.60)	—	—		調査区外、攪乱
105	(0.70)	1.08	(1.0)	—	—		調査区外、攪乱
106	(0.25)	(0.66)	(0.60)	—	—		調査区外
107	(0.31)	—	—	—	—		調査区外、攪乱
108	1.92	1.75	1.18	78.19	78.19		
109	1.97	1.88	1.15	78.19	78.18		
110	(1.27)	2.20	(0.70)	—	78.18		東側不明

●水口の方位はテアゼの方向を北としている。

第3章 遺構と遺物

3面 (Hr-F A泥流下) 水田計測表 (3)

水田No.	面積(m ²)	長軸(m)	短軸(m)	小畦畔と耕作面の高さ(m)		水口の有無	備 考
				畦畔部分	耕作面		
111	(2.25)	1.95	1.16	78.19	78.19		西側不明
112	(2.12)	(1.88)	1.16	78.19	78.19		東・南側不明
113	(3.04)	(2.10)	1.53	78.16	78.15		西側不明
114	(1.88)	1.57	(1.20)	78.16	78.17		東側不明
115	(1.96)	(1.80)	(1.13)	78.16	78.16		西・南側不明
116	(2.36)	1.50	(1.35)	78.16	78.15		東・南側不明
117	(0.35)	(1.28)	(0.28)	78.17	78.18		北・西・南側不明
118	(1.46)	1.24	(1.22)	78.17	78.18		北・東側不明
119	(0.35)	1.07	(0.30)	78.17	78.18		北・東・西側不明
120	(0.28)	(0.64)	(0.35)	—	—		北・西・南側不明、1-14溝
121	(2.57)	1.92	1.44	78.17	78.18		西・南側不明、1-14溝
122	2.04	1.82	1.4	78.17	78.16		
123	2.04	1.92	1.10	78.16	78.18		
124	(0.08)	(0.42)	(0.36)	78.16	—		1-14溝
125	(0.91)	1.12	(1.10)	78.16	78.16		1-14溝
126	(1.14)	1.0	(0.94)	78.16	78.16		南側不明
127	(1.64)	(1.70)	(0.90)	78.21	78.21		北・西側不明
128	(1.56)	1.56	(1.16)	78.21	78.15		2-23溝
129	(0.056)	0.26	0.20	78.21	—		2-23溝
130	(2.84)	2.12	(1.34)	78.21	78.18		西側不明
131	2.93	2.13	1.48	78.21	78.21		
132	(2.96)	2.16	1.47	78.21	78.17		2-23溝
133	(1.32)	1.35	(1.30)	78.19	78.18		2-23溝
134	(0.05)	(0.45)	(0.24)	78.16	—		2-23溝
135	3.41	2.34	1.54	78.19	78.18		
136	2.88	2.45	1.20	78.21	78.18		
137	3.29	2.40	1.40	78.21	78.16		
138	3.29	2.50	1.40	78.19	78.16		
139	(3.92)	2.46	1.86	78.16	78.16		2-23溝
140	(1.03)	1.35	1.30	—	—		2-23溝
141	(3.13)	2.34	1.42	78.19	78.17		南東側不明
142	(2.77)	(2.20)	1.26	78.19	78.19		南側不明
143	(3.33)	2.45	1.42	78.17	78.16		南西側不明
144	3.49	2.20	1.62	78.16	78.15		
145	3.02	1.98	1.60	78.15	78.15		
146	3.19	2.20	1.32	78.15	78.14		
147	(2.92)	2.0	1.76	78.14	78.13		2-23溝
148	(0.55)	1.0	0.94	78.13	78.13		2-23溝
149	(0.38)	(0.82)	(0.32)	78.16	—		北・西側不明
150	2.04	1.55	1.28	78.16	78.16		南東側不明
151	2.90	1.84	1.80	78.17	78.16		
152	2.66	2.0	1.44	78.17	78.16		
153	2.32	2.20	1.10	78.16	78.15		
154	3.21	2.20	1.52	78.14	78.14		
155	2.65	2.10	1.36	78.13	78.12		
156	(0.99)	1.92	(0.50)	78.12	78.11		南側不明、2-23溝
157	(2.75)	(2.40)	0.94	78.16	—		西・南側不明
158	4.24	2.50	1.86	78.15	78.13		
159	3.81	2.60	1.52	78.16	78.15		
160	(1.53)	(1.30)	1.16	78.16	78.13		南側不明
161	(1.06)	2.43	(0.42)	78.13	78.12		西側不明
162	(3.15)	2.25	1.44	78.13	78.12		東・南側不明
163	(0.15)	(0.44)	(0.32)	78.12	—		東・南側不明
164	2.76	2.0	1.48	78.01	78.01		
165	(4.55)	(2.43)	(1.88)	78.01	78.01		西・南側不明

●水口の方角はタテアゼの方向を北としている。

3面 (Hr-F A泥流下) 水田計測表(4)

水田No.	面積(m ²)	長軸(m)	短軸(m)	小畦畔と耕作面の高差(m)	畦畔部分	耕作面	水口の有無	備 考
166	(3.78)	1.92	(2.13)	78.01	77.99			南側不明
167	4.31	2.15	2.14	78.01	77.97			
168	(0.45)	(0.82)	(0.54)	78.08	78.09			北・西側不明
169	(0.51)	0.87	(0.58)	78.08	78.08			北側不明
170	(0.53)	0.80	(0.60)	78.08	—			北側不明、調査区外
171	(1.22)	1.90	(0.55)	78.08	78.08			調査区外、2-73土坑
172	1.92	2.0	0.94	78.08	78.07		東○	調査区外
173	(1.95)	2.12	1.0	78.07	78.05			調査区外
174	(1.22)	2.12	(0.50)	78.08	78.08			西・南側不明、2-73土坑
175	2.29	2.20	1.02	78.06	78.06			
176	(2.50)	2.08	1.24	78.06	78.06			調査区外
177	(0.80)	2.53	(0.36)	78.08	78.08			北・西・南側不明
178	2.36	2.30	1.06	78.08	78.07			
179	(2.32)	2.13	1.10	78.06	78.07			調査区外
180	(1.96)	1.50	(0.70)	78.08	78.06			北側不明、3-4溝
181	1.41	1.40	1.10	78.08	78.08			
182	(1.27)	1.50	0.92	78.08	78.06			調査区外
183	(2.26)	2.10	(0.96)	78.08	78.02		北○	南側不明、3-4溝
184	1.77	1.90	1.02	78.05	78.03		北○	
185	(1.63)	2.06	0.83	78.05	78.03			調査区外
186	(2.54)	2.50	(0.74)	78.03	78.03			北側不明、3-4溝
187	(2.57)	2.90	0.95	78.03	78.03			調査区外
188	(0.57)	1.70	0.50	78.03	78.03		北○	調査区外
189	(1.06)	1.42	(0.60)	78.04	78.02			南側不明、3-4溝
190	(1.06)	1.46	0.88	78.04	78.03			調査区外
191	(2.41)	5.03	(0.68)	78.04	78.02			北側不明、3-4溝
192	(1.46)	2.94	0.79	78.04	78.03			調査区外、1-13溝
193	1.71	1.78	1.02	78.03	78.03			
194	(2.82)	2.40	1.40	78.01	78.02			1-13溝
195	(4.05)	2.40	1.94	78.02	78.02			
196	(1.99)	1.63	1.30	78.02	78.02			調査区外
197	3.50	2.50	1.62	78.03	78.03			
198	(2.07)	1.82	(1.30)	78.02	—			南側不明
199	(2.75)	2.10	1.44	78.01	78.02			調査区外
200	4.06	2.17	2.06	78.02	78.02			
201	3.33	2.05	1.70	78.02	77.99			
202	(3.24)	2.40	1.50	78.01	77.98			調査区外
203	4.74	3.20	1.76	78.01	77.99			
204	3.70	2.53	1.64	77.99	77.96			
205	(2.60)	1.90	1.50	77.98	77.98			調査区外
206	2.50	2.15	1.26	77.98	77.98			
207	4.76	2.33	2.27	77.97	77.92			
208	(2.18)	1.59	1.50	77.97	77.97			調査区外
209	(0.38)	1.70	(0.20)	77.89	77.87			西・南側不明、調査区外
210	(1.59)	1.64	(1.20)	77.89	77.87			調査区外
211	(0.81)	1.94	(0.44)	77.89	—			西側不明
212	(3.58)	2.64	(1.80)	77.89	77.86			調査区外
213	(2.09)	2.50	(1.30)	77.88	77.83			北・西側不明
214	(3.96)	2.24	(1.96)	77.88	77.70			調査区外、1-4溝
215	(2.96)	(2.46)	2.0	77.84	77.81			西側不明、1-4溝
216	(3.09)	2.04	1.84	77.84	77.84			調査区外、1-4溝
217	(2.20)	3.30	1.56	77.89	77.87			西側不明、1-4溝
218	(2.99)	2.30	1.40	77.87	77.81			1-4溝
219	4.39	2.58	1.76	77.84	—			
220	2.25	2.10	1.42	77.89	77.86			

*水口の方位はタチアゼの方向を北としている。

第3章 遺構と遺物

3面(Hr-FA泥流下)水田計測表(5)

水田No.	面積(m ²)	長軸(m)	短軸(m)	小畦畔と耕作面の高さ(m)	水口の有無	備 考
				畦畔部分	耕作面	
221	(1.97)	2.40	(1.0)	—	—	南側不明、1-4溝
222	3.22	2.18	1.80	77.87	77.82	
223	1.93	1.72	1.40	77.83	—	
224	(3.97)	3.96	(1.68)	77.79	—	調査区外
225	(0.68)	1.76	(0.52)	—	77.80	西側不明
226	3.46	1.97	1.96	77.83	77.82	
227	2.74	1.86	1.60	77.83	—	
228	(0.39)	(1.16)	(0.34)	77.83	—	西・南側不明
229	2.45	1.74	1.57	77.83	77.83	
230	1.99	1.68	1.30	77.83	77.68	北○
231	2.85	2.10	1.90	77.79	77.74	
232	(0.97)	1.80	(0.74)	—	—	西側不明
233	3.48	2.0	2.0	77.83	77.85	
234	(2.26)	1.82	1.54	77.82	77.79	北○
235	2.53	2.04	1.44	77.79	77.76	
236	(0.34)	1.10	(0.38)	77.76	77.74	調査区外
237	(1.82)	(1.56)	(1.16)	77.83	77.85	西・南側不明
238	(5.74)	(2.80)	2.34	77.82	77.82	南側不明
239	6.29	3.66	1.90	77.82	77.79	北○
240	4.18	2.20	2.10	77.79	77.79	
241	(0.06)	(0.40)	(0.20)	77.76	—	調査区外
242	(1.96)	2.06	1.16	77.80	77.80	調査区外
243	(2.57)	2.60	(0.90)	77.79	—	西側不明、2-9土坑
244	5.08	1.48	2.20	77.78	77.79	北○ 2-9土坑
245	(5.48)	3.03	(1.94)	77.80	77.80	調査区外
246	(1.15)	1.50	(0.86)	77.79	—	西側不明
247	2.78	1.70	1.66	77.79	77.80	2-10土坑
248	3.08	1.84	1.72	77.79	—	北○
249	(3.31)	2.04	1.80	77.78	77.79	調査区外
250	(1.26)	(0.80)	(1.20)	77.81	—	西側不明、2-10土坑
251	2.94	2.04	1.64	77.79	77.81	2-10土坑
252	3.84	2.12	1.90	77.79	—	北○
253	4.41	2.50	1.93	77.79	77.81	
254	(0.13)	(1.15)	(0.13)	77.79	—	調査区外
255	(3.67)	2.50	1.63	77.81	77.79	東○ 北側不明、トレンチ
256	4.63	2.25	2.20	77.79	77.79	
257	3.67	2.12	1.85	77.79	77.76	
258	7.78	3.74	2.20	77.79	77.76	
259	(0.76)	3.74	(0.28)	77.79	—	調査区外
260	(3.33)	2.88	(1.22)	77.76	—	西側不明、トレンチ
261	4.78	2.74	1.82	77.76	77.74	
262	5.89	2.86	2.17	77.78	77.74	北○
263	(1.54)	1.77	(1.05)	77.74	—	西側不明
264	3.34	2.02	1.70	77.78	77.79	
265	4.98	2.62	2.10	77.78	77.79	北○
266	6.53	3.18	2.28	77.74	77.82	
267	(0.91)	3.10	(0.33)	77.74	—	調査区外
268	(0.85)	1.96	(0.62)	77.74	77.73	西・南側不明
269	4.30	2.90	1.74	77.69	77.68	
270	4.19	2.30	1.90	77.68	77.66	
271	4.97	2.30	2.28	77.74	77.71	
272	(0.47)	2.05	(0.36)	77.74	—	調査区外
273	(7.32)	2.80	(2.30)	77.71	77.69	西・南側不明
274	5.98	3.17	2.20	77.73	77.66	北○
275	3.41	2.04	1.78	77.68	77.69	

●水口の方位はタテアゼの方向を北としている。

3面(Hr-F A泥流下)水田計測表(6)

水田No.	面積(m ²)	長軸(m)	短軸(m)	小畦畔と耕作面の高さ(m)		水口の有無	備 考
				畦畔部分	耕作面		
276	(0.84)	1.83	(0.58)	77.72	77.71		調査区外
277	3.23	2.18	1.70	77.73	77.71		
278	(1.86)	2.0	(1.06)	77.72	77.71		調査区外
279	(7.26)	3.35	2.20	77.71	77.67		西側不明
280	4.67	2.92	1.82	77.73	77.68		
281	6.15	2.92	2.28	77.73	77.69		
282	(3.32)	2.45	(1.44)	77.73	77.73		調査区外
283	(2.22)	2.48	(0.95)	—	—		西側不明
284	(4.09)	2.30	1.09	77.73	77.71		2-1・7土坑
285	4.32	2.30	2.21	77.73	77.71		2-7・8土坑
286	3.76	2.60	1.54	77.71	77.66		
287	6.01	2.66	2.40	77.73	77.69		
288	(4.04)	2.68	(1.60)	77.73	77.72		南側不明、調査区外
289	(1.63)	2.90	(0.75)	77.74	77.72		西側不明
290	3.96	2.43	1.90	77.73	77.71		
291	4.76	2.42	2.25	77.69	77.67		
292	4.72	2.50	2.09	77.66	77.64		
293	3.05	1.95	1.70	77.72	77.64		
294	(2.7573)	1.75	(1.66)	77.71	—		北側不明、調査区外
295	3.05	2.16	(2.05)	—	77.68		調査区外
296	3.89	2.40	1.90	77.69	77.69		
297	(4.69)	2.46	2.12	77.67	77.67		西・南側不明
298	3.86	2.32	1.80	77.67	—		
299	3.072	1.84	1.70	77.71	77.72	北○	
300	(2.4853)	1.94	(1.88)	77.71	—		調査区外
301	(0.16)	(0.62)	(0.44)	—	—		調査区外
302	(1.82)	2.0	(1.0)	77.66	77.67		南側不明、調査区外
303	3.68	2.10	2.0	77.63	—		
304	—	—	—	77.95	77.95		東側不明
305	(1.904)	(1.74)	(1.7)	77.97	77.99		北側不明
306	(1.728)	(1.5)	(1.34)	77.99	77.99		北側不明
307	(0.54)	(1.10)	(0.9)	77.89	—		1-4溝
308	(1.429)	2.1	0.72	78.23	78.23		北側不明、3-9溝
309	(0.512)	1.0	0.94	77.79	—		北・西側不明
310	(0.064)	0.28	0.22	77.68	—		西・南側不明

●水口の方位はタテアゼの方向を北としている。

第5節 古墳時代初頭以前の調査

第5面として、ⅩⅦ層上面を調査した。確認された遺構は、溝8条、倒木痕である。倒木痕は平面プランを確認し、遺構の可能性のあるものはトレンチ調査を実施し、断面の観察を行った。

I 溝

1号溝 (第100図、P L 29・30)

遺構 調査区の東から中央280-510G~355-620Gにかけて北西から南東の走向(N-55°-W)で確認された。全長138.5mで、上幅40~110cm、底幅15~60cm、深さ14~35cmである。東は調査区外に続く。底面は地形にそって西から東に傾斜している。底面の標高は西端で77.8m、東端で77.0mを測る。2・3・4号溝と重複する。

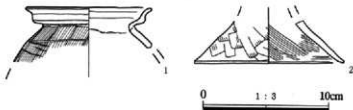
遺物 出土遺物はなかった。

2号溝 (第99・100図、P L 29・30・48)

遺構 調査区の東から中央280-510G~355-620Gにかけて北西から南東の走向(N-53°-W)で確認された。全長132.5mで、上幅125~195cmで、底幅45~140cm、深さ25~48cmである。東は調査区外に続く。底面は、地形にそって西から東に傾斜している。底面の標高は西端で77.6m、東端で77.3mを測る。1・3・4・8号溝と重複する。8・12号溝は調査の都合で別の番号を付けたが、同一の溝と考えられる。

遺物 1は土師器台付甕の口縁部破片で、口径10.0cmで、「S」字状口縁で、外面縦ハケ後に横ハケが施される。4世紀である。2は高坏の脚部で、底径11.6cmである。外面ハケ整形後ナデ、内面細ハケ目が施される。5世紀と思われる。

図示した遺物の他に、土師器5点、須恵器1点が出土している。



第99図 5面2号溝出土遺物

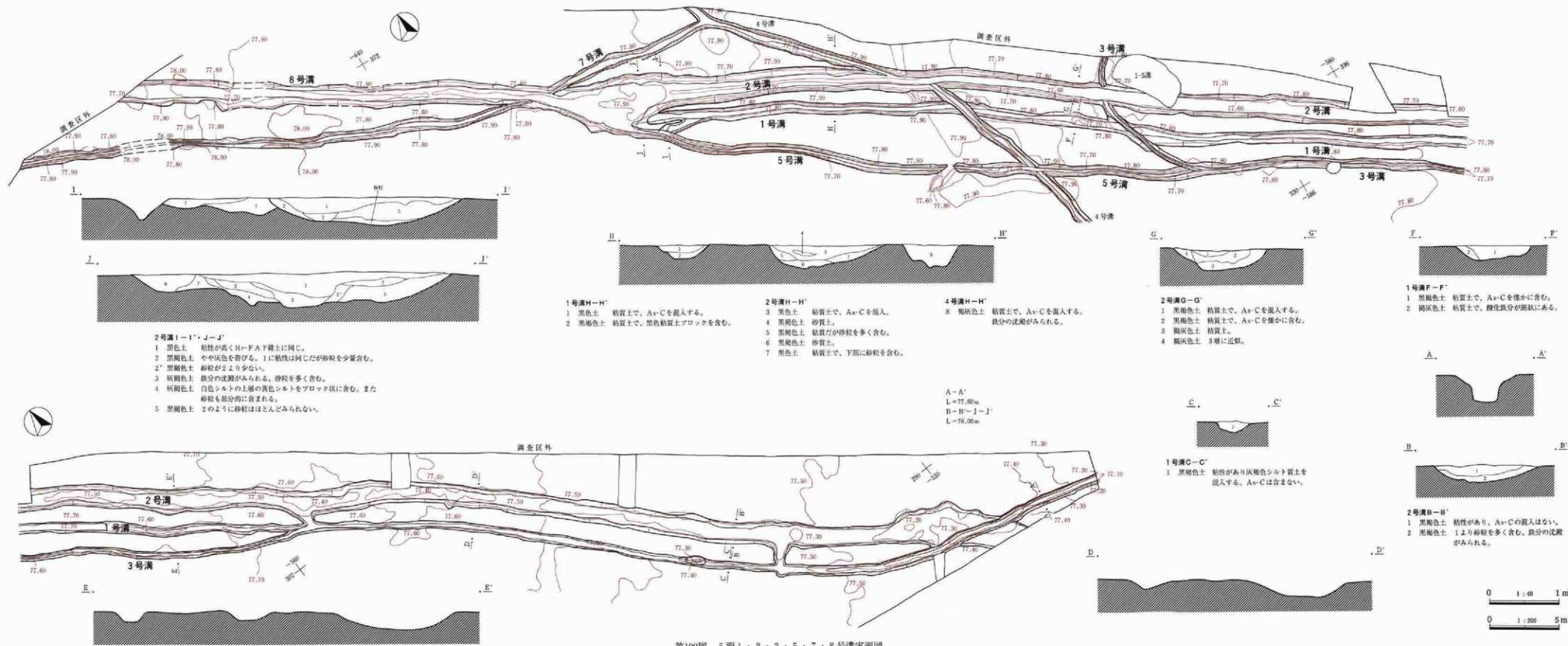
3号溝 (第100図、P L 29・30)

遺構 調査区の東から中央330-555G~335-590Gにかけて北西・南東の走向(N-10°-W)で、335-590Gで、弧状で北に向かい、調査区外に続く。確認された全長は50.9mで、上幅30~80cm、底幅5~30cm、深さ15cm前後である。底面の標高は西端で77.7m、東端で77.5mを測り、底面は西から東にわずかに傾斜している。590-335Gで5号溝とつながり、さらに330-555Gで1号溝とつながる。1・2・5号溝と重複する。

遺物 出土遺物はなかった。

5号溝 (第100図、P L 30)

遺構 調査区の中央335-590G~355-620Gにかけて北西・南東の走向(N-56°-W)で確認された。北は2号溝とつながり、東は3号溝とつながる。340-600Gで4号溝と重複する。土層断面の観察で、4号溝より新しい。全長41.2mで、上幅55~105cm、底幅10~40cm、深さ26~31cmである。 **遺物** 出土遺物はなかった。



- 2号溝 I-I', J-J'
- 1 黒色土 粘性が強くH-F A下層上に同じ。
 - 2 黒褐色土 やや灰色を帯びる。1に粘性は同じだが砂粒を少量含む。
 - 2' 黒褐色土 砂粒がより少ない。
 - 3 灰褐色土 鉄分の沈澱がみられる。遊砂を多く含む。
 - 4 灰褐色土 白色シルトの上層の黄色シルトをブロック状に含む。また砂粒も部分的に含まれる。
 - 5 黒褐色土 2のように砂粒はほとんどみられない。

- 1号溝 H-H'
- 1 黒色土 粘質土で、As-Cを混入する。
 - 2 黒褐色土 粘質土で、黒色粘質土ブロックを含む。

- 2号溝 H-H'
- 3 黒色土 粘質土で、As-Cを混入。
 - 4 黒褐色土 砂質土。
 - 5 黒褐色土 粘質土が砂粒を多く含む。
 - 6 黒褐色土 砂質土。
 - 7 黒色土 粘質土で、下部に砂粒を含む。

- 4号溝 H-H'
- 8 粉状色土 粘質土で、As-Cを混入する。鉄分の沈澱がみられる。

A-A' L=77.60m
 B-B'-J-J' L=78.00m

- 2号溝 G-G'
- 1 黒褐色土 粘質土で、As-Cを混入する。
 - 2 黒褐色土 粘質土で、As-Cを僅かに含む。
 - 3 褐灰色土 粘質土。
 - 4 褐灰色土 3層に近似。

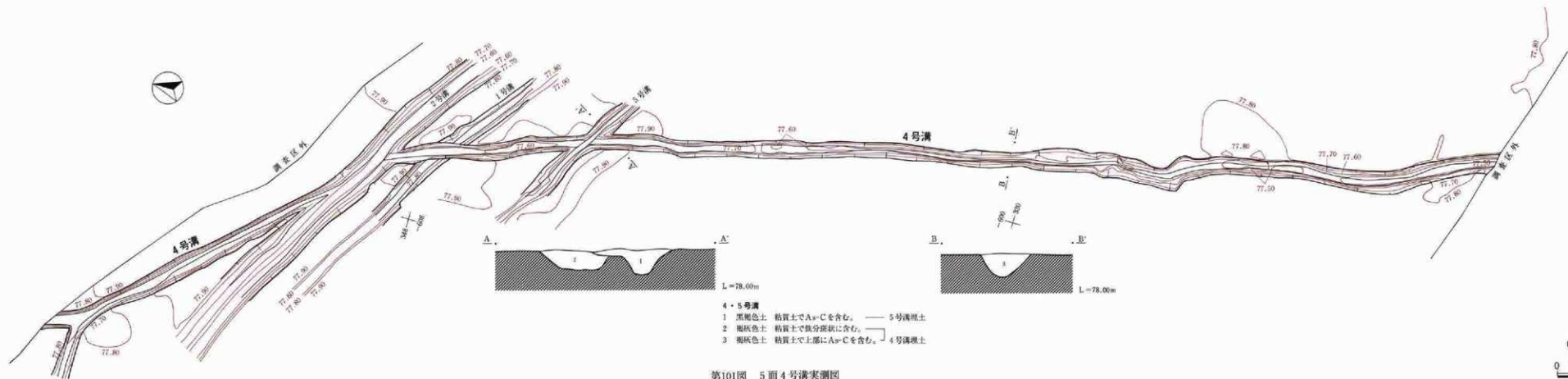
- 1号溝 F-F'
- 1 黒褐色土 粘質土で、As-Cを僅かに含む。
 - 2 灰褐色土 粘質土で、酸化鉄分が斑状にある。

- 1号溝 C-C'
- 1 黒褐色土 粘性があり灰褐色シルト質土を混入する。As-Cは含まない。

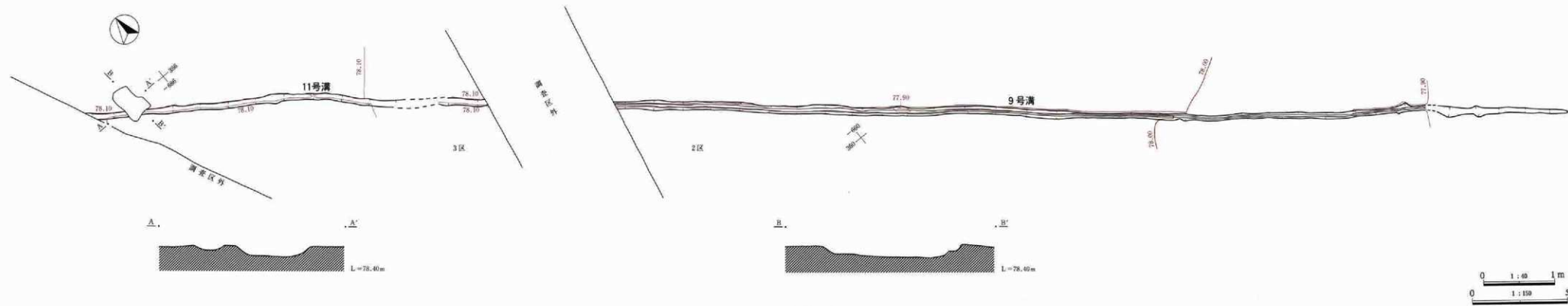
- 2号溝 B-B'
- 1 黒褐色土 粘性があり、As-Cの混入はない。
 - 2 黒褐色土 1より砂粒を多く含む。鉄分の沈澱がみられる。

0 1:40 1m
 0 1:200 5m

第100図 5面1・2・3・5・7・8号溝実測図



第101図 5面4号溝実測図



第102図 5面9・11号溝実測図

7号溝 (第100図、P L 32)

遺構 調査区の西側360-615G-375-660Gにかけて北西・南東の走向(N-69°-W)で確認された。西は調査区外に続く。3区で調査した10号溝と同一の溝と考えられる。確認された全長は、50.9mで、上幅35-100cm、底幅5-50cm、深さ15cmである。4・8号溝と重複する。

遺物 出土遺物はなかった。

8号溝 (第100図、P L 32)

遺構 調査区の西側360-620G-375-645Gにかけて北西・南東の走向(N-59°-W)で確認された。2号溝の走向とはほぼ一致している。東は2号溝につながり、西は調査区外に続く。さらに3区で12号溝とつながると思われる。2・8・12号溝は同一の溝と考える。確認された全長は31.2m、上幅120-190cm、底幅50-105cm、深さ26cmである。7号溝と重複する。底面はわずかに西から東に傾斜している。

遺物 出土遺物はなかった。

4号溝 (第101図、P L 30・32)

遺構 調査区の中央東寄り360-615G-350-605G(2号溝以北)で北西・南東の走向19.0m(N-42°-W)で、350-605G-295-590G(2号溝以南)にかけてやや西に傾く南北走向53.7m(N-16°-W)で確認された。北・南とも調査区外に続く。全長72.7mで、上幅55-120cm、底幅5-45cm、深さ30-33cmである。底面の標高は北端で77.7m、南端で77.5mを測り、底面はわずかに北から南に傾斜する。7・2・1・5号溝と重複する。

遺物 出土遺物はなかった。

9号溝 (第102図、P L 33)

遺構 調査区の西側365-665G-335-630Gにかけて北西から南東の走向(N-50°-W)で確認された。全長は50.0mで、上幅20-55cm、底幅3-20cm、深さ10cmほどである。底面の標高は西端で78.0m、東端で77.9mを測り、底面は北西から南東にわずかに傾斜している。南の先端部は徐々に掘り込みが浅くなり、不明瞭になって確認できなくなった。まだ南に続く可能性がある。北は調査区外に続き、3区で確認された11号溝に続くと考えられる。幅・深さ・断面の形状・埋没土などから判断できる。他の遺構等の重複はない。

遺物 図示し得なかったが土師器6点が出土している。

11号溝 (第102図、P L 33)

遺構 3区北側から中央390-690G-370-670Gにかけて北西から南東の走向(N-52°-W)で確認された。全長は21.2m、上幅25-50cm、深さ10cmほどである。底面の標高は西端で78.1m、東端で78.0mを測り、底面の傾斜はわずかに北西から南東に傾斜している。2面78号土坑と攪乱により一部壊されている。北側は調査区外に続く。南側は調査区外に続くが、2区で9号溝につながると推定される。9号溝と11号溝は同一の溝と考える。

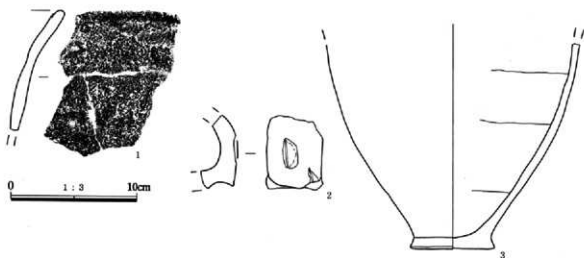
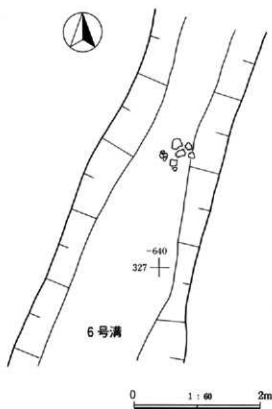
遺物 出土遺物はなかった。

第3章 遺構と遺物

6号溝 (第103・104図、P.L.31・48)

遺構 調査区の西側350-670G～310-625Gにかけて蛇行を繰り返しながらも、おおむね北西・南東の走向で確認された。北・南共に調査区外に続く。全長62.4mで、上幅0.8～1.3m、底幅15～55cm、深さ36～43cmである。底面はわずかに北西から南東に傾斜している。断面の形状や埋没土から、3区で14号溝につながると思われる。14号溝と6号溝は同一の溝と考える。

遺物 325-645Gで縄文時代中期後半と思われる土器片が出土した。埋没土の上層に二重になって出土した。遺物出土状況図は二重に重なった上の状況である。1は口縁部、2は橋状把手、3は底部から胴部下半である。表面の磨滅が激しく文様等は不明である。加曾利E式と思われる。接合できなかったが3と同一個体と思われる破片が8点出土している。図示した遺物の他に、土師器2点が出土している。

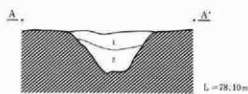
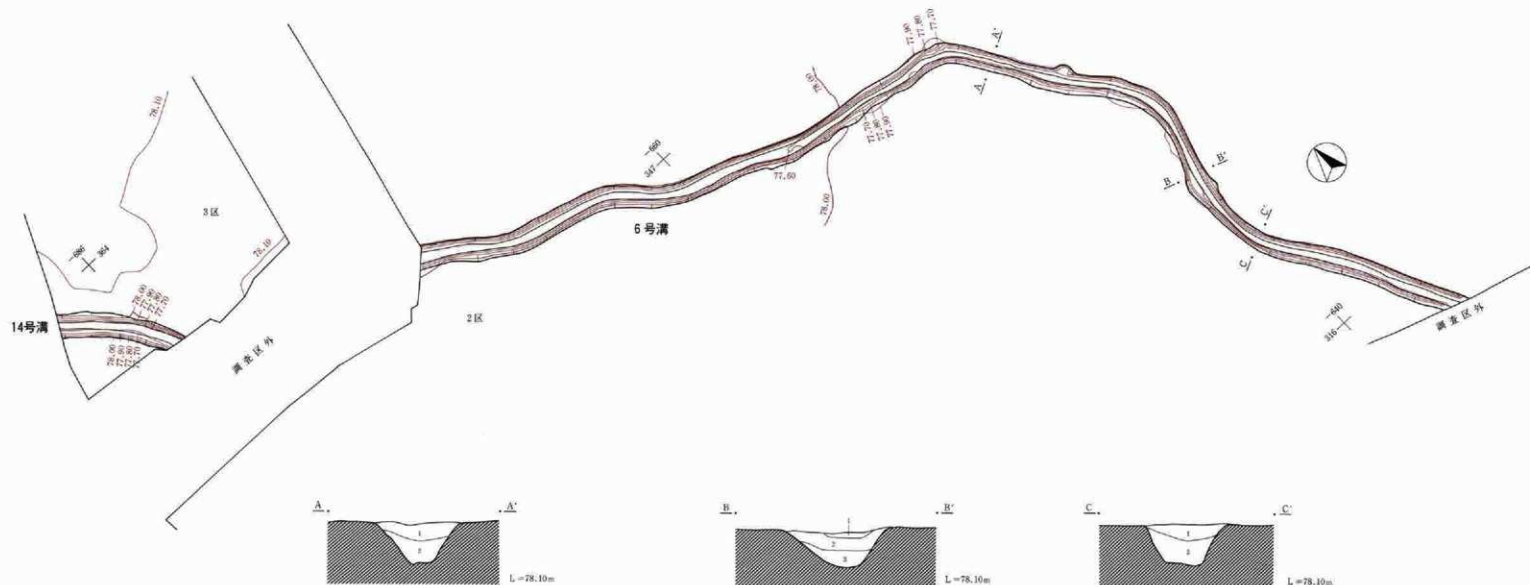


第103図 5面6号溝遺物出土状況図・出土遺物

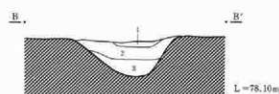
14号溝 (第104図、P.L.31)

遺構 3区南端360-685G～355-685Gにかけて北西から南東の走向で確認された。緩い弧状で東から南よりに曲がる。北側は調査区外に続く。南側は調査区外に続き、さらに埋没土の状況・断面の形状・走向などから2区6号溝とつながると考える。6号溝と14号溝は同一の溝と考える。全長は7.0mで、上幅110～135cm、底幅33～48cm、深さ27cmである。底面はわずかに北西から南東に傾斜している。

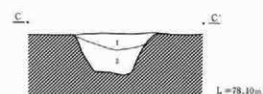
遺物 出土遺物はなかった。



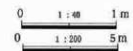
- 6号溝A-A'
- 1 黒褐色土 粘質土でA+Cを主体に含む。
 - 2 黒褐色土 粘質土でA+Cごくわずかに含む。



- 6号溝B-B'
- 1 黒褐色土 粘質土でA+Cを主体に含む。
 - 2 黒灰色土 粘質土で酸化鉄分の斑点がある。
 - 3 黒褐色土 粘質土でA+Cごくわずかに含む。



- 6号溝C-C'
- 1 黒褐色土 粘質土でA+Cを主体に含む。
 - 2 黒褐色土 粘質土でA+Cごくわずかに含む。

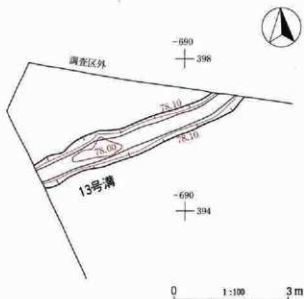


第104図 5面6・14号溝実測図

13号溝 (第105図、P L 33)

遺構 3区北側395-690Gで北東から南西の走向(N-66°-E)で確認された。全長5.8mで、上幅65-95cm、底幅30-50cm、深さ13cmである。両端とも調査区外に続く。確認した部分が少ないため不明瞭であるが底面は東から西にわずかに傾斜している。調査区外で12号溝とつながる可能性がある。重複する遺構はない。

遺物 出土遺物はなかった。



第105図 5面13号溝実測図

10号溝 (第106図、P L 33)

遺構 3区北側395-685G-380-670Gにかけてやや西に傾いた南北走向(N-19°-W)で攪乱部380-680Gからは東西走向(N-79°-W)で確認された。全長23.7mと推定される。上幅は60-105cm、底幅15-55cm、深さ28cmほどである。底面は北から東にわずかに傾斜している。北は12号溝とつながる。東は調査区外に続き、さらに2区で7号溝とつながると考える。埋没土、断面の形状、走向などから判断した。7号溝と10号溝は同一の溝である。

遺物 出土遺物はなかった。

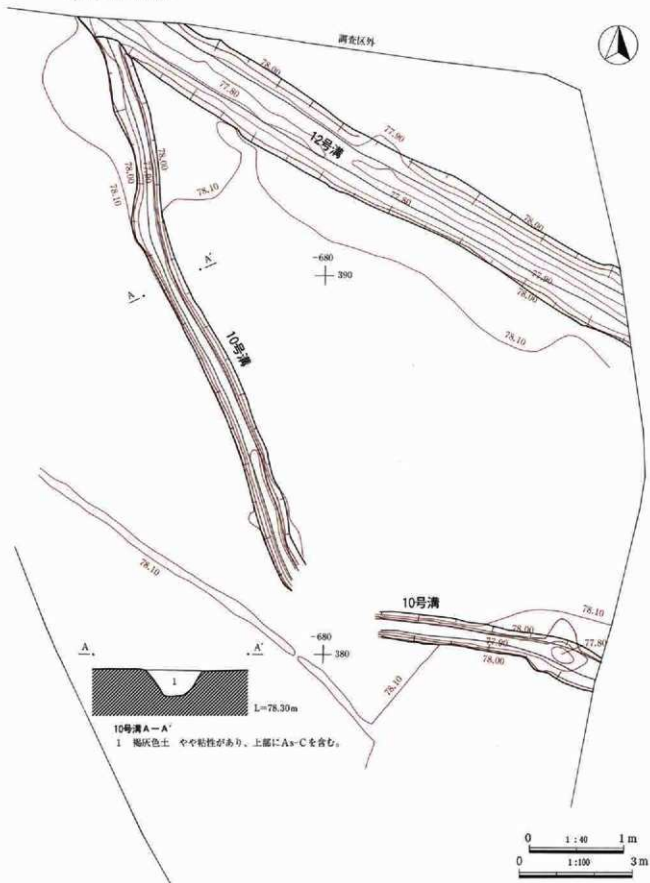
12号溝 (第106図、P L 32)

遺構 3区北側395-685G-390-670Gにかけて北西から南東の走向(N-60°-W)で確認された。全長は、23.7mで、上幅140-185cm、底幅60-80cm、深さ29cmである。底面は西から東にわずかに傾斜している。北側は10号溝と重複し、調査区外に続く。南側は調査区外に続き、2区8号溝につながる。埋没土の状況や断面の形状、走向などから判断した。12号溝・8号溝・2号溝は同一の溝と考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

II 遺構外出土遺物

第5面として調査する際に、Ⅺ～Ⅻ層を重機による掘削時と遺構確認時において、明確に遺構に伴わない遺物をここで報告する。図示しなかったが、磨滅が激しく不明瞭だが埴輪と思われる破片1点と4世紀と思われる土師器甕の胴部破片が1点出土している。



第106図 5面10・12号溝実測図

第4章 自然科学分析

第1節 自然科学分析にあたって

上滝五反畑遺跡の発掘調査はテフラ等を鏡層として、5面の発掘調査をおこなった。鏡層は上層よりAs-A、As-B、Hr-F A、As-Cであった。しかし、本遺跡の北で、利根川よりの宿横手三波川遺跡(KT-020)では、Hr-F P泥流を確認してHr-F P泥流下の水田を検出している。Hr-F Aと経験的に理解していたものが異なる可能性も考えられるようになった。X層(Hr-F A泥流)と経験的に理解している他のテフラを分析する必要を感じた。テフラは確認された遺構の時期を決定する重要な要因である。発掘調査者の経験も重要であるが、あくまでも主観であり、科学的・客観的ではない。テフラ分析・屈折率測定等の分析をすることによって、科学的・客観的な資料になると考えた。

プラント・オパール分析は検出された水田遺構の稲作の検証を目的として実施する。また第4面で調査をおこなったが遺構は検出できなかった。その検証も目的とする。

第2節 上滝五反畑遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

高崎台地上に位置する上滝五反畑遺跡の発掘調査では、年代の不明な土層のほかには溝や水田などの遺構が認められた。そこで微化石分析に先だって、地質調査を行い、土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行って、噴出年代が明らかな示標テフラの層位を検出し、土層や遺構の年代を求めることになった。調査分析の対象となった地点は、第1地点および第2地点の2地点である。

2. 地質層序

(1) 第1地点

本地点では、下位より赤褐色岩片混じり灰色砂質土(層厚8cm以上、岩片の最大径21mm)、黄白色土(層厚15cm)、白色軽石混じり灰色砂質土(層厚17cm、軽石の最大径4mm)、黄白色土(層厚7cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚10cm)、黄灰色砂質土(層厚15cm)、灰色土(層厚14cm、上面は第5面)、暗灰色土(層厚5cm、上面は第4面)、灰色軽石混じり黒灰色土(層厚10cm、軽石の最大径3mm、上面は第3面)、黄灰色土(層厚2cm)、灰色土(層厚9cm)、黒灰色粘質土(層厚4cm、上面は第2面)、灰色砂質土(層厚5cm、上面は第1面)、灰白色軽石層(層厚2cm、軽石の最大径5mm)、灰白色軽石混じり灰色土(層厚15cm、軽石の最大径5mm)、灰色表土(層厚14cm)が認められた(図1)。

これらの土層のうち灰色粗粒火山灰層は、その層相から約1.3~1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-Y P, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に同定される。また、第1面を覆う灰白色軽石層は、その層相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。なお、発掘調査では、これらのうち第5面で溝の存在が確認されている。さらに、第3面、第2面、第1面の3面では、畦畔遺構が検出されている。

(2) 第2地点

この地点では、下位より灰色土(層厚10cm以上)、灰色軽石混じり暗灰色土(層厚5cm, 軽石の最大径3mm)、白色軽石混じり黄色細粒火山灰層(層厚2cm, 軽石の最大径3mm)、灰色粘質土(層厚12cm)、黒灰色粘質土(層厚3cm)、褐色砂質土(層厚6cm)、灰色砂質土(層厚5cm)、褐色土(層厚3cm)、灰白色軽石層(層厚1cm, 軽石の最大径4mm)、灰色表土(層厚14cm)の連続が認められる(図2)。これらのうち、第1面を覆う灰白色軽石層は、その層相からAs-Aに同定される。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

土層中に含まれる示標テフラの層位を明らかにするために、第1地点において基本的に5cmごとに採取された土壌試料のうち6点、および第2地点の火山灰層の合計7点について、テフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。第1地点では、試料番号3および2に、よく発泡した灰白色軽石(最大径1.9mm)が比較的多く含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979, 石川ほか, 1979)に由来すると考えられる。軽石の産状から、試料番号3付近にその降灰層準があると推定される。したがって、第2地点の暗灰色土中に含まれる灰色軽石もAs-Cに由来すると考えられる。

試料番号1には、As-Cに由来する灰白色軽石のほかに、あまり発泡の良くない白色軽石(最大径1.0mm)が少量含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や角閃石が認められる。この軽石については、岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳沢川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来する可能性が考えられる。直下の土層中に、榛名火山起源のテフラ粒子が認められなかったことから、前者の可能性がより大きいものと考えられる。したがって、試料番号1の黄灰色土は、層相を合わせて考慮すると、Hr-FAの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物(早田, 1989)に由来する可能性がある。

試料番号1には、Hr-FAと思われる白色軽石のほかに、比較的多く発泡した淡褐色の軽石(最大径2.2mm)が多く認められる。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に由来すると考えられる。したがって、試料番号1付近にAs-Bの降灰層準があると考えられる。

第2地点の試料番号1には、あまり発泡の良くない白色軽石(最大径1.0mm)が比較的多く含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や角閃石が認められる。この軽石については、岩相からHr-FAに由来すると考えられる。したがって、試料番号1のテフラ層は、Hr-FAに同定される。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

第1地点において、テフラ粒子が認められたあるいは含まれる可能性が考えられた3層準（試料番号9、8、6）について、屈折率測定を行って、テフラの検出および示標テフラとの同定精度の向上をはかることにした。測定は、位相差法（新井, 1972）による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。試料番号9には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.704-1.708である。これらの特徴から、このテフラ層は、約1.8~2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群 (As-B P Group, 新井, 1962, 早田, 1994) に同定される。また試料番号8には、分厚い中間型ガラスが認められる。この火山ガラスの屈折率 (n) は、1.498-1.494である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.705-1.709である。このテフラは、重鉱物の組合わせや、斜方輝石の屈折率などから、約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石 (As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1994) に由来する可能性が考えられる。

試料番号6には、透明な軽石型火山ガラスが少量含まれている。その火山ガラスの屈折率 (n) は、1.501-1.504である。また重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.708-1.711である。これらの特徴は、試料番号6に含まれるテフラ粒子が、As-Y Pに由来していることを示唆する。

5. 考察—遺構の層位について

地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を合わせて行った結果、第5面および第4面は、As-Y Pより上位で、As-Cより下位にあることが明らかになった。第3面については、Hr-F A火山泥流堆積物直下にあると考えられる。第2面は、Hr-F Aより上位でAs-Bのすぐ下位に層位がある。さらに、第1面はAs-A直下に層位がある。

6. 小結

上滝五反畑遺跡地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より浅間板鼻褐色軽石群 (As-B P Group, 約1.8~2.1万年前)、浅間大窪沢第1テフラ (As-Ok1, 約1.7万年前)、浅間板鼻黄色軽石 (As-Y P, 約1.3~1.4万年前)、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉)、榛名二岳決川テフラ (Hr-F A, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年)、浅間A軽石 (As-A, 1783年)、あるいはそれらに由来するテフラ粒子を検出することができた。溝の確認面の第5面およびその上位の第4面はAs-Cより下位、第3面はHr-F A火山泥流堆積物の直下、第2面はAs-Bのすぐ下位、さらに第1面はAs-A直下に層位のあることが明らかになった。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

第4章 自然科学分析

- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, No.157, p.41-52.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, No.14, 45p.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒班-前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, No.14, p.69-70.
- 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (1994) 群馬の示標テフラと自然環境. 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色」予稿集, p.20-24.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径	テフラ
1	1	+++	淡褐>白	2.2,1.7	As-B・Hr-FA
	1'	+	白, 灰白	1.0,1.3	Hr-FA・As-C
	2	++	灰白	1.6	As-C
	3	++	灰白	1.9	As-C
	4	-	-	-	-
5	-	-	-	-	-
.....					
2	1	++	白	1.0	Hr-FA

+++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,
 -: 認められない. 最大径の単位は, mm.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
1	6	opx>cpx	1.501-1.504	1.708-1.711
	8	opx>cpx	1.489-1.494	1.705-1.709
	9	opx>cpx	-	1.704-1.708

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石. 屈折率の測定は, 位相差法 (新井, 1972) による.

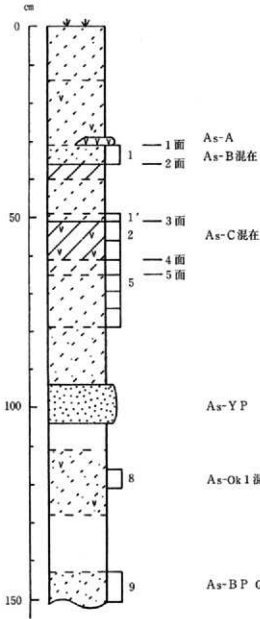


図1 第1地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

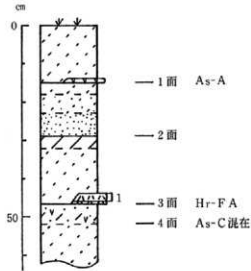


図2 第2地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第3節 上滝五反畑遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (藤原・杉山, 1984)。

上滝五反畑遺跡の発掘調査では、複数の層準から水田遺構が検出された。ここでは、これらの遺構における稲作の検証を主目的として分析を行った。

2. 試料

調査地点は、第1地点と第2地点の2地点である。試料は、As-Cの下層からAs-Aの上層までの層準から計16点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対して直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300 W・42 KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、タケ亜科 (ネザサ節) は0.48である。

4. 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科 (おもにネザサ節) の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その

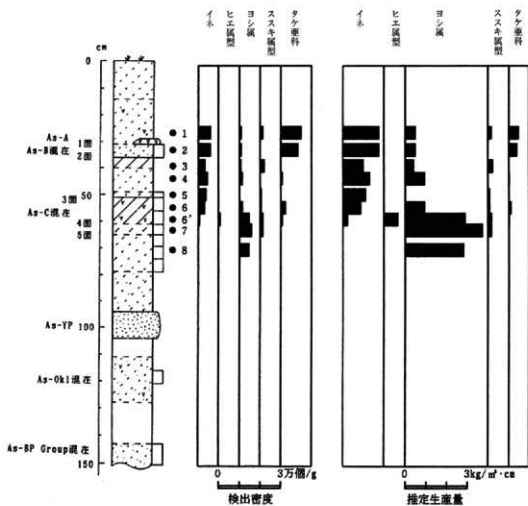


図1 上滝五反畑遺跡、第1地点におけるプラント・オパール分析結果

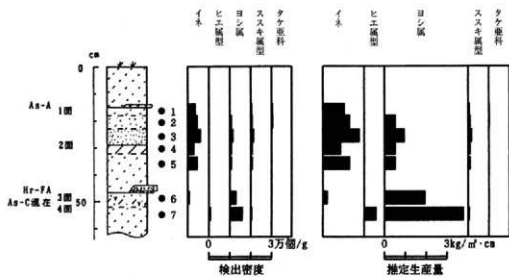


図2 上滝五反畑遺跡、第2地点におけるプラント・オパール分析結果

結果を表1および図1、2に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、群馬県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 第1地点（図1）

As-A直上層（試料1）からAs-Cの下層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、As-A直上層（試料1）からAs-C混在層（試料6'）までの各層からイネが検出された。このうち、As-A直上層（試料1）とAs-A直下層（1面、試料2）では密度が6,000個/gとかなり高い値であり、As-B直下層（第2面、試料3）、As-Bの下層（試料4、5）、As-C混在層（第3面、試料6）でも3,000～4,500個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) 第2地点（図2）

As-A直下層（試料1）からAs-Cの下層（試料7）までの層準について分析を行った。その結果、As-A直下層（試料1）からHr-F A直下層（試料6）までの各層からイネが検出された。このうち、As-Aの下層（試料3）では密度が6,100個/gとかなり高い値であり、As-A直下層（第1面、試料1、2）、Hr-F Aの上層（第2面、試料4、5）でも3,000～4,500個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Hr-F A直下層（第3面、試料6）では、密度が800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、1) 稲作が行われていた期間が短かったこと、2) 洪水などによって耕作土が流出したこと、3) 土層の堆積速度が速かったこと、4) 採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられる。

(2) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、As-Cより下位層でヨシ属が比較的多く検出され、ススキ属型やタケ亜科は比較的少量である。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、As-Cより下位層ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

以上の結果から、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが多く生育する湿地的な状況であったと考えられ、Hr-F A直下層（第3面）の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

6. まとめ

水田遺構が検出された第1面（As-A直下）、第2面（As-Bのすぐ下位）、第3面（Hr-F A火山泥流堆

積物直下)の各層からは、イネのプラント・オパールが多量に検出され、これらの遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、これらの層の間層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが多く生育する湿地的な状況であったと考えられ、HrFA直下層(第3面)の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

参考文献

- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 群馬県、上滝五反畑遺跡におけるプラント・オパール分析結果

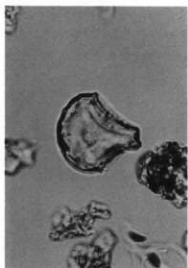
検出密度(単位:×100個/g)

分類群\試料	第1地点								第2地点							
	1	2	3	4	5	6	6'	7	8	1	2	3	4	5	6	7
イネ	60	60	34	45	38	30	8			37	45	61	30	45	8	
ヒエ属型							8									7
ヨシ属	8	8	7	15		15	46	59	45		8	15	8	8	31	60
ススキ属型	15		21		8	8	15	15		7	8	15	8	8		7
タケ亜科	98	83		8		23	8			7	8					

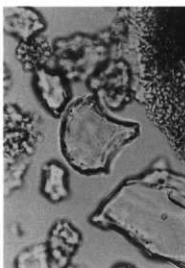
推定生産量(単位:kg/m²・cm)

イネ	1.77	1.76	1.01	1.33	1.11	0.88	0.23			1.09	1.34	1.79	0.88	1.34	0.23	
ヒエ属型							0.65									0.63
ヨシ属	0.47	0.47	0.43	0.95		0.95	2.93	3.74	2.87		0.48	0.96	0.47	0.48	1.95	3.78
ススキ属型	0.19		0.25		0.09	0.09	0.19	0.18		0.09	0.09	0.19	0.09	0.09		0.09
タケ亜科	0.47	0.40		0.04		0.11	0.04			0.04	0.04					

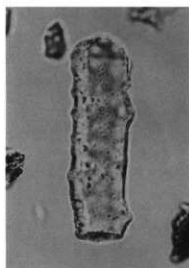
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



1



2



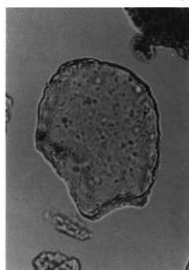
3



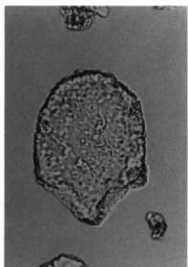
4



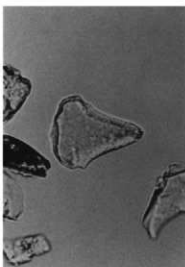
5



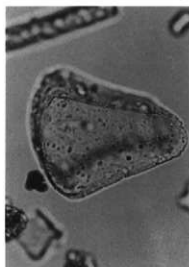
6



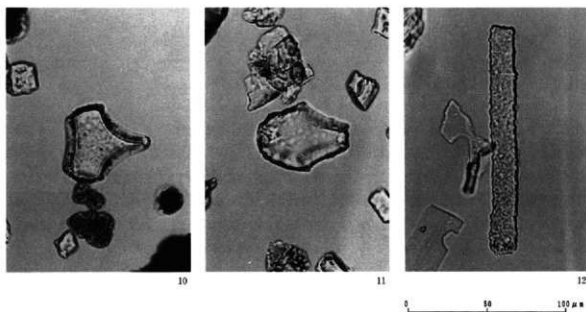
7



8



9



植物珪酸体の顕微鏡写真

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	1	1
2	イネ	1	2
3	ヒエ属型	1	6'
4	キビ族型	1	2
5	ジュズダマ属	1	4
6	ヨシ属	2	3
7	ヨシ属	1	6'
8	ススキ属型	1	7
9	ウシクサ族型 (大型)	1	7
10	シバ属	2	1
11	マダケ属型	2	2
12	棒状珪酸体	1	1

第5章 まとめ

第1節 天明3年の浅間山噴火の降灰

天明3（1783）年の浅間山の噴火により鎌原村（現吾妻郡鎌原村大字鎌原）では死者447名と伝えられている。火砕流・土石なだれが吾妻川・利根川を泥流となり流域に被害をもたらした。高崎市周辺も降灰があり、その様子が「文月浅間記」（旧「高崎市史」第1巻1969年に掲載されている）に克明に記されている。「文月浅間記」の筆者は、現在の高崎市田町の絹問屋であった羽島勘右衛門の妻一紅（1724～1795）である。「文月浅間記」によれば6月29日（7月28日）（以下（ ）内の日付は新暦を表す。）は霧のような細かい灰が降り、霜が降りたように積もった。7月2日（7月30日）は灰は薄雪のように積もった。この時点ではさほど深刻な状態ではない。7月5日（8月2日）は昼過ぎに浅間山の山鳴りが起こり、噴煙を確認している。7月6日（8月3日）朝には降灰で雪が積もったように、庭や垣根の葉が埋もれて、花が咲いたようである。人々は、雪かきのように灰をかき集め、箱に入れたり、俵に詰めたりしている。午前11時頃浅間山の山鳴りが起こる。いつもより激しい山鳴りである。噴煙を確認している。夕方から一晩中軽石がさらさらと音を立てて大量に降り積もる。稲妻や山鳴りがみられる。7月7日（8月4日）朝、道の灰を集めた山が角々にみられる。今までに経験のないことで驚いている様子が判る。午後、急に暗くなり、稲妻、地鳴りが響き、戸や障子ががずれるように動いている。家の中で俯している状態である。地鳴りが少しおさまってきたので頭を上げてみると、外が赤く見える。火の雨が降ったようで生きた心地がしない。外が白々してきたので夜明けのようであるが、まだ5時過ぎである。大混乱している様子が判る。霰のような軽石が次第にはげしく降ってくる。夜通し激しく降り続く。7月8日（8月5日）降った軽石の重みで倒壊する家屋が現れ、人々は屋根に登り、灰をはらい落とす。屋根から降ろされた灰は軒下まで達した。灰を片づける所もないので道に敷きならした。道を歩く人の足下を見上げるようである。

また、日光例幣使街道の玉村宿（現在の佐波郡玉村町）問屋三郎治と庄左衛門の連名で道中奉行宛に浅間山の噴火で通行止めの訴えをしている。その訴えの中に7月5日（8月2日）の夜中5分程（1.5cm程）降灰があった。7月6日から8日（8月3日から5日）まで降灰が続き、2寸7分程（8cm程）積もった。1坪（3.3㎡）あたり1石5斗3升（275ℓ）で1升（1.8ℓ）の灰の重さは430目（約1.6kg）である。また畑に降った灰で5～6寸（15～18cm）の作物は灰で埋もれてしまったと記されている。（『瀧川村誌』より）

高崎市東町の「東町V遺跡」の報文で、「文月浅間記」よりAs-Aの降灰量を推定している。降灰量は、10cm前後と推定している。本遺跡は「文月浅間記」の高崎市街地とは約6km東に離れているが玉村宿とはさほど離れてはいない。玉村宿の史料から推定すると15～18cmの作物が埋もれてしまうのであるから10cm前後が推定される。上滝五反畑遺跡では、3～4cmほどが確認できた。1次堆積に近い状態と思われるが完全ではない。上滝五反畑遺跡周辺の降灰量は3～4cm以上で、10cmより少ない量と考えるのが妥当であろう。

第2節 近世の水田について

上滝五反畑遺跡の第1面調査時に、①農具の跡はAs-A降下以前か、降下後なのか。②農具の跡のある畦畔で区画された遺構は水田か畑か。③なぜ農具の跡は残ったのか。④農具の跡の農具は何か。以上4点が疑

問点として生じた。

上滝五反畑遺跡では、Ⅲ層 (As-A混土)、Ⅳ層 (As-A) 下から第3章第1節で記述したように、長さ60~80cm、幅20cm前後の農具の痕跡が確認できた。この農具の跡はⅤ層 (黄褐色土) とⅥ層 (As-B) 中に残されている。農具の跡は、調査区全域で確認できたのではなく、第107図で示す範囲で確認できた。網かけのないA~DはⅤ層があるにも

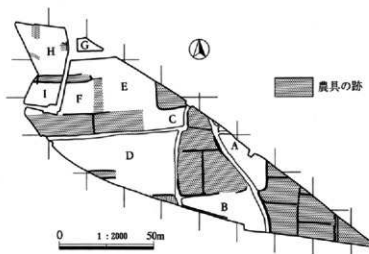
かかわらず農具の跡は確認できなかった。E・F・Iは、表土掘削時においてⅢ~Ⅵ層は確認できず、Ⅶ層 (As-B) になってしまった。他の区画に比べ微高地状になっていて、昭和40年代の土地改良で削平されたものか、Ⅴ層堆積時以降に何らかの理由で削平されたものとする。H・Gは現代の削平を受け、農具の跡が壊されていた。

まず疑問点の①農具の跡はAs-A降下以前なのか、降下後なのか。As-A降下以前とすれば、農具の跡が区画全域にみられることから、耕地を掘り起こす作業後に、火山灰等が掘り起こした土の隙間から入ったと考える。しかし、発掘調査を行った所見から、土の隙間から火山灰等が入ったという状態ではない。掘り起こした土と農具の跡は隙間もあれば直接接するところもあるはずである。しかし、農具の跡一面全体をAs-Aが覆っている状態であった。このことからAs-A降下以前ではないと考える。つまりAs-A降下後に耕地とするために、農具で土を掘り返し、その時につけられた跡が農具の跡と考える。農具の跡を覆っているAs-Aが1次堆積かどうか、調査時においてAs-Aの細かいユニットの検証をしていない。しかし、農具の跡は短時間で一連の作業で、1回きりである。以上のことから農具の跡はAs-A降下後と考える。

また疑問点の②畦畔で区画された遺構は水田か畑かであるが、上滝五反畑遺跡1面5・6・7号水田で水口を確認した。1面7号水田の北側の畦畔 (5号畦畔) の西の水口は、西側の1面5号溝から水を取り入れている。1面5号溝に水を取り入れる施設が確認された。農具の跡がつけられたⅤ層下がⅦ層 (As-B) であるが、1604年に上滝五反畑遺跡の所在する上滝地区まで滝川 (天狗岩用水) が掘削され、さらに1610年に下流の玉村町へ延長され水田が開かれている。当時の歴史的環境を考えれば、畑より水田が必要である。水田として可能であれば水田として利用していたと思われる。また、As-A直下とAs-A直上の層のプラントオパール分析を実施した。その結果、両方から高い密度でイネが検出された。遺構・歴史的環境・プラントオパール分析等から、畦畔で区画され農具の痕跡のある耕地は水田と考える。

疑問点の③なぜ農具の跡が残ったか。その理由として、降下した火山灰や軽石の処理によってついたという考えである。さらに火山灰等の処理方法として考えられる方法は、4通りである。

- ・第1の方法は降下した火山灰等を掻き集め田や畑の隅に集め山にする。さらに集めた火山灰を地区の数カ所にまとめる方法 (灰塚)。



第107図 1面水田全体図

第5章 まとめ

- 第2の方法は田や畑に通常の耕作より深く溝や穴を掘って、掻き集めた火山灰等を埋める。
- 第3の方法は、通常の耕作より深く掘り火山灰等ごと反転させてしまう方法である。通常の耕作より深い所に火山灰等を入れる点では、第2の方法に近い。
- 第4の方法として、火山灰等を意識しないで、通常の耕作により耕作土の中にすき込んでしまう方法である。

第1の方法と第2～第4の方法は組み合わせることも可能である。例えば第1の方法と第4の方法である。降下した火山灰等を掻き集め、他の場所に集める。掻き集めたとしても完全に取り除くことはできない。残った火山灰等は意識されずに通常の耕作で耕され、耕作土の中にすき込まれる。このように第1の方法と第2～第4の方法は組み合わせができると考えられる。

具体的に4つの方法を検討してみる。まず第1の方法は、地元の方々の話によると近辺に灰塚があったという。灰塚には、土敷や道等の灰を中心に、田や畑の灰も集められた可能性も考えられる。また調査区内で、農具の跡のない区画に灰を運んだ可能性も考えられる。第1の方法は否定できない。

第2の方法は、上滝五反畑遺跡で水田の区画が明確に判るものは少ないが、1面9・10・11号水田は区画が推定できる。発掘調査で水田区画全域を調査している。火山灰等を埋めた溝・土坑は確認できない。また区画が調査区域外につづく水田も調査区域内において火山灰等を埋める溝・土坑は確認できない。以上より、上滝五反畑遺跡で第2の方法は行っていないと考える。

第4の方法は農具が偶然深く入った場合に農具の跡が残ると考えられる。また、農具の跡が残るとしたら、かなりの重複があると思われる。上滝五反畑遺跡の農具の跡は、ほぼ区画全域に規則的にみられることから、偶然深く入ったとは思えない。また農具の跡の重複はみられるが、ほぼ同時期の重複で長い時間かけた重複ではない。上滝五反畑遺跡の農具の跡の水田区画は第4の方法ではないと考える。しかし、農具の跡が確認できない所がある。例えば第107図のAである。As-Aがなく、農具の跡は確認できない。この区画で第4の方法を用いて、耕作土に火山灰等をすき込んでいたとも考えられる。上滝五反畑遺跡全体では、第4の方法は否定できない。

上滝五反畑遺跡で確認できた農具の跡は第3の方法がもっとも可能性が高い。通常の耕作のおよばない深さに火山灰等を反転させて入れている。その後の耕作が及んでいないことから、第4の方法と区別できる。しかし、第3の方法だけでなく、第1の方法と組み合わせている可能性が考えられる。積もった火山灰等を取り除き、第107図のAやBまたは調査区外のどこかに運ぶ。取り除いたとしても、完全に取り除けない。その取り除けなかったものを第3の方法で火山灰ごと反転させて、結果として耕作土の下に火山灰を入れて処理した可能性も考えられる。

疑問点の④農具の跡の農具とは何か。農具の跡は幅20cm前後、長さ60～80cmの長方形であることから、農具は足踏み式の「エンガ（延鋏）」（右の写真）と呼ばれる鋏が使用されたと推定される。「エンガ」は、田や畑の土起こしに使われる農具で、「フミグワ（踏み鋏）」ともよばれ、フロ（風呂）と言われる板の先に刃がつき、刃の反対側に足掛けがつく。足掛けに片足を掛け踏み込む。そして「エンガ」自体を左右ど



「エンガ」と「エンガ」の使用状況

ちらかに反転し、土を掘り起こす。この動作を後退しながらおこない土を掘り起こしていくのが一般的な使用方法である。農具の跡の長さが60～80cmであることは、「エンガ」を踏み込む時の歩幅と考えられる。「エンガ」は③の第3の方法で用いるのに都合のよい農具といえる。土を掘ること自体で上下の土を反転できるのである。

農具の跡を細かくみると、畦畔に対して直角に刃を入れている。この畦畔に直角に刃を入れている部分は縦方向（「エンガ」の刃の入る方向）の移動ではなく、横方向の移動である。この延長上に考えられるのが7号水田（第31図）の農具の跡であり、結果として農具の跡が扇形になっている。他の水田は1～2列、畦畔に対して直角に刃を入れ横に移動する。そして他の部分は縦に移動している。3・4・6号水田は長軸に平行で農具2枚分を1単位として縦方向の移動を往復して繰り返している。10号水田は長軸に直角で農具2枚分を1単位で縦方向の移動を往復して繰り返している。11号水田は長軸に直角で農具1枚分を1単位で縦方向の移動を往復してこの作業を繰り返している。3・4・6号水田は長軸と短軸との差が少なく、10・11号水田は長軸と短軸の差が大きいためではないかと考える。

以上調査時の4つの疑問点をまとめてみた。上滝五反畑遺跡の農具の跡のある耕地は、As-A降下後に降下した火山灰を処理するために、「エンガ」を使い、土を反転させ、耕作土の下に火山灰を入れ、水田として使用していたと考える。

近世の水田は調査例はまだ少なく、今後調査例が増加し、今回の調査・報告で不明であったことも今後解明されるものと思われる。

【参考文献】

- 「文月浅間記」「高崎市史」第1巻 高崎市 1969年
 「瀧川村誌」 田口輝美 1984年
 「上之手八王子遺跡」 群馬県企業局・佐波郡玉村町教育委員会 1991年
 「小泉大塚越遺跡」 佐波郡玉村町教育委員会 1993年
 「埴没村落 鎌原村発掘調査概（よみがえる延命寺）」 吾妻郡嬭恋村教育委員会 1994年
 「東町V遺跡」 高崎市教育委員会 1996年
 「江戸時代の水田跡——上滝五反畑遺跡の発掘調査から——」 金井 武 『群馬風土記』55号 1998年
 「長野原久々戸遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998年
 「宿横手三波川遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999年
 「見つかったカスリン台風の爪痕——木ノ下遺跡——」 能登 健・小島純一 『群馬文化』257号 1999年

報告書抄録

ふりがな	かみたきごたんはたいせき
書名	上滝五反畑遺跡
副書名	北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第258集
編著者名	金井 武
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279 (52) 2511
発行年月日	平成11年12月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上滝五反畑	群馬県高崎市 上滝町 字五反畑	10202		36° 18° 59°	139° 4° 50°	19970107～ 19970331 19970401～ 19970930	8420	北関東自動車道建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上滝五反畑	水田	近世	水田・溝	陶磁器・石器	農具痕のある水田
		中世	溝・土坑	陶器・板碑・古銭	後漢五銖銭
		古代	水田・溝	土師器・須恵器	
		古墳時代	水田・土坑・溝	土師器・埴輪	

写 真 图 版



調査区遠景 (南上空より)



調査区遠景 (西上空より)



1面表土掘削（西より）



1面表土掘削（東より）



1面表土掘削（西より）



1面表土掘削（東より）



試掘2号トレンチAセクション（南より）



試掘1号トレンチBセクション（南より）



1面2・3区全景 (上空より)



1面1区全景 (上空より)



1面7号水田全景（上空より）



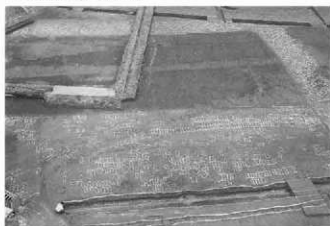
1面11号水田全景（南より）



1面5区全景 (北より)



1面5区農具痕 (東より)



1面18-21号水田全景 (南より)



1面2号畦畔 (西より)



1面2号畦畔 (東より)



1面3号畦畔 (東より)



1面4号畦畔 (西より)



1面5号畦畔 (西より)



1面4・5号畦畔水口 (西より)



1面6号畦畔 (西より)



1面1号溝全景 (南より)



1面1号溝A-A'セクション (南より)



1面2・3号溝全景 (南より)



1面2・3号溝A-A'セクション (北より)



1面2・3号溝全景 (北より)



1面2・3号溝調査風景 (南より)



1面4号溝全景(南より)



1面4号溝全景(北より)



1面5号溝B-B'セクション(南より)



1面5号溝全景(南より)



1面18号溝全景(東より)



1面13号溝全景(南より)



1面13号溝全景(北より)



2面2・3区全景(上空より)



2面1区全景(上空より)



2面1号土坑全景 (南西より)



2面3号土坑全景 (北より)



2面4号土坑全景 (北より)



2面4号土坑セクション (東より)



2面5号土坑全景 (北より)



2面6号土坑全景 (北より)



2面7号土坑全景 (西より)



2面7号土坑セクション (西より)



2面8号土坑全景 (南より)



2面8号土坑セクション (南より)



2面9号土坑全景 (西より)



2面10号土坑全景 (東より)



2面11号土坑全景 (西より)



2面11号土坑セクション (東より)



2面12号土坑全景 (東より)



2面13号土坑全景 (北より)



2面14号土坑全景 (北より)



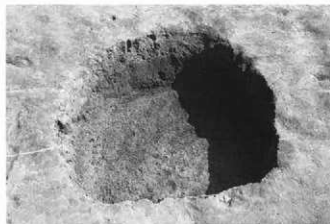
2面15号土坑全景 (北より)



2面16号土坑全景 (東より)



2面16号土坑セクション (東より)



2面17号土坑全景 (西より)



2面18号土坑全景 (東より)



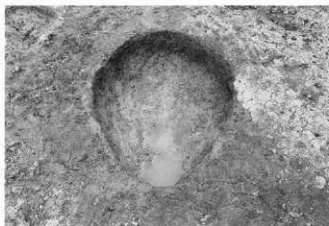
2面19号土坑全景 (東より)



2面19号土坑セクション (東より)



2面20号土坑全景 (北より)



2面22号土坑全景 (南より)



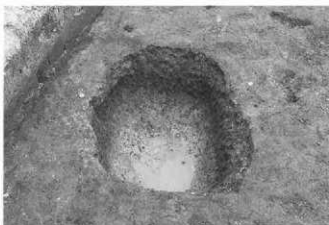
2面21号土坑全景 (南より)



2面21号土坑セクション (南より)



2面23号土坑全景 (南より)



2面24号土坑全景 (南より)



2面25号土坑全景 (南より)



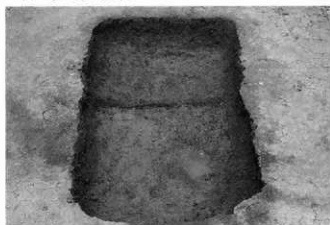
2面25号土坑セクション (南より)



2面26号土坑全景 (東より)



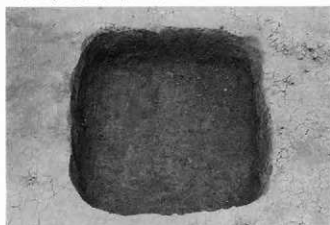
2面26号土坑セクション (東より)



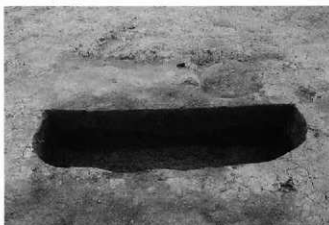
2面28号土坑全景 (南より)



2面28号土坑セクション (南より)



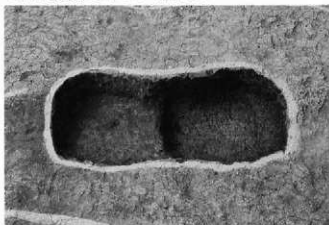
2面27号土坑全景 (南より)



2面27号土坑セクション (南より)



2面30号土坑全景 (東より)



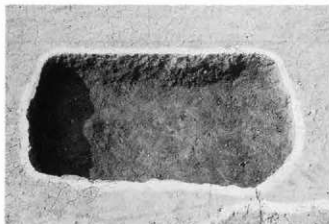
2面33号土坑全景 (南より)



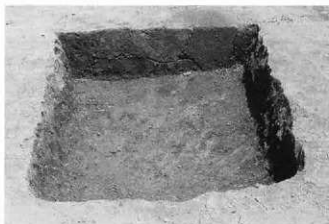
2面32号土坑全景 (南より)



2面32号土坑セクション (南より)



2面34号土坑全景 (南より)



2面34号土坑セクション (西より)



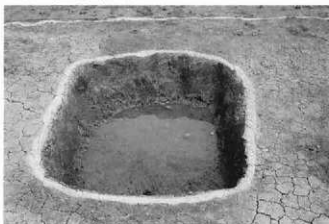
2面35号土坑全景 (東より)



2面37号土坑全景 (北より)



2面41号土坑全景 (南より)



2面42号土坑全景 (南より)



2面43号土坑全景 (東より)



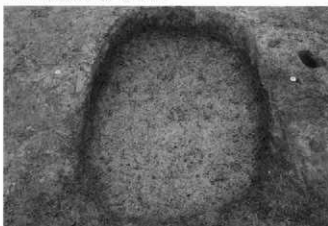
2面43号土坑全景 (北より)



2面44号土坑全景 (東より)



2面44号土坑セクション (東より)



2面47号土坑全景 (南より)



2面47号土坑セクション (南より)



2面48号土坑全景 (東より)



2面48号土坑セクション (西より)



2面50号土坑全景 (南より)



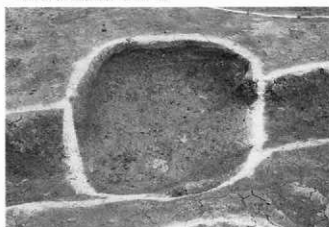
2面50号土坑セクション (北より)



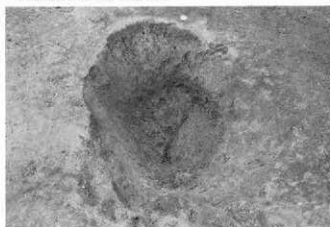
2面51号土坑全景 (西より)



2面53号土坑全景 (東より)



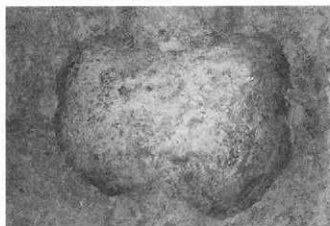
2面55号土坑全景 (南より)



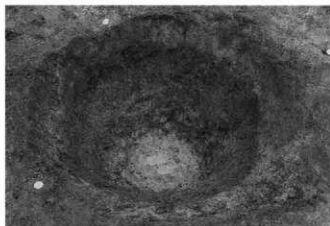
2面56号土坑全景 (南より)



2面57号土坑全景 (西より)



2面58号土坑全景 (南より)



2面59号土坑全景 (南より)



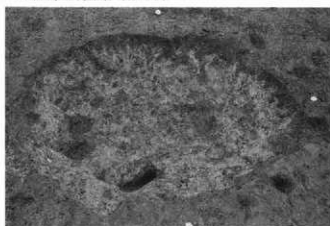
2面59号土坑セクション (北より)



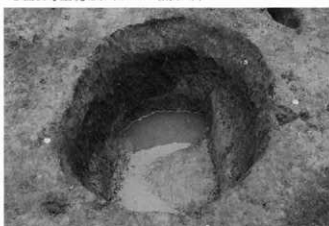
2面60号土坑全景 (北より)



2面60号土坑セクション (南より)



2面61号土坑全景 (北より)



2面63号土坑全景 (西より)



2面64号土坑全景 (南より)



2面64号土坑セクション (東より)



2面66号土坑全景 (西より)



2面68号土坑全景 (北より)



2面69号土坑全景 (北より)



2面78号土坑全景 (北より)



2面13号溝全景 (南より)



2面14号溝全景 (南より)



2面15号溝全景 (西より)



2面15号溝全景 (東より)



2面17号溝全景 (西より)



2面17号溝全景 (西より)



2面16号溝全景 (西より)



2面19号溝全景 (東より)



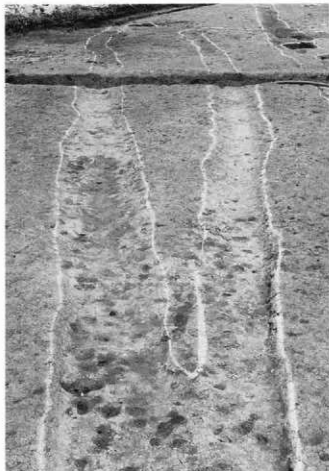
2面20号溝全景 (東より)



2面20号溝全景 (西より)



2面20号溝全景 (西より)



2面27・28号溝全景（西より）



2面29・35号溝全景（南東より）



2面35・36号溝全景（南より）



2面23号溝全景（東より）



2面24号溝全景（北より）



2面33号溝全景（東より）



2面31号溝全景（東より）



2面31号溝全景（北より）



2面32号溝全景（東より）



2面37号溝全景（西より）



2面37号溝全景（北より）



2面1号掘立柱建物全景(南より)



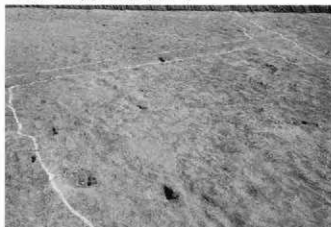
2面1号掘立柱建物全景(南西より)



2面30・31号水田全景(南より)



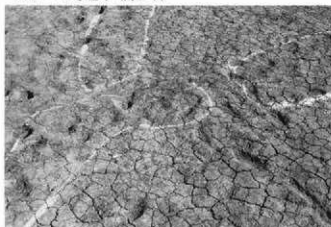
2面5区全景(北より)



2面1・2号畦畔(南より)



2面9号畦畔(南より)



2面23号水田水口(南より)



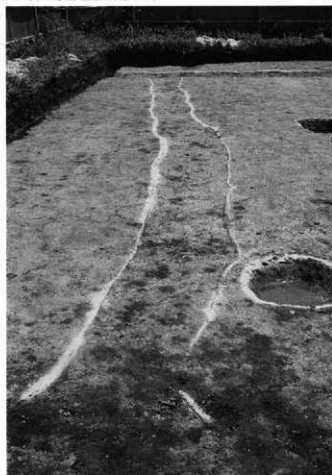
2面古銭(2面遺構外No.24)出土状況



2面1号溝全景 (南より)



2面6号溝全景 (北より)



2面18号溝全景 (西より)



2面7号溝全景 (南より)



2面調査風景 (東より)



2面調査風景 (東より)



3面2・3区全景(上空より)



3面1区全景(上空より)



3面1区水田 (上空より)



3面1区水田 (南より)



3面2区水田 (東より)



3面2区水田 (西より)



3面3区水田 (西より)



3面5区水田(南より)



3面1号畦畔水口(北より)



3面1・2号畦畔・1号溝全景(東より)



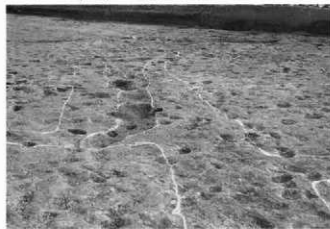
3面1号溜井状遺構・3号溝全景(東より)



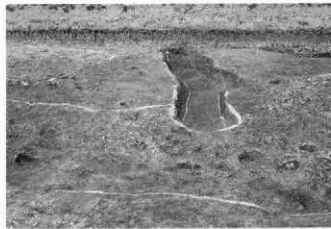
3面1・2号畦畔・1号溝全景(東より)



3面1号溜井状遺構と1号溝接続部分(東より)



3面2号溝全景(西より)



3面3号溝全景(南より)



3面4号溝全景 (西より)



3面4号溝全景 (西より)



3面4号溝全景 (西より)



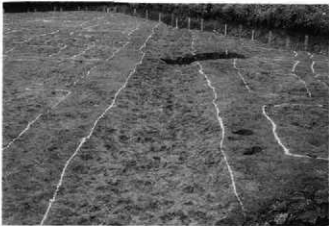
3面4号溝全景 (東より)



3面5号溝全景 (東より)



3面5号溝全景 (西より)



3面8号溝全景 (東より)



3面8号溝全景 (西より)



3面9号溝全景 (東より)



3面調査風景 (東より)



3面1号土坑全景 (南より)



3面1号土坑セクション (西より)



5面2・3区全景 (上空より)



5面1区全景(上空より)



5面2・3区全景(東より)



5面5区全景(東より)



5面1・2・3号溝全景(西より)



5面1・2・3号溝全景(東より)



5面1・2・3号溝全景(東より)



5面2号溝遺物出土状況(北より)



5面1・2・3・5号溝全景(南東より)



5面1号溝A-A'セクション(東より)



5面1・2・4号溝A-A'セクション(東より)



5面2号溝A-A'セクション(東より)



5面1・2・5号溝合流部全景(西より)



5面4号溝A-A'セクション(東より)



5面6号溝全景 (西より)



5面6号溝A-A'セクション (南より)



5面6号溝C-C'セクション (南より)



5面6号溝全景 (南より)



5面6号溝遺物出土状況 (北より)



5面14号溝全景 (南より)



5面4号溝全景(南より)



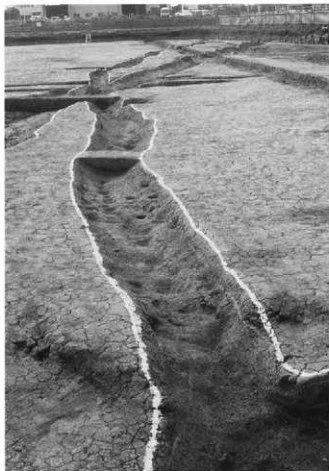
5面4号溝A-A'セクション(北より)



5面4・5号溝A-A'セクション(西より)



5面7・8号溝全景(東より)



5面7号溝全景(東より)



5面12号溝全景(東より)



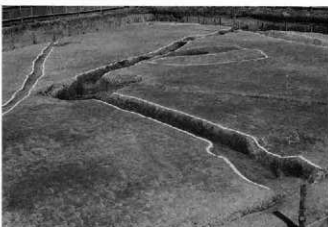
5面9号溝全景 (東より)



5面11号溝全景 (東より)



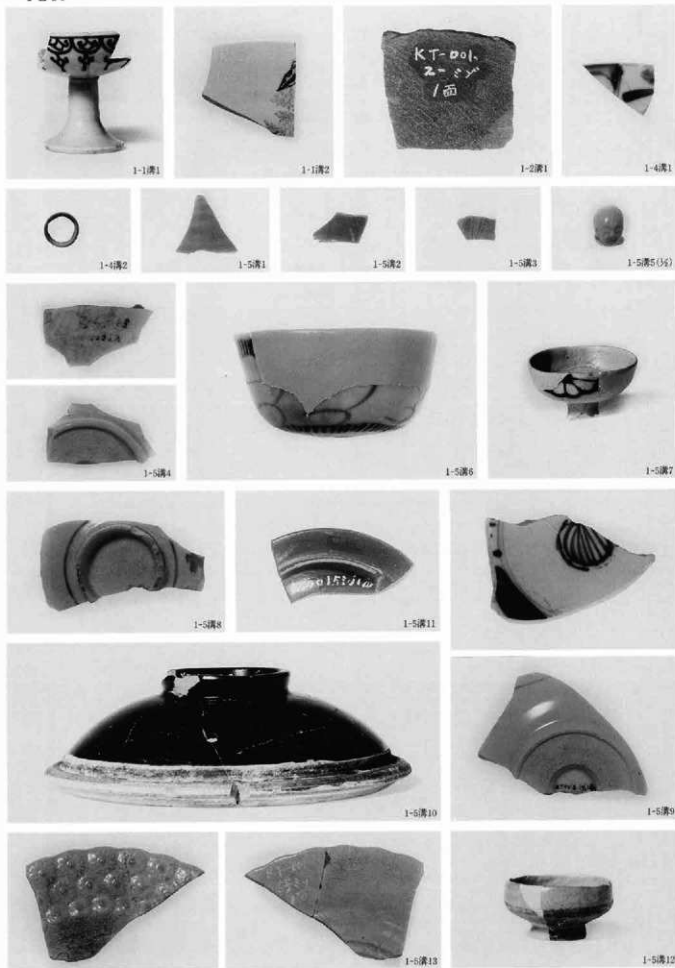
5面13号溝全景 (西より)



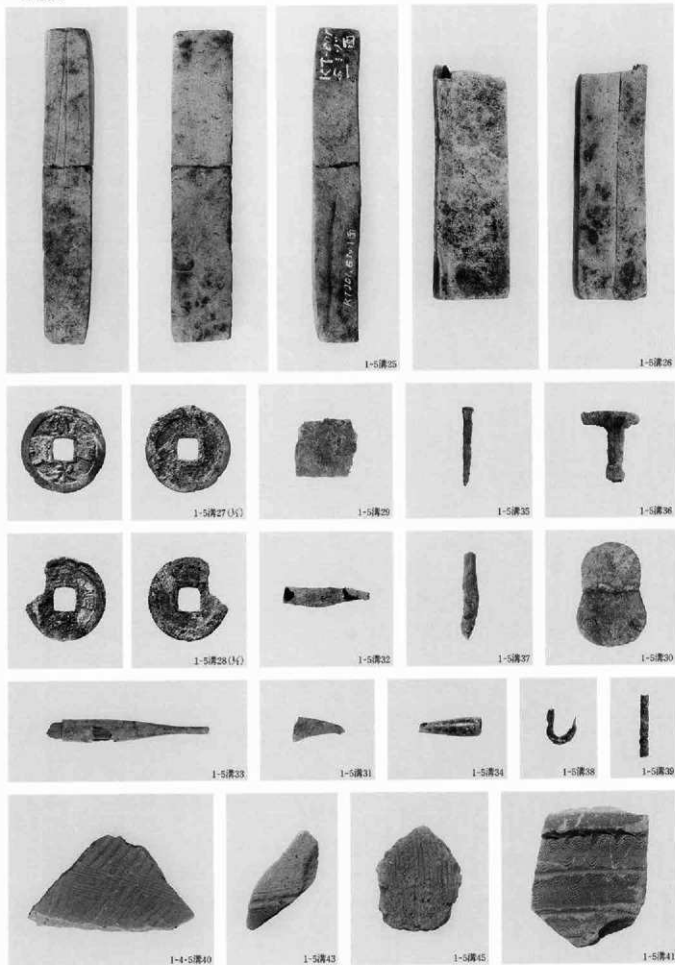
5面10号溝全景 (東より)



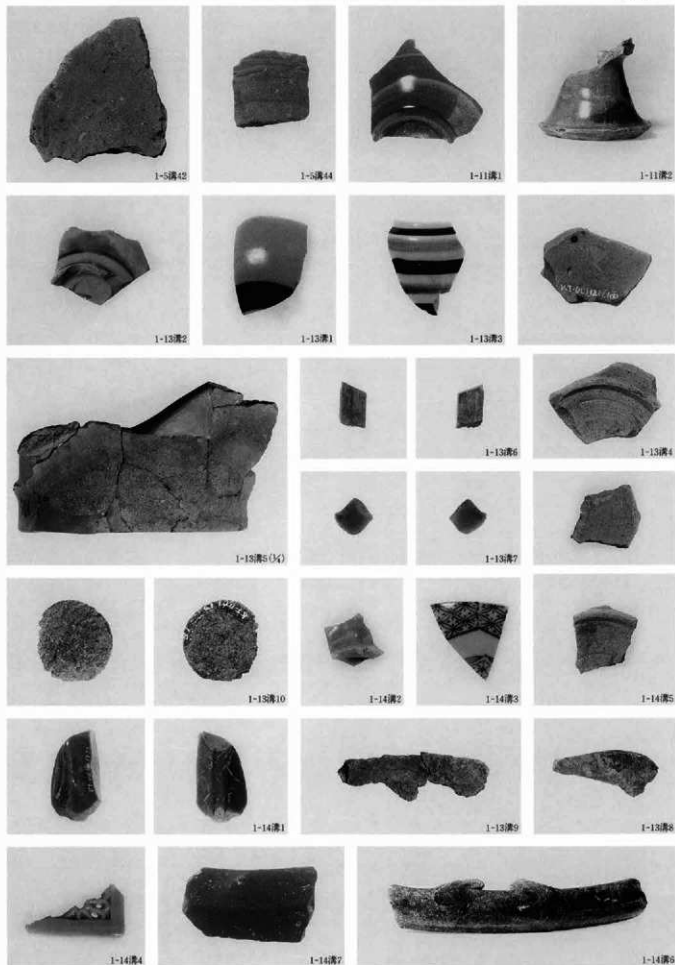
土層サンプル採取状況



1面1・2・4・5号溝出土遺物



1面5号溝出土遺物



1面5・11・13・14号溝出土遺物



1-14溝8



1-14溝12



1-14溝13



1-14溝9



1-14溝14



1-14溝10



1-14溝15



1-14溝16



1-14溝11

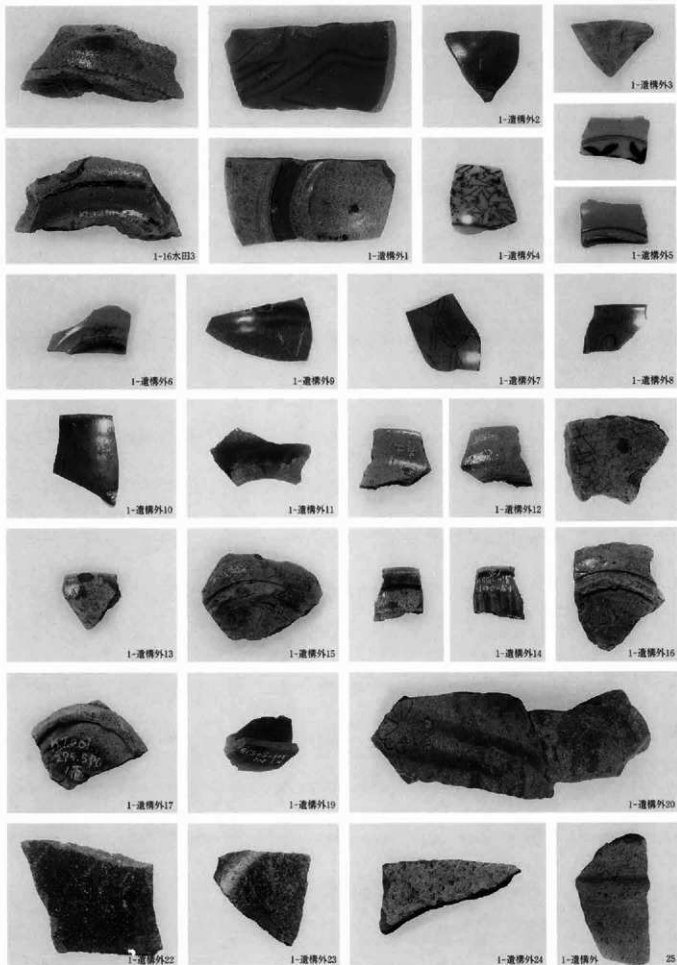


1-16水田1

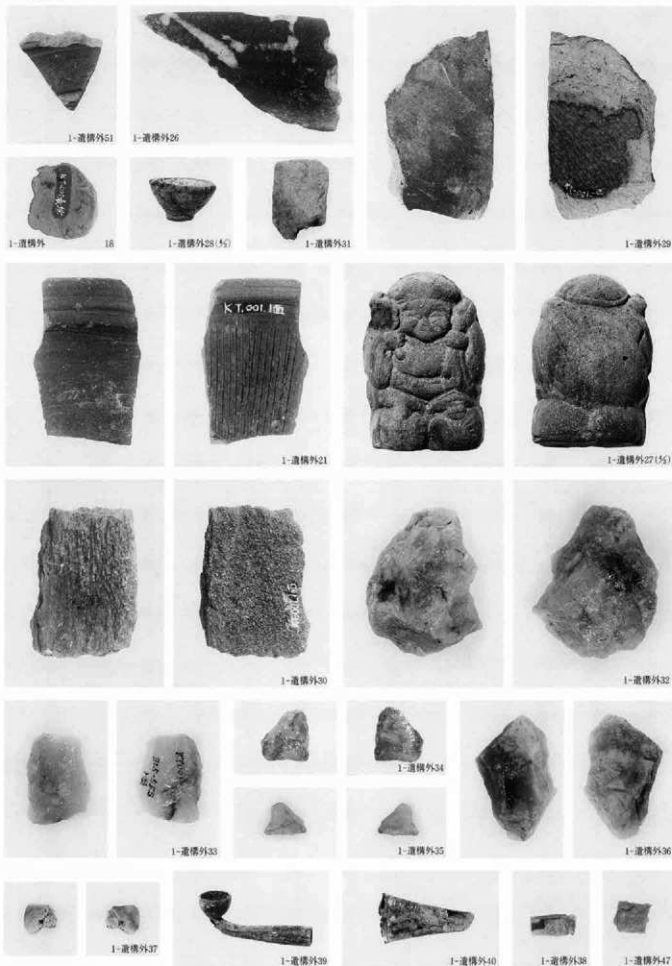


1-16水田2

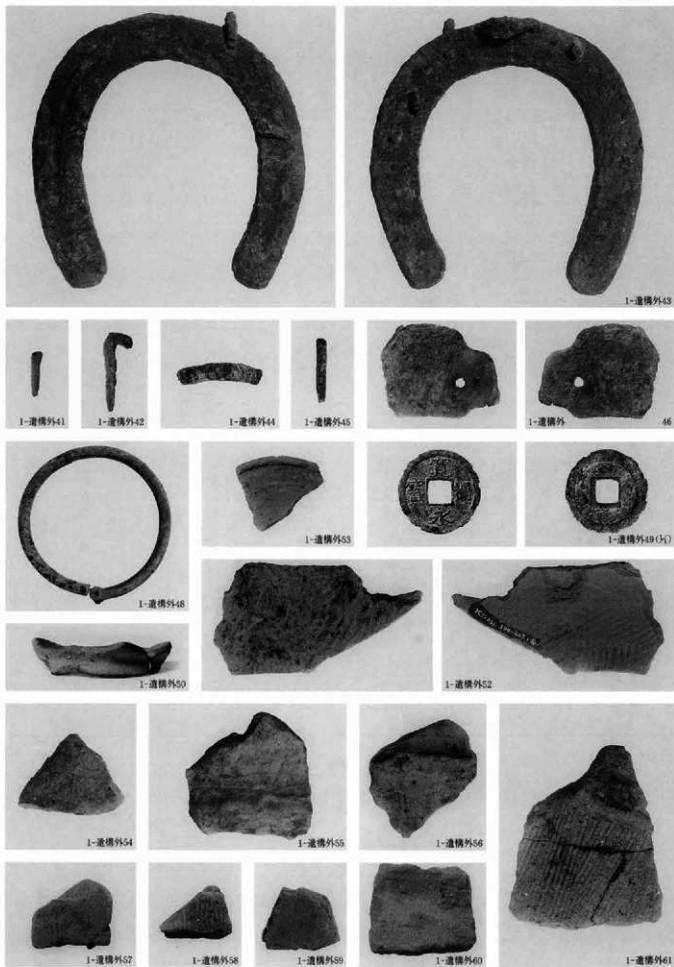
1面14号溝・16号水田出土遺物



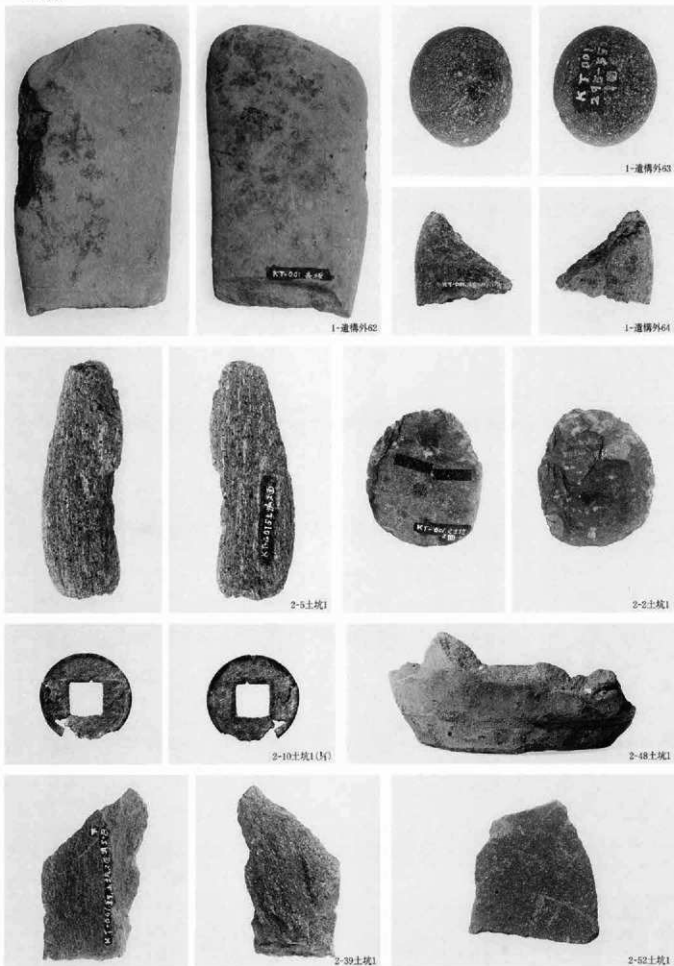
1面16号水田・遺構外出土遺物



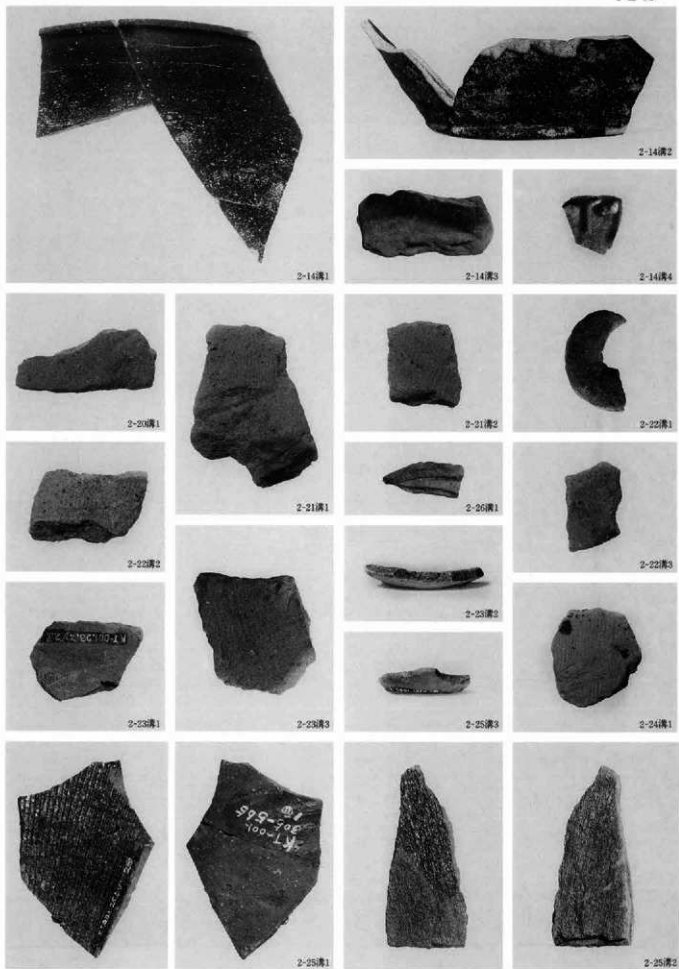
1面遺構外出土物



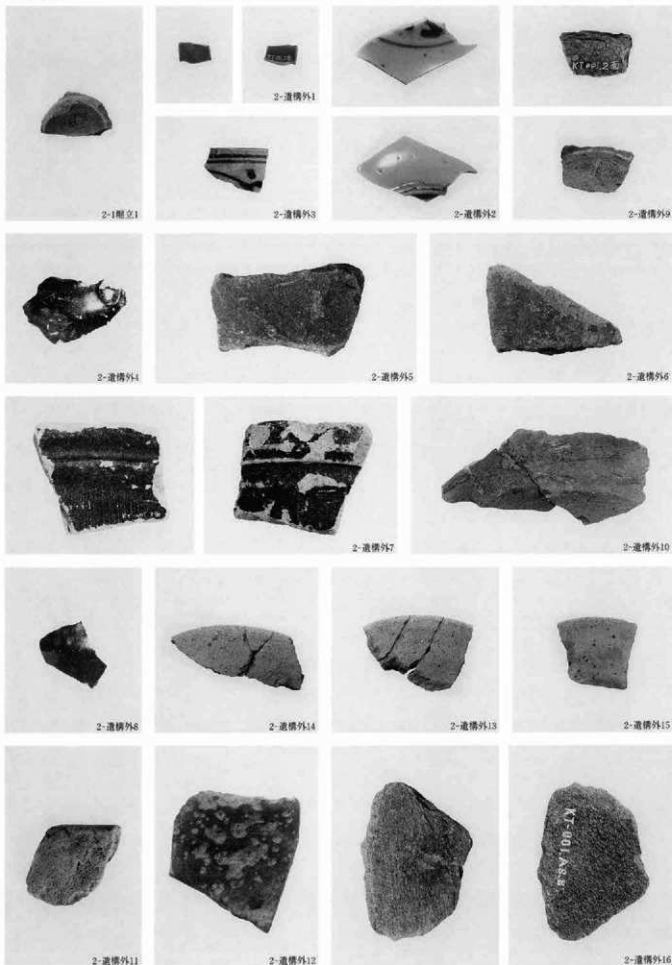
1面遺構外出土遺物



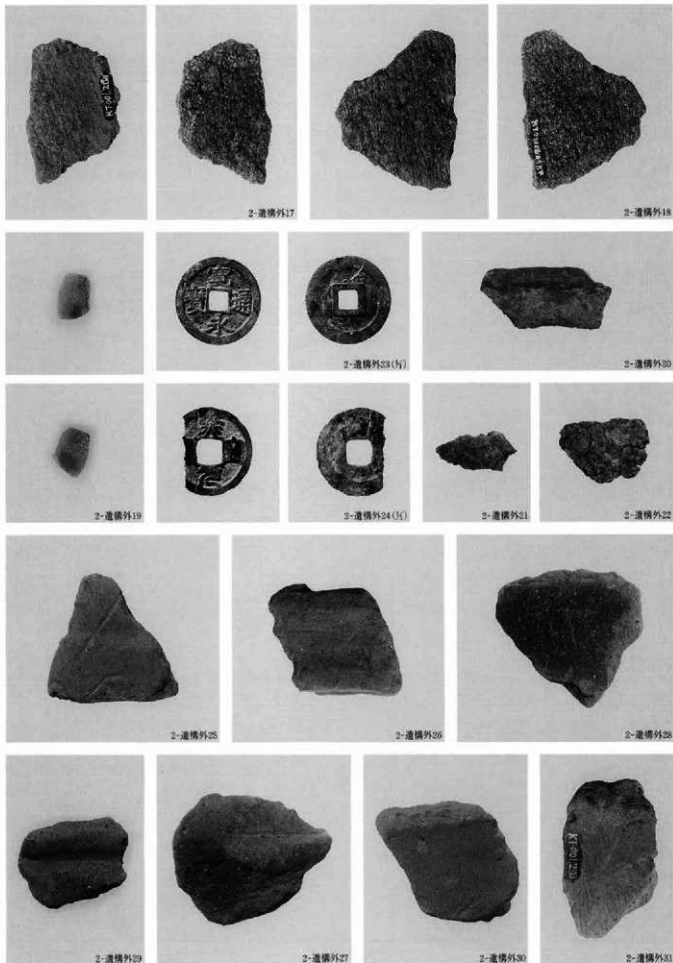
1面遺構外・2面2・5・10・39・48・52号土坑出土遺物



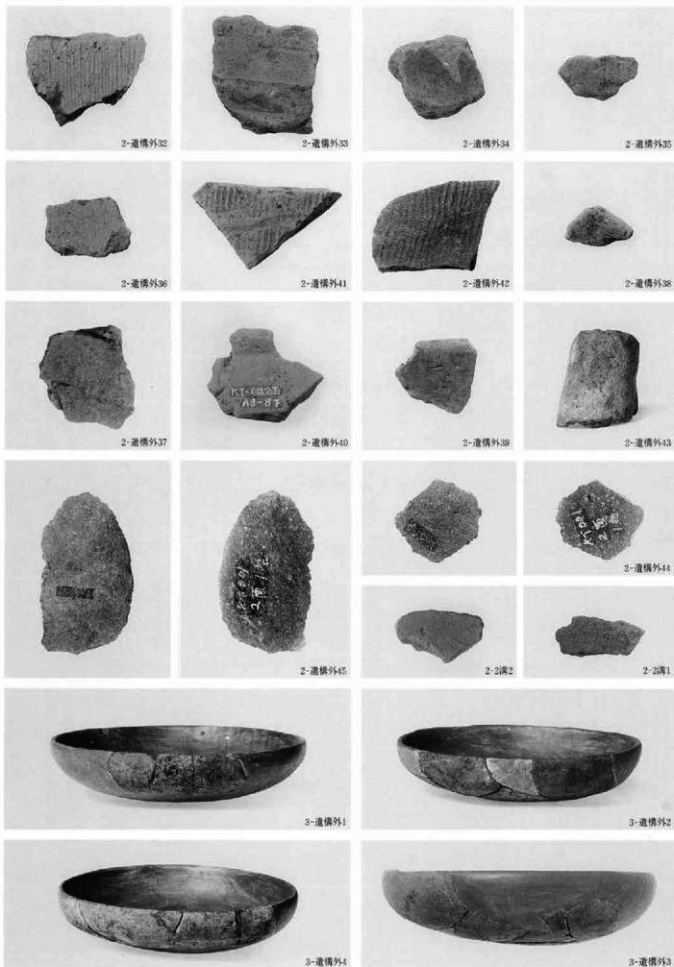
2面14・20・21・22・23・24・25・26号溝出土遺物



2面1号掘立柱建物・遺構外出土遺物



2面遺構外出土遺物



2面遺構外・2号溝・3面遺構外出土遺物



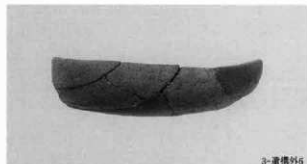
3-遺構外5



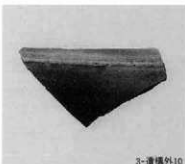
3-遺構外9



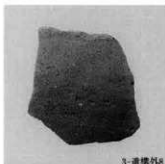
3-遺構外7



3-遺構外6



3-遺構外10



3-遺構外8



3-遺構外12-13-14



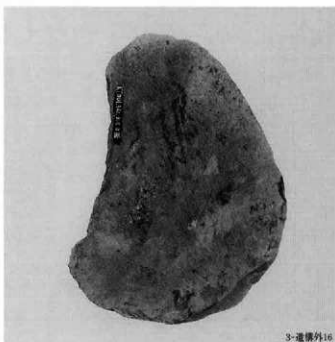
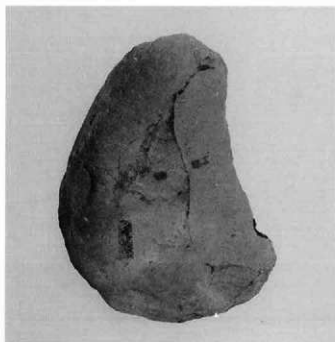
3-遺構外11



3-遺構外20

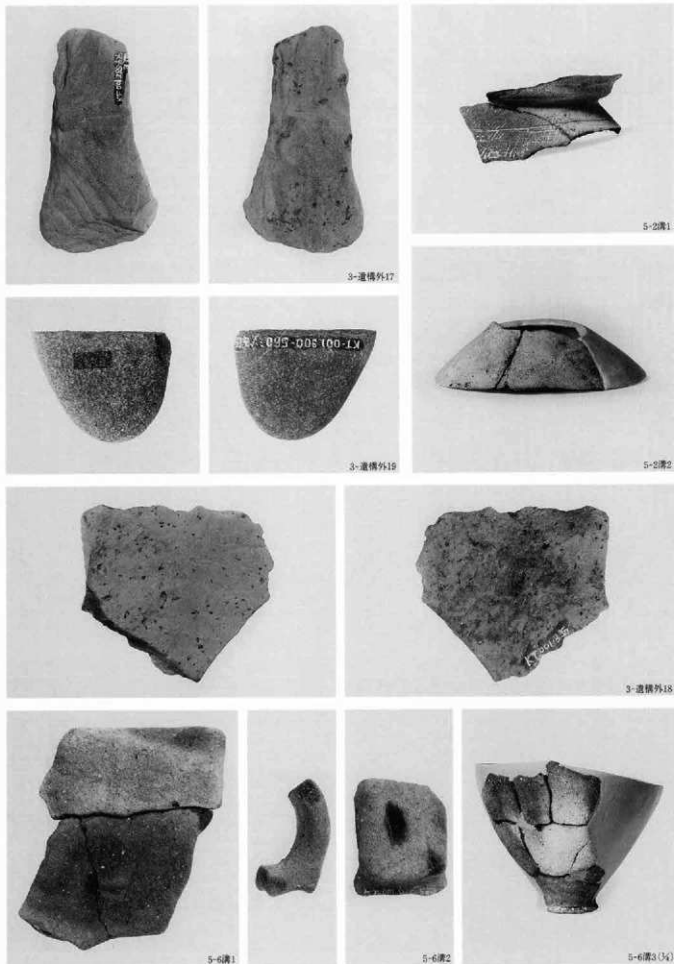


3-遺構外15



3-遺構外16

3面遺構外出土遺物



3面遺構外・5面6号溝出土遺物

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第258集

上滝五反畑遺跡 北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

平成11年12月13日 印刷

平成11年12月20日 発行

編集／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

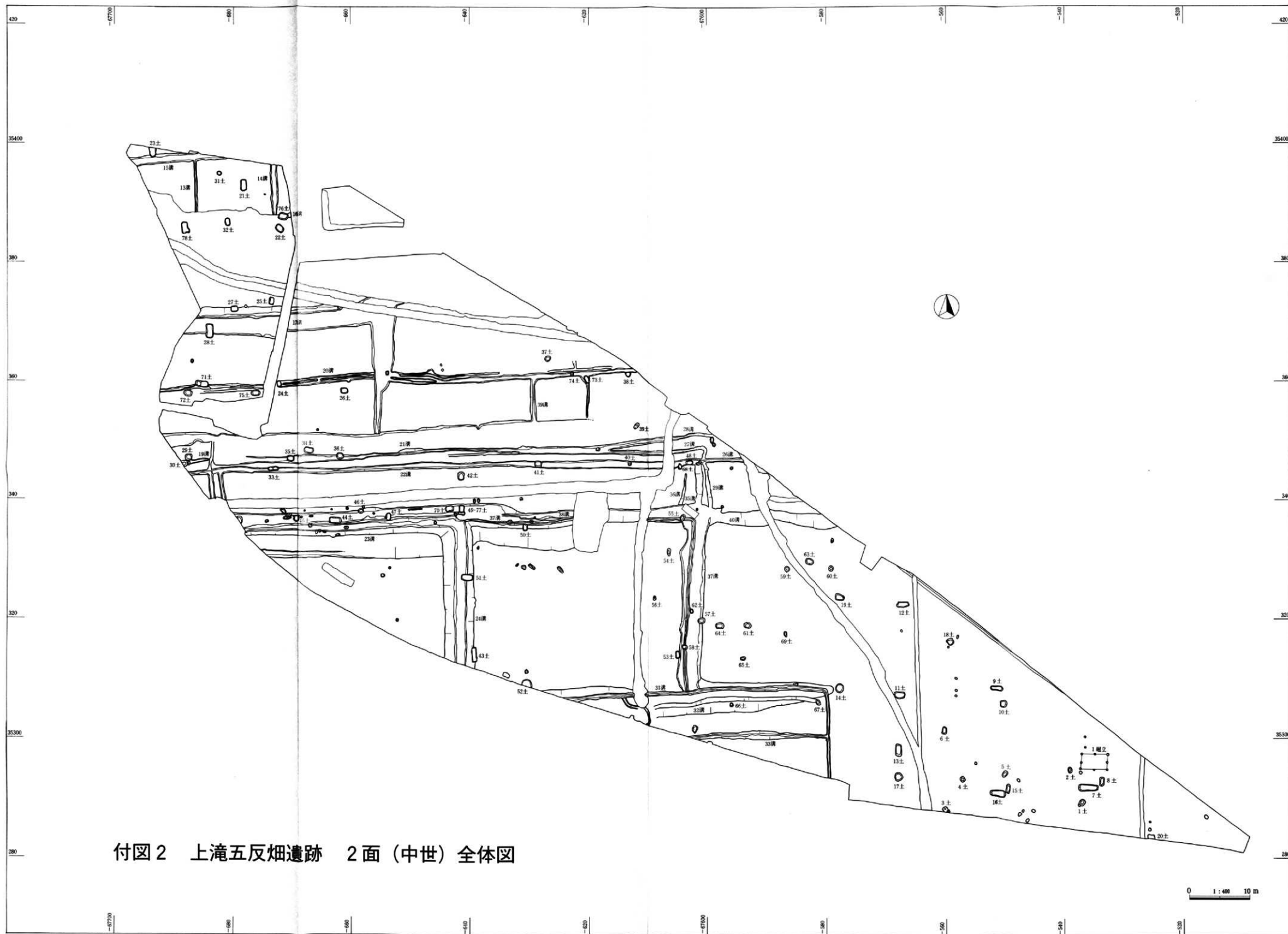
発行／群馬県考古資料普及会
群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所



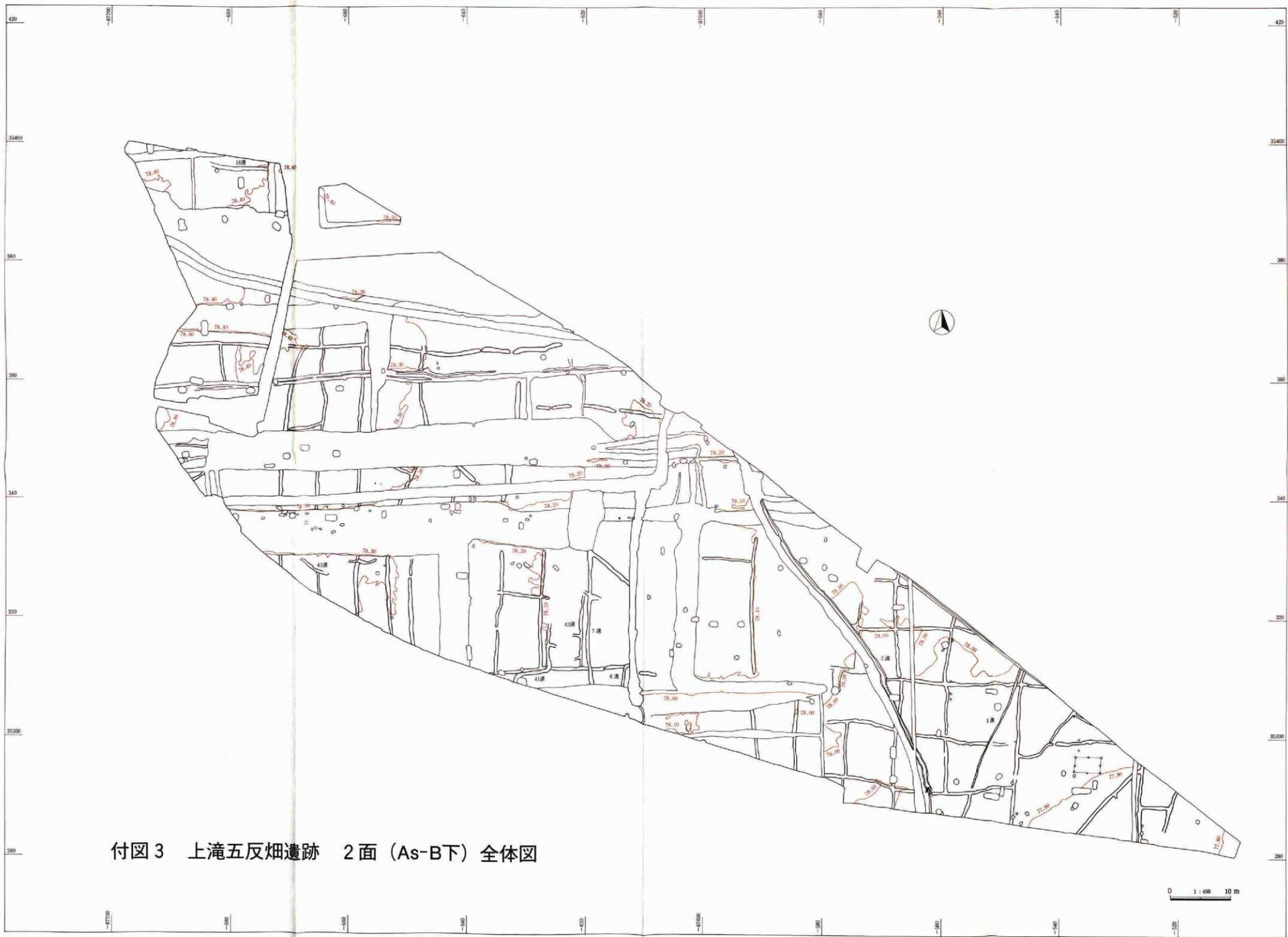
付図1 上滝五反畑遺跡 1面 (As-A下) 全体図

0 1:1000 10 m



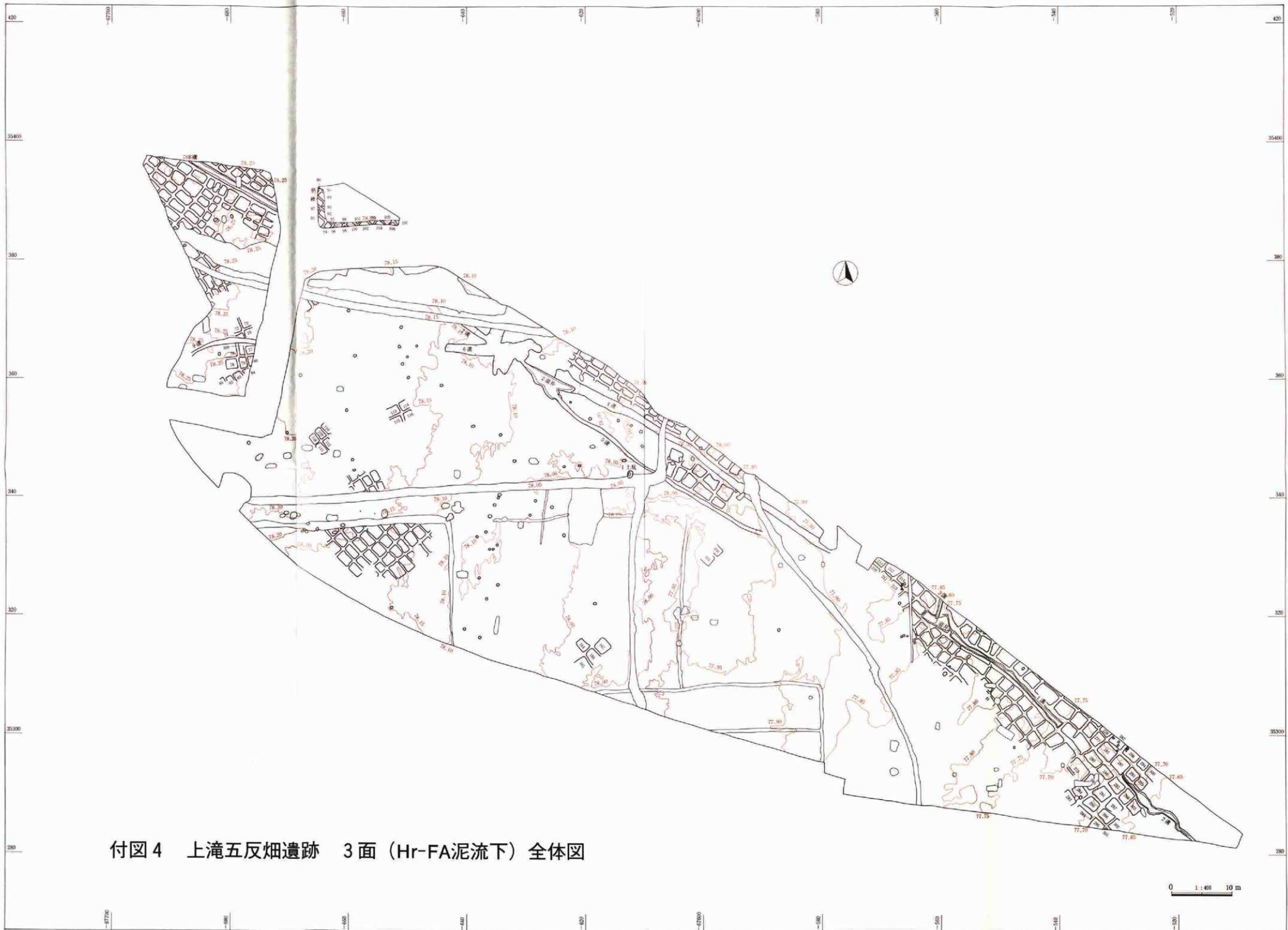
付図2 上滝五反畑遺跡 2面(中世)全体図

0 1:400 10 m



付図3 上滝五反畑遺跡 2面 (As-B下) 全体図

0 1 : 400 10 m



付図4 上滝五反畑遺跡 3面 (Hr-FA泥流下) 全体図

0 1:400 10 m

